

(題字松陰先生筆蹟擴大影)

昭和六年十二月發行

校友會雜誌

第參拾號

山口縣立萩中學校校友會

誠之學舎寮歌

ト調 $\frac{4}{4}$ 成勢よく 文學博士 兼當詩佐作曲

1. 1	1. 5 6. 1 6. 1	2 - 0 3. 5	5 - 5. 3 5. 3	2 - 0
シヅ	キノヤマモ	ト	ゴソ	ノテン シユ
1. 1	1. 5 1. 2 1. 2	3 - 0 3. 6	5 - 5. 3 5. 3	2 1 - 0
クモ	キニアフーギー	シ	コジョ	ノホー トリ
5. 1 1 1 1 1. 6		6 5 3. 5 3		1 2. 3 5 0
アマタ	ノイジ	シノウマレ		シキセキ
5. 2 2 2	1. 6 6. 5 3. 5	6 5. 3 2 6. 1		1 - 0
セイシノ	マナビヤヲ	シク	ソビー	ユ

誠之學舎寮歌

河野通毅作歌

一、志都岐のやまもと 雲井に仰ぎし 数多の偉人の 誠之の學舎	五層の天主 古城のほとり 生れし遺跡 雄々しく聳ゆ	二、阿胡のあらなみ 師友の情に 幾多の友垣 誠之の學舎	枕に響くも 福愁ははれつ 樂しきまとい ときはに榮ゆ	三、質實義勇は 百萬一心 拳たづ澤間に 天にも聞えん	猛士のさとし 藩祖の教 鳴くなる聲の とよもせいざや	四、誠之の道こそ 明るく正しく 理想を追ひつゝ 空にも響けと	我等が行く手 寛に高く 學ぶ我が家を 誰へんいざや
---	------------------------------------	--------------------------------------	-------------------------------------	-------------------------------------	-------------------------------------	---	------------------------------------

朝會朗誦

吉田松陰

一、士道莫大於義。義由勇行、勇因義長。

一、士行以質實不欺爲要、以巧詐文過爲恥。

光明正大、皆由是出。



明治大帝の御盛徳

會長 河内 才三

明治節の佳辰に當り我國民が想起するは 明治大帝の御盛徳と御鴻業である。大帝の御盛徳と御鴻業の重なるものは今更贅言を要せざるのであるが、今茲に語らんとするのは金子子爵門外不出の談として嘗て乾王學士より紹介された 明治大帝とメリケン松と題する事績で 明治大帝の御盛徳の一端を窺ふに足るものである。

彼の相州久里濱は、安政の昔亞米利加合衆國の使節ペルリが上陸した地であることは能く人の知つて居ることである。今此處にペルリ上陸の記念碑が立派に建てられてある。此記念碑は明治三十四年日米協會長たる金子堅太郎氏の盡力により同協會が建てたものである。明治大帝は此事を聞き召され御内帑金を御下賜相成つた。愈々其年の七月除幕式が行はるゝに當り此事が米國に傳はり、同國政府は大に此舉を賛し、當時の東洋艦隊を以て此除幕式に參列せしむることゝし、其司令官には海軍中將ロジャーク氏を任命した。此人はペルリが日本に來た時艦隊附少尉候補生であつて又實にペルリの孫に當る人である。米國政府は特に此由縁ある者に參列を命じたのである。此事が又 明治大帝の上聞に達し、宮中に於かせられても夫々歡迎の御準備があり、特に建設委員長たる金子子爵を召され十分歡迎すべき旨の御沙汰があつて、同子も感激して御前を辭せられたが、其後數日更に田中宮内大臣からの御使で宮内省に出頭

せらるゝと又重ねて 大帝より左の御沙汰があつたと宮内大臣から傳へられた。

『ペリ提督來朝の當時同人より徳川幕府へ種々と土産品を持参した。其中にメリケン松の木材があつて、此は維新の當時幕府より宮内省に引續ぎ、今に其儘に保存せられて居る筈である、此メリケン松を金子に遺はし是で何か記念物を作り、米國提督への土産とさせよ。』と斯の如き優渥なる御諒があつたが、此メリケン松の事は宮内大臣も内匠頭も恐れ多い事であるが初て知つたことで、種々書類等を調査した結果、漸く深川倉庫内に格納してある事が分つて、一同大安心で、愈々御沙汰通り之を金子子に下賜された。かく保管の責任者たる宮内大臣も内匠頭も忘却し切つて居つた事をよく御記憶遊ばされて居る。明治大帝の博覽強記には、有司の面々實に恐入つたと云ふことである。尙それにも増して難有きは『思出深い祖父の記念物を以て其孫たる提督に土産に取らせよ。』との誠に情味豊かな御心遣である。斯ふ云ふ事は實に人情の眞底を御體得になつた御方でなければ到底行届かぬ事であるが、明治大帝には天然自然の御情味の發露として、此の如き御沙汰があつたので、之を承つた金子子も實に感激無量であつたと云ふ。偕此難有い思召を顯すべき記念物として何が良らふかと金子子も大に苦心せられたが、偶々ペリ提督來航當時幕府の命に依り其實況を描寫したる繪師下岡蓮枝氏が尙存生して淺草に居ると云ふので、親しく之を訪ねて種々話を聞かれた處、幸にも其時の下繪が保存されて居るので之を見られたが、久里濱の山の上から其情況を寫したもので、遙か沖合に黒船が數隻碇泊して居り、之を繞りて各藩から出した和船に各其旗印を以て滿艦飾をなし、黒船を警護して居る有様や又海濱に幔幕を打廻しペリ提督一行を迎へた接見所等の状態が如何にも能く畫かれてあるので、更に之を同氏に淨書せしめて額に仕立て、其額縁の材料として彼のペリ献上のメリケン松を使用し、且つ 明治大帝の厚き思召の次第を記述してロジャ―提督に贈られた處、同提督も 大帝の優渥なる思召と當時の情況を偲ぶ絶好の記念とし、非常に感

激して之を持還られたと云ふ。其後數年彼の日露戦役の當初、金子子が重大なる使命を帯び渡米せられた時ロジャ―提督は恰も紐育鎮守府司令長官となつて居られたが、子爵が同氏を訪問せらるゝと前記の記念扁額が廳舎正面の所に掲げてあつたので、是に再會せられたる子爵は何とも云ひしれぬ感慨に打たれ思はず涙ぐまれたと云ふ事である。而して同提督は子爵の困難なる其使命に對して蔭ながら非常なる援助をせられた由で、是も 明治大帝の御心遣ひの結果であると同氏は大に感佩して居られる。以上は此の御話の大體であるが、何たる美しき御事蹟ではないか。何人も此の美しき御事蹟を聴き眼を潤さざる者はあるまい。

實に 明治大帝の御盛徳は日月の如く、之を仰げば愈々高く、之を拜せば彌々尊くある。本日の佳節に際し此不世出の英主の御徳を追慕奉讃し併て我が皇室の彌榮えに榮えつゝあることを祝するのである。

(昭和六年十一月三日謹誌)

弓道に就て

特別會員 伊藤 徹 成

諸種の運動は、各一長一短あるものである。剣道にても兒童の頭骨軟弱なるものには過激である。柔道でも走技でも心臓の弱い者は避けなくてはならない。強弱何れの者にも適するのは弓道に及ぶものはなからう。弓道は強者の運動としては、不充分だと云ふ人もあるが、之は弓道の全部を知らない人の言ふことである。然し本校に於て弓道部を創設したのは主として弱體生徒の運動たらしめんが爲めである。弓道の姿勢は兩脚を張りて、全身の體重を股間に落とし、胸を開きて、肩胛骨を後に強引するものであるから、全身の筋肉を活動せしめる。胸部の發達を促して、胸廓を擴げる。呼吸運動を盛にして呼吸器を強壯にするものである。弓道が如何に胸廓の擴張に効力あるか、左に大日本弓道會報告の表を示さう。

十二名の學生四週間に於ける胸圍の發育表

年 齡	身 長		胸 圍		身長に對する胸圍の割合	
	八月一日	八月二十八日	八月一日	八月二十八日	八月一日	八月二十八日
十四年	四、四〇	四、四一	二、二四	二、二二	四九	五〇
十五年	四、三六	四、三七	二、二〇	二、二七	五〇	五一
十六年	四、五九	四、六一	二、一五	二、二三	四六	四八
十七年	四、九五	四、九六	二、四八	二、五四	五〇	五一
十八年	五、三二	五、三四	二、三七	二、四六	四四	四六
十九年	五、八一	四、八三	二、一三	二、三一	四四	四八
二十年	五、一二	五、一四	二、五〇	二、五八	四八	五〇
二十一年	五、一四	五、一四	二、五〇	二、五八	四八	五〇

年 齡	身 長	胸 圍	身長に對する胸圍の割合
十九年	五、一一	五、一三	二、四三
十九年	五、一九	五、二一	二、三四
二十年	五、〇九	五、一〇	二、五〇
二十年	五、〇四	五、〇六	二、四七
二十一年	五、三〇	五、三一	二、五二

- 一、この十二名の學生は初めて入會して弓を習うた者。
- 二、身長増加は二分乃至二分なるに、胸圍の増加は最小六分にして、最大一寸八分の激増を來せるは、大に注目すべきことである。
- 三、身長と胸圍との割合の増加も著しく、虚弱なる者ほど其効果の偉大なることを證明してゐる。
- 四、この増加の程度は練習の多少にもよる。一日の矢數四十射位から百射以上の者もある。
- 五、一ヶ月に足らざる日數の間に、胸圍が一寸八分も増加せるは、實に驚くべき發育と云はねばならない。體重及び力量等も之に準じて非常に増加したことは、争はれないことと思はれるが、會にて之を測らないのは、健康の標準を、筋骨と力量に置かずして、寧ろ内臟機の健全を目標としてゐるからである。其内臟機關を健全にするには靜的運動によるより外に道はないのである。而して弓道は其最良法であつて、其効果は胸圍の發育が證明してゐる。又胸圍の發育の程度は、身長と比較して見るが最も好都合であると信ぜられるが故に、之を以て身體強弱の程度を知る方便に供したものである。而して普通吾々が強壯體と稱するには、胸圍が身長五〇%に達して居らなければならぬ。東京市の某中學某年の體格検査の平均を示せば、

東京市内中等學生の體格

年 齡	身 長	胸 圍	身長に對する胸圍の割合
十三 年	四、五五 ^尺	二、一九 ^尺	四八%
十四 年	四、七一	二、二一	四七
十五 年	四、八九	二、三一	四七
十六 年	四、九六	二、三三	四七
十七 年	五、一三	二、四一	四七
十八 年	五、一五	二、四二	四七
十九 年	五、二二	二、四四	四七
二十 年	五、二六	二、四八	四八
二十一 年	五、三〇	二、五〇	四七

この表に示す數字を東京市内中學生の標準と見ますと、其平均は殆んど四七%に過ぎません。無論その中には五〇%になつてゐる者もあらうが、之は極めて少數であり又甚だしきは四三%或は四四%位の者も餘程あるに相違ないのであります。之を以て見ても、吾等は之等學生の體格を増進させることが急務であります。又中等諸學校に於て年々増加する病死或は病氣のため半途退學者に就て考ふれば、吾等は是等救済法の一日も等閑に附すべからざることを感じます。尙左掲二表により弓道の練習が吾人の胸圍を強壯の標準に達せしめることが了解されると思ふ。

弓道練習中學生の體格

年 齡	修 業 期 間	身 長	胸 圍	胸圍と身長との割合
十六 年	四ヶ年	四、八〇 ^尺	二、四九 ^尺	五一%

弓道練習中 年 者 の 體 格

十七 年	二ヶ年	四、九五 ^尺	二、五五 ^尺	五一
------	-----	-------------------	-------------------	----

年 齡	修 業 期 間	身 長	胸 圍	胸圍と身長との割合
三十 年	四ヶ月	五、六〇 ^尺	二、七八 ^尺	四九%
廿五 年	八ヶ月	五、四二 ^尺	二、七五 ^尺	五〇
廿五 年	一ヶ年	五、四七 ^尺	二、八一 ^尺	五一
廿八 年	一ヶ年	五、五八 ^尺	二、七九 ^尺	五〇
廿六 年	三ヶ年	五、二〇 ^尺	二、六五 ^尺	五一
卅三 年	五ヶ年	五、三〇 ^尺	二、七〇 ^尺	五一
四十三 年	十五ヶ年	五、二五 ^尺	二、七八 ^尺	五三

右二表の示す如く弓の練習によりて吾等の胸圍は皆五〇%以上に達することを斷言し得るのである。

こゝで一寸現在我日本に於ける結核患者のことを考へて見たい。我が同胞が毎年約三十萬近くもこの病氣の爲めに死んでゐる。世界中どんな戦争だつて一年にかゝる多數の死者を出したことはない。この三十萬の生靈の多くは少青年若くは壯年者である。これは將來大に活躍せんとする者、乃至は現に活躍すべかりし者である。經濟的に考へて國家の損失は大なもの云はざるを得ない。この病氣での死者の數から推して、其死に至らざる重病者若くは輕症者を併せ計算したれば、死者の十倍と見て三百萬人となる。東京市全人口の一倍半であります。全國の患者が全部一ヶ所に纏つて居たら、實に驚くべき現象を見るでせう。東京全市が結核患者の街だと思つたら戦慄を禁じ得ないでせう。これ等患者の藥價を最小

限一人一日廿錢と見積れば三百萬人にて一日に六十萬圓となる。一ヶ年に各人は七十三圓、全部にては二億一千九百萬圓この莫大な金額が不生産的に使用消費せらるゝのである。加之是等の人々は全く業務に従事し得ぬ者と見れば、一日何百萬圓の缺損を生じてゐると云ふことが出来る。これと前の藥價と通算すれば、一年十餘億の損失で政府一ヶ年の經常費豫算に近い數字に達する。國家經濟の上より之れ等患者一人を救へば、吾人は四百八十三圓を國家に献納することになるのである。

吾等の祖先は弓矢を取つて強敵に對して之を倒しました。吾人今日の強敵は主として呼吸器病である。(其他胃腸、神經病等も弓矢によりて征服し得らるゝが)年々三十萬人の生命を奪ふこの強敵を弓矢によつて征服せんとするはこの武器の運用如何にあると信するのである。同感の士は奮つて弓道に來り修道せられんことを望む。北里傳染病研究所長北里博士書を日本弓道會に寄せて云く「胸部骨格の發達を促し、その筋肉を強壯ならしめて、肺の機能を盛ならしむるは結核豫防上最も必要なり。弓道はこの目的に適するものゝ一運動法なれば、學生兒童にこれを獎勵するは甚だ有益なりと信す。」

弓道と弱者強者

本當を云へば、身體の強壯な人は運動をしなくても差支へはないやうなものである。身體虛弱な者は運動をして體力増進を計らねばならぬのである。身體虛弱な者とは大抵消化器とか呼吸器とか血液循環器とかに障害あるものである。これ等に適した運動は弓道を措いて他に求めることは出来ない。弓道ならば六七歳の子供から設備次第で出来るからである。又これ等虛弱者は多くの實驗によりて不思議な程健康になることが證明せられてゐる。この虛弱者にとつて最もよいことは弓道が戸外の塵埃のない處で靜に行はれることを數へねばならぬと思ふ。殊に日本の女子には弓道が最もよく適當してゐると考へる。世の流行につれて近代日本の女も、男の眞似をして、競走なんかに熱中して、大根の様な大きな脚の體格を作つて、外觀の美を稱へてゐるが、實際内臓から見た眞の健康と云ふものはどうであらうか。弓道によりて姿勢を正し

くし、胸圍を擴めることが出来れば充分ではないでせうか。必ずしも人見様の様な偉大な體格になつて早世しなくてもいいでせう。

どんな健康だつて精神に疲勞を感じないことはない。退屈して勉強する氣が起らないこともある。かゝる場合弓矢を取つて數射を試みる時は、直に心氣一轉朝早く起きたる如き新鮮の氣分となることが出来る。疲勞倦怠は血液の停滯に依るものだから、弓道の全身運動と一射毎になす深呼吸にて血行を旺盛ならしむるからである。すれば繁劇な事務に追はるゝ人、過度に腦を痛むる者には弓道の練習は最適切なる療法であると信する。尙眞の健康者にして運動の不充分を感じる者は、次に解く射の眞髓に達する様努力あらんことを希望する。

射の眞意義

射とは、矢を弦に番て、之を放つもので、射自體に於ては何等の意義はない。馳射、騎射、搏射、賓射、圍射及戰爭、狩獵の射など何れも射を目的にして、之を樂むと云ふのが普通で、射の中を以て満足し、射の中を以て射の事終れりと考へてゐる。唯射の中が射の最高にして最終の理想ならば、原始時代及現今未開の民族が不完全なる弓矢を以てするものに、吾人は到底及ぶべくもない。又矢場の一女子は遙に吾等より高き中率を持つてゐる。吾人の目的とする強敵は、吾等體内に心中に蟠居するものである。外にあらすして内にあるのである。故に射の中は本にあらすして末である。目的にあらすして射の一現象に過ぎないのだ。一度弓矢を取つて立てば、吾人の心中、富貴なく榮辱なく、何等の羈絆、何等の束縛、何等の畏怖なく、絶對無碍の境に住して、五尺の小軀は宇宙に圓融し、吾の外に天地なく、天地の外に吾無きの境地に入るを要とする。然かも矢を發するに際しては、周到の用意と、弓を用ゆるの力とを要する。茲に精神と肉體との勞苦乃至運動を生ずるのである。この勞苦乃至運動は、吾人の平靜なる心に波動を生ずる。一碧萬里の水面に波瀾を起すのである。眞如の鏡面に無明の影を宿するのである。此障礙に打勝つて、この勞苦を絶して、常に心の平靜を保つて、自我を擴張して

天地と圓融するに至らねばならぬ。此の鍛錬と此實驗との段階的會得をすることこれ即ち射の眞意義である。この意義相通する者は、必ずしも弓矢を持せずとも射道を解すると云つて差し支へない。彼の中を主とするものゝ如きは、其身体に多少の缺陷を生ぜんか、之によりて其射は終に生命を失ふものである。吾が射を學ぶものは、理想をこゝに精勵鍛錬せられんことを希望する。

心得

- 一、夜叉も佛も打挫く大見識と大勇猛心肝の事
- 一、何處迄も死力を盡くして我獨特の弓を射申す可き事
- 一、以上の心得にて射申すときは技も神も自然に磨け候決して故に磨くと心得間敷事
よく引きて引くな抱へよ保たすに
離れを弓に知らせぬぞよき

吾が食住觀の斷片

特別會員 伊藤徹成

一、健康と食物

誰も健康と長命を希はぬはない。その健康と長命の根本は食物にありと考へるが普通である。故に所謂文化が進むと共にこの健康長命の源たる飲食物が享樂的にとられる様になつた。田舎者の私などは、たまたま東京に客となつて、一流二

流所の料亭に案内せらるゝや、其享樂的飲食者の群衆に驚嘆せざるを得ない。又民衆的飲食店の混雜々踏に愕然たらざるを得ない。嗚呼哀れなる人達よ。この人達は食物に對する錯覺に陥つてゐる。健康を欲して食ひ、而して不健康を求めてゐる。長命を希つて短命を求めてゐる。花に戯れる短期の享樂に満足するの蝶を以て甘んずる者であるか。記憶せよ。邪食と亂食と大食はあらゆる疾病の源、滋養過多は老衰と短命との因なることを。

二、人口と食物

我國は人口が毎年何十萬も殖えて、其主食物たる米はそんなに殖えはしない。當然食料難が唱へられる。これも食物と健康に對する認識不足の杞憂に過ぎない。乞ふ吾人現在の食量を半減せよ、否三分の一に減ぜよ、更に進んで時々斷食せよ。白米を廢して半搗又は玄米にせよ。之を實行するの勇ある者は健康と長命の幸福を與へられる者だ。而して日本現在の人口が三倍に増加するとも食糧難の聲も發する必要はない。こゝに一粒の種子が自然の恵に發生すれば、その土地其空中に之が必要とする榮養を包藏給與するは、抑大自然の大真理である。我帝國に年々人口の増殖するは、吾帝國之を必要とし、又之を養ふの力量あるべきが自然の大法である。小賢しき人爲の政策は害ありて益なきもの、唯吾人正食の理を覺らず、偏食邪食して他數人分の糧食を食食する者ある時、大自然の刑罰は、先づ其掠奪者に、次に其社會に加へらるゝものである。これ現今健康保健の問題、人口問題、糧食問題の真相であらう。

三、肉食と思想

今日は思想國難時代だと云はれて、思想善導の施設事業が官民間に行はれてゐる。一方には誤れるフオイトの營養標準が無批判に受け入れられて、やたらに牛肉を頰張つてゐる。蛋白質は牛肉牛乳鶏卵の中に最も多く含んでゐると教へられて、やたらに肉食へ肉食へと走つてゐる。思想善導を唱へる者、未だ嘗て食物に言及せる者無きは何故なるか。肉食を攝

せずして、思想善導を説くは木に椋りてを魚を求むる如きものだ。之を疑ふ者は、試に猛獸猛禽の雛兒を捕へて之に肉類を與へず、穀物野菜のみを以て育て見よ、彼等の獠猛性は影を潜めるを見るであらう。故にお釋迦様は肉食を禁ぜられてゐる。滋養過多の不正食は、胃腸病の主因をなすもの、而して世の殺人強盜などの重罪犯人の胃腸は大部分頑屈腹の患者であると聞いても、思半ばに過ぎるものがある。かく肉食過多——蛋白の自家中毒——種々の恐るべき重患——絶望——利那の肉の享樂——風紀の頹廢——道義の弛緩——の道程をたどるものである。

尙進んで肉食動物に就て觀察すれば、肉食は常に闘争性がある許りでなく個人主義である。これ個人主義が肉食する歐米に生れた譯である。今日西歐の食に倣つて肉食をなす日本が西歐の憫む社會闘争に到達するは理の當然であらねばならぬ。

四、肉食と體力

肉食動物が菜食動物より強い體力の所有者と思ふのは丁度、筋骨の逞しい者のみが日常生活の健康者と許り思ふのと同じ様な誤りである。成る程肉食動物は一時の暴力はあるが、決して長続きのする力ではない。馬や鹿を撲殺する力はあるが、馬や鹿を追つて長く走るの力はない。十丁の巨擘は彼等には走れない。故に正當なる體力の所有者ではない。其證據には猛獸も猛禽類も、草食性の集團的動物との生存競争に打ち勝つ事が出来ず、次第に絶滅しつつある。大自然の力は動物界なる一大部屬をそれ總體としての生命の維持に勉めてゐるのである。然るに肉食動物はその大部屬への反亂者であり反逆者であり、身中の蟲である。肉食は自然の意志に反するもの、體力が良からう筈はありません。故に短い時間に勝負を決する場合は左程の差は現れぬが、久しきに耐ゆる勝負になると肉食者は必ず負ける。今日世界の競技レコードで、耐久を要するものは、悉く菜食者の作つたものださうである。オリムピック競技に参加する日本選手の諸君は船中や巴里の旅館で何を食べられるかは熟考の上に實行されたいものと思はれる。

五、食物と感謝、感謝と榮養

吾等が生命を維持するには、肉食何れをとるとしても皆生物を犠牲として居るのである。魚類肉類は云ふ迄もなく、穀物、野菜、皆各自己生命の維持を樂しんでゐないものはない。眠草や食虫植物の一を見ても、誰か植物に感覺無しと云ひ得よう。千二百年前彫刻された彌勒菩薩の胎内に藏められて居た粃米が播種せられて充分に發芽せし報告を聞き、吾等は米が能く千二百年も生命を持する其偉大なる生命力に驚嘆崇敬の念を禁じ得ないものである。然るに吾等は日々此等の生命を斷つて取つて以つて自己の生命となしつゝある。空腹の時一椀の饅頭を恵まれた時、吾人は其人に感謝することを忘れない。日々吾等の生命の犠牲となる動植物に對して感謝の念を捧ぐるは當然のことではなくてはならない。吾等は毎年これ等犠牲の生靈を祭りて、大祭典大供養を行ひたきものである。然るに現代人の大部分は、食物に對しても吾に食ふの權利あるかの如く考へ、之等に對し感謝の念なきのみならず、食膳に向つて其量を其味を其品種を不平を以て食する者さへある。如何なる豊富なる美食だつても、不平と怨恨と憤怒の情を共に食する時は、其榮養價は大に減殺されるものである。之に反して一椀の麥飯に一片の澤庵漬にても、之を喜び之に感謝して靜に食する時、其榮養價は増大して心身の安養を得るものである。此れ吾等が體內臟が試験管と異なる所以である。どうか吾等は、吾人の生命維持の糧食を、最少限度に縮少して、出來得る限り他生物の生命を尊重して之を斷たざる様に心懸け、又一方に於ては止むを得ざる其犠牲者に對し衷心から感謝の念を以つて食事をしたきものである。

六、日本の住宅

世は不景氣のどん底にありと云ふが、吾萩町には方々に家屋の建築が盛に見られる。それ等の建築が大抵は所謂文化住宅とでも云ふのか、ガラス障子で、日光とあかるさが考慮されてゐるのであらう。甚だしいのは疊がなく洋室にしてあ

る。屋根は瓦からスレートに變つて來た。西洋に發達した様式を其儘風土の異つた日本に持つて來る事は一考を要する事である。日本の家屋が何故に藁葺で、疊敷きで、紙障子と壁であるか、之は日本の風土に最も適した様に發達したものだ。日本は寒熱の往來甚だしく、濕潤なる空氣のため、この肉休殊に腎臟保護の關係からである。之を思はずして直にモダン洋式を眞似たる結果は遂に世界第一の腎臟故障國の名を得た。日光と云つても、室内の直射日光は、冬以外はむしろ避くべきで、殊に夏は絶対に防止すべきものである。

私は近頃斯様な氣がして仕方がない。衣食住の如きものでも、我が祖國の特異性を研めずして、洋服を着て、洋館に住んで、洋食を食つて、英語を話して居たら、日本精神は忘れられて、遂に英國か亞米利加の屬國的根性になるんではないか。吾々はあらゆる方面に於て、どうか日本精神を徹底的に發輝したいものである。

攀學半河野先生似誠之學舍生詩玉韻得三首

四年 田 坂 興 道

負笈已知多苦辛 何空遊興厭采薪 松門餘影歷存此 而立應期出主頻
慷慨志猶溢史篇 回天偉業絕比妍 綿々傳誦二州學 後輩頻求齋牘賢
長陽學舍冠以誠 諸生應期斯道行 鴻業動天仁及衆 功名偉德響八紘

萩町と鐵道降車人員

特別會員 岡 庭 秀 男

一、まへがき

文化營力としての鐵道が、或る特定地域に如何なる影響を與へるか、又其の特定地域の景相に如何に影響されるかの問題は、人文地理學の好研究題目の一つである。

萩町は其の地域内に玉江・萩東・萩の三驛を持つ。各驛間の距離は二・四軒で、(註一)美禰線に於ける各驛間平均距離五・一軒に比較すると、驛間距離が短い。斯く短少の驛間にあつても、其の營業内容を考へる時には各驛後背地の特相に依り並に、萩町の經濟的中心地域なり、遊覽的地域なりに對する地理的位置の如何に因つて、各々に特色のあるを看得する事が出来る。

(註二)此の三驛の營業内容を通じて、過去の城下町萩町の近代的推移及び其の生活機構を知り、文化地誌的意義を把握するのは、極めて興味ある研究取材である。且つ又萩町の郷土地理研究に際しての重要な一部門をなすものであらうと信ずる。而して萩町への鐵道開通は大正十四年以降であつて、其の影響が比較的其他の地理的又は社會的因子と結び複雑化されてゐないであらうから、此の点研究上好都合と考へられる。尙來るべき美禰線の全通、山陰本線との連絡を思ふ時、各驛なり萩町なりに如何にこれが作用するであらうか。これも残された問題である。

二、萩町の地理的記載の一端と鐵道降車人員

萩町の主要地域は、(註三)阿武川が三角形の凹地に造つた低濕地即ち萩三角洲である。三角洲を圍む二方は壯年的に解析された山地で山地からの交通は阿武川の峡谷を通じた自動車路があるが極めて不便である。然しながら二方が山岳地一方が日本海、其の上阿武川の二分流松本川・橋本川に挟まれた萩の地は、既に城郭の如き觀がある。此の充填三角洲上を

阿武川の二分流と山麓線に制約されて、市街地を廻つて楕圓の弧を描き、山陰本線と厚狭より分かれ、正明市にて下關から北上して來た線と合した(註四)美禰線が終端驛奈古に向つて走つてゐる。此の美禰線は山陰本線に未だ接続してゐないから交通系としては完全なものではないが、本地方唯一の交通線である。

萩町は長門國日本海方面としては、面積に於て最も大なるデルタ平野を背景とし、形勝の地だつた事が毛利氏の居城となり、茲に劃期的發達を遂げ來つたものであらう。即ち城下町として軍事的、政治的中心の地が、發達の主因となつたのではなからうか。此の城下町としての發達に幕末より維新以後へ掛けての萩を母體とした防長の人々の活躍が、今日の幾多の史蹟となり、之が萩町の持つ誇の一つとなつてゐる。加ふるに來萩した誰しもが感歎する如く、其の風光の優れたる、萩は名勝の地でもある。此の点よりすれば萩は多くの保養遊覽の地としての素質をもつ。是と附近の名勝長門峽、奇勝秋芳洞、青海島が相聯關して、見學遊覽の客を吸収するに十分である。然しながら遊覽的都市の發生、發達は、名勝なる自然物又は舊蹟なる人爲的建造物に依存し、且つ交通の便否による制約を蒙る。(註五)此の意味より鐵道開通に因つて、萩町の遊覽的都市傾向に何等かの寄與影響があるべきである。今

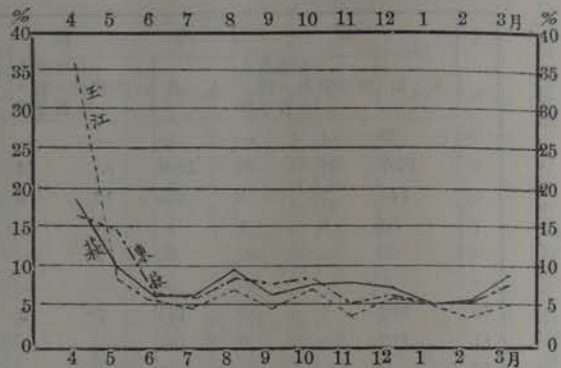
是を降車人員に對する二、三の考察と共に検討して見よう。

第一表から各驛の降車人員の百分率を知り、之を第一圖に示し其の一年間に於ける變化を見ることにする。第一圖は百分率に依り且つ百分率算出の際の四捨五入の關係から作製したため明瞭に表れなかつたが、一般的に論ずれば、各驛の變化に於て、共通性類似性を保つてを見る。此の變化性と類似の結果は(註六)先學によつて發表されて居る。此の變化は普遍性をもつものではなからうか。諸これに付いて萩町と結びつけて二三の考察を下して見る

第一表 昭和五年度の三驛降車人員

月次	玉江		萩		東萩	
	人員	百分率	人員	百分率	人員	百分率
4	42906	36	12971	19	17188	17
5	11053	9	6886	10	14403	15
6	6721	6	4412	7	6494	7
7	6168	5	4719	7	7040	7
8	7934	7	6347	10	8908	9
9	6559	5	4401	7	8210	8
10	8313	7	5095	8	8000	8
11	5323	4	5147	8	5189	5
12	7486	6	4446	7	6400	6
1	5872	5	3501	5	4876	5
2	5322	4	3184	5	5262	5
3	6543	5	5104	8	6847	7
計	120200	100	63266	100	98817	100

第一圖 昭和五年度の三驛降車人員



なるのは萩町の遊覽的都市としての傾向の表現ではなからうか。此の事に付いては第二表第三表に依つて考へよう。

即ち第二表第三表に依つて示されたやうに各驛共五、六、九、十、十一月に團體降車人員が多い。五月の如き總降車人員に對する團體降車人員は萩驛二三%玉江驛一四%東萩二三%の多きに達してゐる。或る地域に於ける鐵道の團體降車人員は其の地域の保養的乃至は遊覽的宗教的都市傾向の反映であると見て大過はあるまいから、萩町各驛の團體降車人員は此の間の消息を物語るものであらう。然も此の團體降車人員が何時に最も多いかに依つて或る地域の保養的遊覽的都市の特質

と、四月に各驛とも多いが、これは如何なる因子に因つてであらうか。四月は學校開始の月である。故に萩中學校、萩商業學校、萩高等女學校の汽車通學生が定期券の買換へをなすの最も多い月と考へられる。定期券は其の乗降人員を統計として調査する場合は、買換へた月に其の定期券の使用期間中の乗降を一纏にして計算するとの事であるから勢四月の降車人員が多くなる。然しこれのみではなく四月頃の氣候の浮々としたそれが人出を誘ふ一因でもある点一考を要する。丁度萩町にては春日志都岐神社等の春祭があり、又は志都岐の櫻の花見等がある。是等が誘因となつて四月の降車人員が多くなると考へるのは果して早計に失するであらうか。六月は全國的に農繁の時期である。鐵道營業としては比較的閑散時である。萩町の如き今日に於ては地方的商業の中心都市であつて、その商圏は近邊の農村を背景として成立して居るのであるから、此の月に降車人員が少いのである。而してこれは恐らく全國的に共通性普遍性ある現象であらう。八月十二月に増加の傾があるが一は休暇利用一は年末歸省、年末買出し等歳末時の多忙性が主要因子となつてゐるものと信ぜられる。十月に多く

第二表 昭和五年度三縣の團體降車人員

月次	萩				玉江				東萩			
	人	員	百分率	全降車人員に對する百分率	人	員	百分率	全降車人員に對する百分率	人	員	百分率	全降車人員に對する百分率
4	22	1	—	—	—	—	—	—	114	2	1	—
5	1557	71	23	1604	80	14	3311	62	23	11	—	—
6	144	7	3	225	12	3	717	13	—	—	—	—
7	36	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	—	—	—	30	1	—	41	1	—	—	—	—
9	1	—	—	—	—	—	498	9	—	—	—	—
10	152	7	3	141	7	2	343	6	—	—	—	—
11	173	8	3	—	—	—	264	5	—	—	—	—
12	—	—	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—
1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2	25	1	1	—	—	—	33	1	—	—	—	—
3	74	3	1	—	—	—	31	1	—	—	—	—
計	2184	100	—	2005	100	—	5352	100	—	—	—	—

らう。尚鐵道側から考へれば四月は繁忙時であるから運賃の割引は



を判別し得る。春秋の候に來遊の多いのは遊覽的地域の特徴である。萩町は第四表第二圖に據つて明瞭の如く春季に最も大に秋季が之に次ぐ。夏季が三位にあるのは休養地保養地の意味を些少なりとも表はしてゐるのではあるまいか。

第三表 昭和五年度三縣の總降車人員と團體降車人員比較

縣	總降車人員	團體降車人員	同百分率
萩	66266	2184	3
玉江	120200	2005	2
東萩	98817	5352	5

ないが、閑散期に入る五、六月に掛け割引の制に依り旅客吸收に努める。特に六月は割引上からは(註七)第二期であつて、割引率が大きいである。是等の關係に影響されて、團體旅行の時期が決定されるのではあるまいか。

三、むすび

以上の如く、鐵道と云ふ文化營力の萩町に與へる影響及萩町のもつ自然的環境、社會的環境換言すれば萩町の地理的特異性が、鐵道に如何に反映してゐるかの一端を、鐵道降車人員を資料として、愚見を述べた次第だが要約して次のやうな諸点を知り得たのである。

(一) 一部地形に依つて制約され且つ各々特殊な後背地を持つて、其の設置理由の存する處の三縣は、各後背地の大小、又は萩町の經濟的中心に對する時間的距離及遊覽上の便宜に因り、降車人員に多少はあるが各月別に見る時には變化性に共通點の存するを看得する事が出来る。

(二) 降車人員の増減は氣候的社會的因子に左右される。具體的に言へば春秋とか、學校開始・農繁期・歳末期・冬季等の氣候的社會的因子に影響される。而して此の現象は恐らくに普遍性共通性あるもので、萩町に限られた事象ではあるまい。

(三) 團體降車人員が相當に多く、且つ此の人員が春秋に多いのは、萩町の名勝、舊蹟に依存したものと解せられるから萩町は遊覽的地域、遊覽的都市の傾向をもつものであると思惟し得る。尚此の傾向は將來の山陰線との連結、又は萩・大田・小郡間、長門大井・徳佐間等の計畫豫定線(註八)の完成した場合は一層濃厚になるであらう事を推測し得る。

猶今は單に鐵道降車人員のみを例に採つて人文地理的檢討、地理學的愚考を敢て發表したのであるが、或る地域と鐵道との相關々係は興味ある事實を提供してくれるもので、此の相關々係を鮮明にする事は、其の地域の文化景を知り文化地誌的意義を把握するに緊要なる手段たるを疑はない。且つ其の地域の生活機構を知るの一方便でもある。依つて進んでは

第四表 昭和五年度三縣の總降車人員と團體降車人員比較

時期	總降車人員	團體降車人員
春季	126	62
夏季	65	18
秋季	60	23
冬季	48	2

ひとり降車人員のみでなく乗車人員・貨物の着發迄まで調べ又は聚落の發育及道路の改變と鐵道一般的に云へば鐵道が如何に其の地域の景觀を變化せしめたかの問題も研究されべきである。斯くて我々は鐵道を研究の對照として郷土の實相を知るに一步を近づけ、郷土を理解するの一端を掴み得るのである。然し意ありて筆、思考觀察共に伴はず、筆者の淺學を嘆ずるのみである。粗末な研究もて貴重な校友會誌の一頁を汚すを恐れる。

今回の記述に當つて玉江萩東萩驛長殿各位の御助力を賜り、其の上多忙の際にも係らず多くの資料を與へられ説明下された方々に厚く謝意を表する次第である。

- 註一 門司鐵道局要覽 昭和六年十月 美禰線厚狹奈古間及支各線の營業料一八二軒、普通停車場二三。
 註二 玉江、萩、東萩各線作業臺帳 昭和五年
 註三 東本龍七 日本群島の三角洲の研究 地理教育 昭和四年四月
 註四 門司鐵道局要覽 昭和六年十月 小串線橋生、阿川間 阿川正明市間 美禰線
 註五 西田興四郎 都市地理 地理學講座 第五卷 昭和六年
 註六 尾崎虎四郎 鴨川町に及ぼせる鐵道の影響に就いて(研究豫報) 地理學評論 昭和六年第七卷
 註七 旅行案内 昭和六年一月號 諸規則 團體割引
 註八 門司鐵道局要覽 昭和六年十月 門司鐵道局管内鐵道線路略圖

誠之學舎三十年を迎へて

四年 清水 忠 夫

三十年をくしくさきはひ過ぎにけりこの學び舎とはに榮えん
 もろともに三十年といふ年榮えたるこの學び舎の生日祝はん

船木秀一君を憶ふ

特別會員 下 間 敦 修

船木君。君が萩を去つたのは、もう遠い昔のやうな氣がするが、考へて見るとまだ去年の春のことだ。指月の花が散り新學期が始まつてまだ間もない、昭和五年四月十二日、天氣の好い午前十時頃に、玉江驛から君は萩を去つた。そして永遠に去つた。

轉任先の岡山から、初夏の便りに添へて、酒だけは、何と言つても、萩の比でないから、是非、一度、立ち寄つて味つて呉れと言つてよこしたのも、今は遂に永久に其の儘となつた。夏休の終つた頃であつたと思ふが、君が病氣のために岡山の金光中學校を止めたといふ噂を聞いて、問ひ合した見舞狀に對する、郷里富海からの君の返事、それには、もう手紙を呉れるな、出しませぬ、誰とも文通は絶つといつてあつたが、それを見た時、もう或は回復の見込がないのではないかと、僕はひそかに心配した。

それから秋になつて、君の御令弟と、君とから、再度、病狀の詳細を記して、當地の玉木先生の御意見を聞いて呉れといふ依頼を受け、玉木先生に話して、その診斷を聞いた時、君はもう愈々駄目なのだと思つた。しかし、それでも、何とかして、奇蹟的にでも全快するやうなことがあればいいがと思つて居た。

其の頃から、いつか見舞に行かう／＼と思つたのが、延び／＼になつて、漸く富海驛に下車する機會を得たのは今年の一月、雨のしと／＼と降る淋しい冬の日であつた。驛の人に、處を聞いて、君の宅に詣り、病室に入つた時、君は暫く蒲團をかぶつて何も得言はなかつた。年老いたる母、久しく病める弟、其の頃また新に病床についた妻に、頭はない二人の子供を残して、この世を去る君かと思へば、何と慰めてよいか、僕は言葉に窮した。あの時君が、イワシのウルカの鹽漬を食つて見たいといふので、送る事を約束した僕は、萩へ歸つてから、玉江浦の人に頼んで取つてもらひ、發送すること

を意つて居るうちに、突然君が二月十四日に長逝したとの報知を受け取つた。この約束を遂に果さなかつた事が、今に残念で堪らない。

葬式に行くことが出来なかつたから、何れそのうち、墓へでも詣らうと思ひ乍ら、半年以上も経つた今、まだ其の務を果さない。かくて君は僕等の心から次第に遠ざかる。去る者日々に疎しか。

寄宿舎開設三十周年記念式記事

特別會員 河野通毅

志都岐の山麓、五層の天主閣の嘗て天をうりたちし萩城の外廓内に、我が山口縣立萩中學校は今を去る事三十二年前に開校せられた。その翌々年に我が寄宿舎誠之學舎は新堀好生館内に開設せられた。實に今を去る事三十年前で明治三十四年九月の事である。一昨年我が校の創立三十周年記念式を舉行せられた時以來、寄宿舎も三十周年の記念式や記念事業をしたいものであるとは舎監の間により／＼話が出てゐたのである。加ふるに校構内にある縣立萩圖書館も創立三十周年に相當するので、その記念式と同時に進行を行ふがよからうとの説もあつたが色々都合で數日を隔てゝ行ふ事になつた。式は十月十七日午前十時から行つたが、式の進行や指揮に就ては一切舎生の手で行ふ事にして、即ち四年生森澤忠夫君が一切の號令を掛けたが上出来であつた。學校長の式辭には本舎の特色五つを擧げて大に稱揚せられたのは汗顔の至である。來賓からは父兄代表として藤井儀一氏が明快の辯を振はれ、舊舎生の總代として和田涉氏の諧謔交りの思出話は頗る愉快であつた。寄宿舎創立當時の舎生として次の人々が臨席して下さつた事は何といつても愉快な事である。先輩と後輩とが三十年を隔てゝ一堂に相會する事は美談といつてもよからう。

増野純亮君 和田 涉君 白井曉彦君 口羽順藏君 藤本彦一君

舎生總代として五年生土方三郎君の祝辭朗讀及四年生荒川英春君清水忠夫君の所感演説も面白かつた。多數の來賓の前で隠せず堂々とやつたのはよかつた。最後に舎生全體が四年生磯部博雅君のピアノ彈奏に合して春歌を合唱したが、よく揃つた、面白かつた。誰も感心したであらうと思つた。

誠之學舎開設三十周年似舎生三首

學半 河野通毅

同絶負笈豈悲辛	切礎汲流又拾薪
三十年來養士處	滿門桃李待春頻
鴻業頻傳舊史篇	俊髦輩出又爭妍
續紹誰敢受嗤笑	絃誦年々憶古賢
天道唯偏尙至誠	誠之即是學人行
九阜鶴唳君聞否	清朗一聲響八絃

の表彰式をも兼ねたわけであらう。年より今日に至る迄十一年十せられ、田中末松君は明治四若木富三郎君は大正八年よりは大正六年より十四年四月月れ格勤精勵よくその職を盡さとして置時計一個を添へて贈永年勤績者によりて間滑に進は炊夫も書記も舎監も勤績年てよからう。

此の式には勤績書記及炊夫。即ち藤田彦亮君は大正八一ヶ月間會計書記として勤務十四年より二十年六ヶ月間、十二年三ヶ月間、石原三助君間何れも炊夫として勤務せられた。何れも感謝状と記念品呈した。本舎の事務はかゝる行するのである。一體で本會數の長いのが一特色といつ

記念式は午前十一時三十分頃に移つた。來賓は本校の諸先生方及在舎生の父兄母姉、創立當時の舎生であつた先輩、其他寄附金をせられた後援者の方々等約百名位に達してゐる。式後此等の方々を萩圖書館の展覽會に案内した。萩圖書館では寄宿舎の記念式に祝意を表する爲めにわざ／＼防長維新史關係の資料展覽會を開いて下さつた事は感謝の外はない。此の點は全く時山、大村二君の好意であるとして永く銘記する次第である。展覽會には史料として珍重すべきものが澤山あ

つた。

展覧會觀覽後一同は書庫をも見學して寄宿舎食堂に開かれた祝宴に臨んだ。食堂は舍生の手依て萬國旗やモールやテ
ーブル幔幕等を以て美事に裝飾してある。本校の先生方や舍生父兄、舊舎監其他の來賓と舍生とを集めると二百名以上にも
なる。是等が食堂に着いた。舍生にも來賓と同様に特に料亭高太亭に依頼した御馳走がある。來賓と異なる所は來賓にはお
酒が一本づゝある事と、生徒の御飯は牛肉飯である事である。之は和田、増野の兩先輩が特に寄贈せられたものである。
宴酣にして舍生田邊、中川、兼田、白藤其他の詩吟が出る。來賓口羽先輩や藤井儀一氏、時山富藏氏、吉賀恒太郎氏等の
詩吟や漫談が出た、舍生も喜んだ、父兄も満足せられたであらう。かく生徒と先生と父兄とが一堂に相會して歡を盡した
事は恐らく開校以來初めてであつたらう。舎監も誠に満足である。記念式も極めて有意義であつたと思ふ。當日香川前舎監
が差支があつて出席せられなかつた事は物足りなく思ふ。最後に藤井儀一氏の乾盃で萬歳を三唱して宴を開じた。藤井氏
は先般の縣議選舉に民政候補として應選せられて遂に満を持したまゝ出馬しなかつた人である。今日は本舎の爲めに大に
斡旋せられたわけである。

祝宴が終ると父兄方は舎内で生徒と懇談せられた。舎内での各室共に競争で裝飾を凝らした。萬國旗、テーブル、モール
造花其他意匠を凝らし、工夫を凝らし裝飾したから千紫萬紅、百花咲き匂ふ春の様な氣分になつた。此の裝飾には舍生は
二三日前から各自随分苦心したらしい。夜になると各室思ひ／＼に茶話會を開いた。今日の日は三十年間一度の解放の日
であつた。高歌放吟するもの隠し藝を出すもの中々賑であつた。然し豫定の午後九時になると全く終了して舍生一同靜に
後始末にかゝつた。誠に秩序正しく規律嚴重であつた事は嬉しい。

之で十月十七日神嘗祭の日を卜して行つた記念式は終つた。式は唯一日に過ぎない、然し舎監も舍生も長い間苦心して
準備したのであつた。記念式の外舎としては記念事業を行つた。項を改めて説明したい。

寄宿舎開設三十周年記念事業

記念式及祝宴、勤績者表彰と記念事業の一といつてよいが、前述の通りとして略しておく。次に記念事業の第一は寮
歌の制定である。何處の寄宿舎にも寮歌がある。然るに本舎には未だ設けられて居らぬ。之を此の際制定する事は極めて
有意義の事である。そこで寮歌を作つた。寮歌には第一に本舎の環境を歌ひたい、舍の生活を歌ひたい。本校の校訓と舍
名の起つた誠之の語義とは是非とも讀み込みたい。それに又舍の生活の理想もいはねばならぬ。そんな意味で出来上つた
ものを更に諸先生にも見て戴いた。それから暑中休暇に山口市に行つた時、山口高等學校教授の満井信太郎先生に添削し
て貰つた。さて歌詞が出来上つたので之を文學博士兼常務佐氏に作曲して貰つた。此で兼常氏の事を一寸紹介し置きたい。
實は兼常氏は私の従弟であるので餘りに自慢すると手前味噌になるので都合が悪いが、氏は本校第三回の卒業生で小學校
以來常に私と共に學校に通つたものである。非常の秀才であつた事も事實であり、奇行に富む事も有名で音楽研究では世
界的の存在である。本年の夏は紀州の引本町に避暑に行つてゐた。そこで私が特に母校の爲めに作曲を依頼した。氏は快
く承諾して下さつて早速作曲せられた。次に氏の曲譜と共に送られた手紙を掲載する。

昨夜引本から歸る早々別紙の譜を書き上げました。あんまりよくもないが、まあこゝいらで一つごかんべん願へませ
んか(中略)

ごく／＼簡単に別紙にハーモニーを書いておきました。これをピアノで伴奏してもいいでせう。或わあのふしとハー
モニーの中のバスのふしとで男聲二部合唱は出来ます。しかしこのハーモニーでは男聲四部合唱は出来ません。もし
そんな要求があるなら別にそのやうに書きます。すぐ出来ます。ふしは大體テノールの高さに書きました。都合で調
子はあげてもさげても自由です。(下略)

曲が出来上つたので野田先生にお頼みして幾度も舍生に練習して貰つた、そこで式の時に対応によく揃つた。

記念事業の第二は防火用ブールの新築である。之は寄宿舎小使室の南側に作つた、一間立方尺あつて工事は新川の河野定太郎氏の行つたもので、本校の農事實習室の建築の序に作つて貰つたので極めて割安に出来た、設計は縣の技師に依頼した。之は九月中に出来上つた。

第三は花壇の修理である。之は七月中に第一學期考査後の舎生の暇の時に舎生の手でコンクリートの框を作つた。人夫を使用せず舎生の手で作つたといふ事で意義がありなるべく舎の事業は舎生の手でやりたいといふのが念願である。之には追々花卉を栽培したい、何とかして舎に今少しく美觀を添へたい。平和な楽しい氣分を漲らせるには外形の上にも相當な美觀を要する。舎生として美的情操を養はしめたい事は舎監の平素の希望である。殺風景な沙漠の様な環境は感心しない。

第四は寄宿舎の沿革と概況とを記した小冊子の發行である。三十年間の沿革を此の際追想することも無用であるまいと思ふ。之には色々の統計表を附載した。

第五は記念繪葉書の發行である。五枚一組で舎生の生活狀態を示す様にと想つて自習室と食堂と自強術の實況とを撮影した、それから舎の建物を示す爲めに階下と全景とを選んだ。今地寫眞館の好意で極めて美事に出来た。小冊子と繪葉書とは來賓一同に配付する事にした。先記念事業は以上の通りで全部記念式迄に完成し、後日に努力を残して未完成で終る事のない様にした。とかく記念事業を後日未完成のまゝで残して時には中止する如きがある、餘り感心した事ではない。

稿を終へるに當りて全校生徒諸君にお詫するのは、記念式に當りて生徒諸君を全部お招きする事が出来なかつた事である。或は記念品なりとも何かお配りする事が出来たらと思つたがそれも出来なかつた。何分經費を節約する必要があつた爲めである。然し諸君の兄弟分である舎生一同は楽しく愉快に平和に舎内で生活してゐる事を喜んで頂戴。それから記念事業に對して後援して寄附金をして頂いた方々には改めて此に感謝の意を表すのである。又萩圖書館の時山司書からは舎生一同に葉を配付せられた事等に對しても感謝の意を表せねばならぬ。(十月第四日曜の午後誠之學會に於て)

躰育デイ講話

校 醫 山 本 勉 彌

躰育デイは今より七年前に制定せられ、逐年全國的に其運動行事が盛になつて來た。時は將に清節を誇る菊花が薫發する好季節であり、本日は明治生れの吾々が明治大帝の天長節として、十一月三日の好き日と歌ひ慣れ、忘れんとして忘れ得ざる好日である。天空海淵「あさみどりすみ渡りたる大空のひろきを己が心ともがな」とある大帝の御製は運動精神の發露でもあると、拜し奉ることが出来る。此の好日に躰育に就ての小感想を述ぶるは私の喜びとする所である。

躰育の必要なことは、今更云ふ要もありません。國民の躰育の消長はその國の盛衰と密接なる關係あるは、古代ギリシヤに於て既に證明せられてあります。一般の氣風が安逸遊惰に流れ、文弱に傾く時、その國が衰微を現はすは、我國の歴史を顧みましても、了解のゆくことであります。近來文部省が世界の大事勢に鑑み、スポーツの奨励と、武道の振興とを二つの旗標として努力した結果、我國の躰育界は長足の進歩をなし、先日明治神宮の競技會には織田選手は三段飛に於て、南部選手は走中飛に於て、世界的レコードを作り、又一般學生の躰格に於きましても、大なる發達をなし、身長も以て云へば、二十年前に比し、平均約一寸の増加を來たして居ると云ふ結果を見るのは、眞に慶賀に堪へませぬ。然し我國現在の實狀に就て、ある人は次の如き惡口を云ふ。國民は一般に少しく神經衰弱に罹つて居るのではないか、殊に青年學生諸君は勉強を強ひらるゝ結果、書物に許り親み、常に青い顔をして、餘りに活氣がない。吾々は無邪氣にして快活元氣潑刺たる人を望むと。成程經濟難、就職難、惡思想の爲めに、國民が尖鋭化して居る事實はあらう。又青年も早く老

成ぶり、自強行爲その他に因りて元氣をなくして居るものも相當あり、之は一面の見方であると思ふが、私は左程悲觀しては居ない。何故かと云へば運動競技を樂むことは、人類に與へられたる一種の本能であると思ふ。此健全なる娛樂に青年諸君の赴くは理の當然である。人は誰しも美味の食事を好む。食慾にせよ、運動慾にせよ、人類が自己保存の爲めに授けられたる大切な本能であるから、自然に競技は盛になり、殊に青年は益々活氣付くことと思ふ。然し度を越して之に耽ければ、人の健康を害することは、兩者同じであります。彼の世界的女流選手の人見嬢が一朝病に冒さるゝや、病勢が以外に早く進み、復た起つことか出来なかつたのは、國家的一大精神の爲め、無理があつたとは云ひながら、多少の參考になると思ふ。又近頃私の感じたことは、彼のバスケットボールは女子もやることで、緩和な運動であると思つて居たが、中々さうでない。兩手を咄嗟の間に上に向けて動かす動作を繰り返すは、相當胸部に激しき衝動を與へ、胸部疾患を誘發する恐れがある。選手達が身軀の異狀に就て自覺する時には、早く用心をしないと、取り返へしのつかぬことを生ずる。身軀の薄弱者に向つて適度の體育施設を要すると云ふことが、近來盛に唱へられ、本校に於ても近日より弓術部が開設せらるゝと云ふは、喜ばしきことである。少しく餘談であります。本校の卒業生大谷醫師は昨日より荻町五間町で開業されました。同氏は弓二段で、荻町に於て射的場がないかと云ふことでしたから、本校のことを話しました。今後は學生諸君指導の爲め自身運動の爲めに喜んで來らるゝことと思ひます。弓術は格のよい青年の運動としては、少しく物足らぬ感があるが、中年老年の方に恰適の運動であると同氏が云はれて居りました。

次に私は「體育と呼吸器」に就て少しくお話し致します、シュミット氏曰く「人は肺と心臓とにて走る」と。之は一見奇言を弄する様であります。疾走の際には肺内の酸素要求量が平生の數倍或は十數倍となり、肺及心臓の働きによりて、之に應じ能はぬとすれば、神經及筋肉に酸素の缺乏を來し、爲に肺内に疲勞素の蓄積を見、凡ての筋肉神經の作用を減じ、たとへ脚筋が如何によく發達して居つても、疾走し得ぬ様になる。即ち呼吸力の如何と云ふことが、疾走及其他の運動にも誠に重要な意義を生ずる。静岡縣沼津商業學校の稻玉校醫は各種運動の選手九九人と、無爲競技者七三人

の肺活量を調査した。肺活量とは肺へ十分呼吸を吸ひ込みて後、吐き出す空氣の分量のことで、肺活量計によりて算出せらるゝものである。此調査の結果は胸廓の形態によりて關係が異なるも、大體に於て運動選手と運動をせぬものとの間には大なる差のあることを證明した。又運動種目による選手平均の肺活量は左の通りである。

一、水 泳	四〇二七	二、長距離	三九一七	三、劍 道	三八九五
四、柔 道	三八九二	五、中距離	三八五一	六、弓 道	三七二九
七、投 技	三六三三	八、短距離	三六一二	九、野 球	三五二四
十、跳 技	三五二八	十一、庭球	三三九三	ミリートル	

水に入れば自然に深呼吸をなし、又水をくゝるには特に呼吸を大きくする要あるなど、水泳が呼吸運動練習には最もよいと云ふことは考へらる。又弓術の胸廓運動に關係多きこと、庭球の關係少きことも容易く首肯せらるゝ所である。肺活量の少き青年は如何なる運動を撰べは比較的成し易きかなど、此表によりて教へらるゝのである。次の體育の效果に就て、その概畧を簡條的に述べる。

一、呼吸器を健全にし、肺内燃焼を十分にする。

二、血液の循環をよくし、細胞組織の同化力、發育力を振起し、精力の増進、仕事の能率増進を來たす。

三、心臓の發育鍛練を來たす。

心臓の病狀を治す薬は多いが、心臓を積極的に強大にする薬はない。運動のみがこの衛生的意義を有するのである。

四、筋肉の發育。

五、神経系能力の驚くべき發育。

氣分を爽快にするなど、著しき効果あり、勉強等精神的能率の増進が明に認めらる。

六、消化をよくし、腸胃を健全にする。

七、大氣日光にさらさるゝ故皮膚を強くする。
最後に体育及体育精神の標語を擧げて見る。日本体育聯盟の標語に「体育は普く、絶えず、正しく」とある。普くと云ふは、運動は唯青年に限るとか、選手に限るとかではない、老幼男女を問はず、適當なる運動を廣く勧誘するの意である。絶えずとは、運動は近代的生活に必須なる要求なることを知らしめ、連續的にやれと云ふのである。殊に學生は運動會とか、他校仕合の前などにひどくやつて、その他の時期には餘りやらぬと云ふ様なことは、却つて身軀を害するのみであるから、大に注意を要する。体育運動を正しく實行すれば、規律節制、堅忍不拔と云ふ個人的徳性が養はるゝ他、協同一致、博愛等の社會的徳操も養はれる。その結果本校の校風をなす質實剛健、協同一致の氣風も自から現はれて来る。余が頭に浮んだ体育精神の標語は「はれやかに、ほがらかに、強く、賢く」と云ふのである。私は運動精神は明るく朗かにあるを望み、暗く陰險であつてはならぬと思ふ。強いことを要するは勿論で、弱い心持では問題にならない。又敏感を必要とするので、愚鈍であつてはならぬ。此標語はまた移して以て、吾人日常生活の上にもあてはめらるゝと信ずる。
(十一月三日講堂に於ける講話の要項)

送青木教官之赴任於土佐

四年 田坂興道
四年訓育盡真情 愁別到今恩更明
再會難期無限恨 驛頭戀々送師行

至誠の偉人

特別會員 金子乙助

第一章

一 身は武蔵野の 露と消ゆれど やまとだましひ
留めし君の 至誠の力に 天地も動き
至誠の徳に 鬼神も感ず
二 萬里を翔ける 鵬翼くじけ 雄圖空しく
事去りぬれど 國に盡しゝ 復古のいさを
これを仰げば いよゝ高し
三 亂れみだるゝ 時世しづめて 國の柱と

第二章

一 朝廷に立てる 幾多のますらを 出でにしまなびや
松下の名こそ 千歳にのこれ
二 神去りましゝ すめらみことの みあと慕ひて
逝きにし君の 至誠の力に 天地も動き
至誠の徳に 鬼神も感ず
三 王師百萬 強虜を懲し 野戰攻城
胡塵を攘ふ 國に盡しゝ 征露のいさを
これを仰げば いよゝ高し
四 濁りにごるゝ 時世澄して 人の心の
けがれを洗ふ 清き貴き 血しほのしづく
君やそゝぎし み國の爲に

第三章

一

偉人の遺せる

教訓と精神

時経るまゝに

光の増して

高くあかるく

輝きわたり

學の道の

おくかを照らす

二

至誠の徳と

至誠の力

鬼神も感じ

天地も動く

我等の偉人は

末悠久に

世の人々の

胸にぞ生きむ

和歌

特別會員 金子乙助

精神一到何事不成といふ心を
一筋に力こむれば石に矢の立ちし例もありとこ
そ知れ

寶

美しき心の玉は千萬の寶のなかの寶なりけり

飛行機を見て

空高くとお飛行機を仰ぎてもはてなき人の智恵
を知らるゝ

游泳

ま黒なる肌ほこらかに打群れて遊げる子らの姿
雄々しも

赤茄子三首

畑に出て見れば美し深紅なす赤茄子の實の日に
輝きて

一本の莖に五房ふさことに七つの實あり畑の赤
茄子

島なる赤茄子つみて皿に盛りはめる夕のまると
涼しも

時の記念



時は金なり

一年 淺野 力

昔、本居宣長は身のまはりの整頓をよくしたと言ふ話がある。これはたゞ宣長が整頓したと言ふにすぎないが、それは又よく時を大切にしたと云ふ話になりはしないだらうか。不整頓なる人ならば或る一物を探すのに多大の時間を要するであらうが、宣長はこんなことはない爲にそんな時間にも本を讀み少しの事でも智恵を得たであらう。そんなことで初め同じ階級であつた人とだん／＼差が出来て終には宣長があんなえらい人になつたと思はれる。かやうに時もばかにならないものである。かう考へれば一分のひまも有

時は金なり

一年 吉松 陽

「時は金なり」と言ふ様に人間の生活に時の様に大切なものは無い。この大切な時を人々がだん／＼正しくつかつてゆくにつれて時を計る機械も發達し、天智天皇のはつめ

いされたといふ時計のやうなものから今日の振子時計、懷中時計と言ふ様なもので進歩して来て何秒何分の何といふところまで計られるやうになつてきた。

昔から時を大事にした人は多くある。二官金次郎は山からたき木をとつて歸る途中に本をよみながら歸つたと言はれ、チャールズ・グーウィン^{Charles Guvinn}は十分十五分のひまでもむだに費すことがなかつたと小學校の讀本で習つた。

もしこの世に時がなかつたら人々はたらくことも何も出來ずこまるであらう。僕等はこの大切な時のあるのを幸と思つて自分の仕事にせいをなさなければならぬ。

時は金なり

一年 福田 寛雄

「時は金なり」と昔の人達は云つてゐた。それが此頃では「秒に鞭打て」などがある。實際時間といふものは、人間の目にこそ見えないが非常に大切なものである。

少年易^{カラス}老學難^{カラス}成。一寸光陰不可^{カラス}輕^{カラス}。……と朱熹^{カラス}晦庵が云つた様に一寸の間でも輕々しく取扱つて居てはい

僅か五十年の短生涯に於ては何處に居ても時は矢の如く進んで行く。

昔から成功した人皆之を尊ばない者は無い。六月十日我々は此處に亦時の記念日を迎へた。これを良い機會として努めて時を有効に使ふ様にしなければならぬ。

時の記念日

二年 本 石 光雄

思ふに日本人ほど時を尊重しない人種は居ないだらう。時の記念日として一年に一回六月十日に年中行事として行ふものゝ、どれだけ夫が國民に對して時間の尊重さを知らせてゐるだらうか。日本人は昔からの習慣として何々の會といへば一時間二時間位は遅く行くし、又約束の時間などでもその時間にきちつと行く者の方が間違位に思つてゐる。その爲御互に費す無駄な時間がどれ程ある事か。學生でも一生涯中最も重要性を有する修養時代に於て麻雀、トラム ^{Трам}プをして夜更しする者が多いと聞く。何といふ可哀想な人々ではないか。

「世の中で金で買へないものは名譽と時間ばかり」と云

けない。僕は時を大切にする第一歩に規律正しい生活を爲さねばならないと思ふのである。昔の大人物、大英雄などは皆、時を大切に有効に使用してゐた。過ぎ去つた時は永久に取りもどす事は彼のナポレオン ^{Napoleon}と雖も不可能であらう。時と云ふ物は何時も々々も流れてゐるのである。人生は其の上に浮いてゐる様なものであらう。そして何時かは死といふものに會ふのである。其の死と云ふ所まで流れつくまでに時間を有効に使用するか、又無効に費すかによつて、身分が大いに違つて来るのであらう。我々は一刻もむだにせぬ様にしなければならぬ。秒に鞭ながら時を追はう。

時の記念日

二年 中 野 博造

春だ／＼と言つて浮かれ遊んで居ると、梅雨が過ぎ夏が過ぎて秋も過ぎて行くだらう。明治天皇の御製に「時はかゝる器は前にありながら、たゆみがちなり人のこゝろは。」と有る様に、現今我々は非常に進歩した時計を持つて居ながら、時の流れるのを見て知らぬかの様に過す。實に人生

ふ事をよく聞く。然し名譽なるものは金の力によつて買へない事もないと思ふ。所が時間のみは太平洋を埋める程金を積んでも決して買へるものではない。そして時間のみは富貴貧賤老幼を問はず宇宙が平等に人々に與へるものである。その時間を殺さず、生かして使ひ得た人が成功者なのだ。「一寸の光陰も輕んず可からず」で我々學生は此の時の記念日を期として時を尊重して進まなくてはなるまい。

時の記念日

二年 辻 田 稔次

「時は金也」。辻の電柱に墨黒々と記した紙がべた／＼貼り付けてあつた。その下に〇〇青年團と小さく記してある。「さうだ、時の記念日だ！」と僕の胸に強く響いた。そして「今日のみでなく、長く時間を大切にする習慣を養はねばならぬ。」と言はれた學校長の訓話を思ひ出した。自轉車にフルスピードを出して目的地である小賣市場へと急ぐ。市場の店員も時の記念日の爲か、客が多いので急がしい爲か、無駄に時間を費さずにせつせと働いてゐた。店

員は品物を〇〇新聞に包んでくれた。ふと目をつけると其の新聞の片隅に「秒に鞭うて」と大きく見出しをつけた記事があつた。一寸目を通すと時の歴史があらまし書かれ、中央に水時計の繪が書いてあつた。自轉車に飛び乗つた僕は廣い道路をまつしぐらに飛ばした「時は金也」「秒に鞭うて」二つの格言が僕の腦中を渦巻いてゐた。

時

三年 柳井 清

「時は金なり」と格言は教へる。

今更時の尊重を言ふが如きは、我等は餘りにも陳々腐々として大も喰はぬ套語なるが如く思ふも、その實は決して然らず。

現世に於ては金の大切なる事を知る者の數多きに比較して、時の大切なるを知る者の數少きあの現象は何ぞや。我等は其處に何かの暗示を受く。

金には所有權あり。他人の財布は我等の隨意に使用する事あたはず。されど時は然らず。金は自己の努力に待つて舊

に復すれど、時は然らず。行きし時は再び我等の生涯に歸せず。何れにしても現世に於て往々時間の觀念の甚だ鮮明を缺きたる者の數少なからざる有様は、憂ふべきにあらずや。我が國に於て、世を逆つて古代に至り。時計は？ 僅かに日時計！ 雞の時！ 下りて有名なる水時計！ 今我等の環りを眺むる時、あゝ！ 其處には精巧なる時計の存するにあらずや。

そも時計の急激なる發達は何を意味するか？

そは世人が時を正確に計り、尊重する爲の進歩なり。

しかるに、今の有様は。我等は未だ若く鮮かな血の流れてゐる未成品なり。完成に達せんとする我等の前途は遼遠なり。然し、例へ太隈侯の注文通りに百二十五歳としても唯そのみに過ぎず、

將來に希望あり、伸展性あり、我が誇ある皇國の第二國民として、起たんとする我等は、スピード時代たるに相應しき青年を望む。

時

三年 玉木和彦

心は起らないものだが、融通のきかない人間には困つたものだ。

時を考へる時、始終僕の頭を痛めるのは、惨めな時の支配の下に喘ぐ、衰れた人間の姿である。

時

三年 増田重三

考へて見れば時ほど不思議なものは無い、無限の深みがある。有つて常にたゆまずとろろと流れる水の様に未來現在過去とくりかへされて行く、さりとて循環するのではない、永遠に過ぎ去る「時」又現在を知らずそれを具體的に言ふ事の出来ない様な「時」考へれば考へるほど分らない「時」其の中に僕は住んで居るのだ。

「時は二度と歸らぬものだ」といふ事を意識する時我等の青年時代も人生も人生の春「青春」も等しく二度と歸らぬものであると思はせられる。そして僕は今其「青春」の中で楽しく住んで居る。其は夫人から見れば世の中を知らない幼子が無心に花園で遊んで居る様なのかな楽しい

時といふ事を考へると、直に僕の目の前にちらつくのは出来ない試験問題を前に、焦つてゐる僕等のクラスの惨澹たる光景である。後十分しか餘裕がない。――後五分、――二分、――一分、噫！遂に時の問題となつては、もう絶望の淵である。そんな事を考へると、時は全く、試験といふ重荷を擔つてゐる我等學生にとつては、確に耐へ難い恐怖である。ハートの鼓動は高まり、顔は紅に染まり、やがて、頭の中がガーンとなつてしまふ。遂には、時の経過に任せて怖るべき時刻の到來を待つ許りである。

時と焦慮！それは結びついてはならぬ嫌な對象である。

僕は試験を脱したとしても、永久にこの問題を忘れて了ふ譯には行かぬであらう。

社會に處して活躍せんとすれば、より一層惨酷な時の支配を受けねばなるまい。そしてそれが、我等に往々致命的な結果を生ぜしめる事も、決して僕等の想像に難くない。

そして、時の作る悲惨な束縛を最も強く感ずるのは、臨終の床にあつて、天井を眺める時であらう。その時は凡ゆる物を諦めねばならぬ。單に、テストの失敗位ではない。若し、世人が、この焦慮を思つたならば、タイムを浪費する

所かも知れない。

無限に廣い海原を生命とする海の子は太陽で時を知り、又太古未聞な人々も何等かの方法で時の報知を求めた。それが人間の持つて居る尊い觀念であらう。他の動物は時の経過を統一的に觀念に上せる事は出来ない。

時

四年 田坂興道

「時は金なり。」の語は餘りに陳腐だ。然しながら、陳腐な語がよく現代を支配し、現代人に膾炙せられるのは、これに眞理があり常に新しき生命に生くるものであるからだ。宛も太陽は幾萬年の命を保ちつゝ、日に新に、又日に新に出づるが如くに、實に時は悠久無限だ。恐らく天地の存在する限り、否、それよりも尙その齡を保つであらう。そして黄金以上に尊重すべき價値を有するものである。

され、此の悠久なる時の中に生くる人生の短さよ。例へば彼の蜉蝣の如く、それよりも短い生命なのだ。人生五十年は決して長くはない。此の間、何かの大事業をなし、

三八

何か世人に大感化を與へ、その名を不朽に残すことは餘程難事と謂はねばならぬ。頼山陽は十三にして、時の遷移の速かさと學業の未熟さとを歎じた。吾人、今、山陽に見たること五つ六つ、果して彼に見たるの資格があるか。

時は憂々と分秒を刻む。人間、殊に青年、更に學徒に取つて、此の時を最もよく利用し活用する事の最緊要事なるは言を俟たぬ。一時間、否、一分間でも無爲に過さぬが理想だ。學徒たるもの、どうして相集りて放歌高談、徒に時を失ひ、或は醜惡卑劣な遊戲に耽つてよからうか。我等の時の利用とは、當に白面に於て机邊に座して讀書思索せよと言ふのではない。時には山河を跋涉して自然に親しみ、或は露宿して寝ねず、凍ゆるも衣せざるの苦しき體驗を積んで實際の學問をせよ。讀書思索と體驗觀察とは常に並び行ふを可とする。けれどもその爲に不規律不節制に陥るならばこれ直ちに時の惡用と化するであらう。

處世上の大切なるは無論の事である。「諸子が汽車に乗り遅れることは、假令、その結果荷物をも失はぬにしてもそれは恐るべきことである。」と西諺にある如く、實社會に處してはよく／＼考へねばならぬことである。日本人は

時

四年 西本春男

時は百代の旅人であると李白は言つてゐる。何處へも宿らず何處へも休まずせつせと、一瞬から一瞬へと移つて行く。なまける人を待たないで、働く人におくれずに、地球の滅するまで、人類の亡びるまで、ずん／＼進んで行く。

「光陰は矢の如し」といふ諺もある。

然し光陰は最も悠長な物で最も速い物であらう。體操の時間等にはすぐ一時間が経つが、ねむい時等の授業にはなかなか／＼時間は経たない。又中學校へ入つてから、最早四年生になつたかと思ふと、時の経つのは早い事がつく／＼感ぜられる。時計にだん／＼と改良が加へられてゆくのは、時の觀念が次第に微妙になつて來たからであらう。日本人も外國人も同じ精巧さの時計を持つて居ながら、日本人は外人に比して時を尊重する觀念に薄いのは何故だらうか。然し精巧な時計を持つてゐる者が必ずしも約束の時間を守るとは言へない。一寸の時の違ひで大事件が起る。或は汽車の衝突や、火事の有無や、戦争の勝敗等に大いに關係する。

「時は金なり。」と言ふ陳腐な言葉に現今の社會は最大の必要を感じて居る。悠久にして盡くるなき時ではあるが、これを用ひる人世は短い。活用か、惡用か。それに依てその人の生涯は決定する。機會を得るか否かに依て、その人の幸不幸は裁斷せられる。活用か、惡用か。須らく一分間を思へ。

現代に於いては時を守る事は、非常に大切な事だと思ふ。何事をするにも必要な物は時である。時なくしては何事もなし得ない。その大切な時を無駄に過して行く人々達に何事がなされようか。

時

四年 佐伯 一男

時の起源、それは恐らくは人間の智で計り識る事は、あまりにも小さい人間に對して、あまりにも大なる問題である。そして、無限から無限へ、それが唯一の答へで、それ以上はたゞ不能である。

時の生命の無限、それが時をして萬物の征服者たらしめたのかも知れない。

五分間、それは偉大な時の生命に對して又何と小さい時であらうか。然しこのわずかな時間がしばしば我々人間に對して最も主要な役割を演ずるのである。彼の英雄ナポレオンも唯の五分間の力で覇業を粉碎され、東洋の熱血兒成吉思汗の偉業も時の前には桶がなかつた。古來の英雄豪傑

も戦に奮ふ劍はあつても時の流れを切る劍は持たなかつた。こゝに考を及ぼす時、如何に時の偉大で又如何に人間の果敢ないかゞうなづかれる。實際時の前には、地球もない、人間もない、勿論ナポレオンとても問題ではない。我等はこゝに何かを考へねばならぬ。然し考へてゐる間も時は去り行くではないか。

あゝ時は行く。時は行く。今も駭々として過ぎ去つて行く。

時の價值

五年 吉田 榮一

時は金なりとは古くからよく時間尊重の宣傳に用ひられた諺であるが、時の價值は金以上である。時は生命である。近來時間尊重の念を強調するため、時の記念日なるもので設置されたが、未だその眞の價值を知る者は稀である。

殊に青年は寸陰を惜しむの念が甚だしく缺けて居る。吾等が一つ手を挙げ、一つ足を投げ出すその瞬間にも、時は遠慮なく過ぎ去つて、再び歸つては來ないのである。

時に、自分は机上の置時計を熟視することがある。コッ

ツと針が刻み行くあの一秒一秒の音に、耳を澄すことがある。針が動き、音が刻まれるにつれて時は経つ。而してその時間は端から何處に消えて終ふことか、又今一秒前の自分と、今の自分とは如何程異つてゐるであらうかなどと思ふことがある。そんな時何故か何時でも悲しくなつて來る。ハツと何か恐ろしい物にでも觸つたかのやうに、我に返つた時、今こそ自分が時間を惜しむことを忘れて居つた、と云ふことに氣が付く。さうして仕事に取り掛る。その時自分は改めて、時の價值を知ることを得るのである。

これに依つてこれと思ふ時、時を利用するの最善の方法はその最大價值を發揮せしむるにある。即ち活かして使ふことにあると思ふ。疾生徂徠も、「青年須らく寸陰を惜むべし。老後に悔ゆる勿れ。」と説いて居るではないか。

時の價值

五年 近藤 信一

古人は時は金なりと言つたが、今や時の價值は遙に金よりも以上である事は、衆人周知の事實である。古はいざ知

らず、近代文化の進運に伴つて、人々は痛切に時の價值を自覺するに至つたのである。詩に「少年老い易く學成り難し。一寸の光陰輕んずべからず。」と、言ふ句があるが、實に少年時代には時の價值の如何なるものかを知らず、徒らに時を空費するが、壯年期に入る頃からは、時の尊重すべきを烈しく感ずるものである。既にそれを自覺した時には、精力消耗して、青少年時代の如く元氣もなく、記憶力も減退して來て、若かりし時代に時の價值を覺らなかつた事を嘆じて、最早や如何とも爲す事が出来ぬのである。故に春秋に富む吾等は、時の價值の如何なるものかをよく了解し、老いて後悔ゆる事の無い様に、今の時代に於て奮勵し、以て智を磨き、後長じて社會の一員としての義務を果すことが出来る様に爲すべきである。歐米殊に英國、北米合衆國に於ては、時間を嚴守すると言ふことは當然のことと珍らしい事ではないばかりか、教を受けずとも各自で時間嚴守に努めるさうであるが、これは實に、英米人が時の價值を理解することに因るものである。之に反し、我が國の人々は動もすれば時間を違へ、會合でも既定の時間に開く事が出来ず自分で時間を違へ、平氣で居ると言ふのが

數年前までの有様であつた。併し近頃では時の價值を解し殆ど時間を嚴守する様になつたが、まだ一層改良進歩の餘地が、歐米に比較して見るとあると思ふ。

時の價值

五年 筒井 深

西諺に曰く。「時は金なり。」と、時の價值は果して金に比す可きか。否、時は金に勝る。

金一度手中を去るも、努力によりて再び得可し。時一度去れば再び來らず。怠惰にて過せる一瞬時は如何なる勤勉の百時間も之を回復する能はず。豈恐れざる可けんや。

我曾て家光幼時の逸話を聞けり。家光十四歳の時初陣に出でんとして之を祖父家康に請ふ。家臣側にて諫止して曰く「若殿は未だ十四歳。功名は此れより後屢々得られん。」と。家光叱して曰く。「我十四歳の時再びありや。」と。家康聞いて大いに喜べりと。家光の此の言を聞くに時は正しく金以上なり。

時の價值を知る者は實に生命の價值を知る者なり。生命

は時の連續なればなり。生命の價值を知る者にして一生を無爲に送りたる者はあるまじ。さればこそ偉業を爲し、者は皆極度に時を惜みたれ。

或者は云ふ。「爲さんと欲する事數多あれども、之を爲すに時間なし。」と。否、時間なきに非ず。意志無きなり。實行力無きなり。意志有り實行力有る者にして猶斯く言はば、そは偉業を爲す者ならん。

以上我は時それ自身の價值の偉大さを語れり。時は斯く偉大なる價值を有するものなれども、其の用ふる人により發揮する價值に多少あり。此の點稍々金に似たり。されど時は萬人公平に有するものなれども金は然らず。此の點又大いに異れり。そは兎も角、我は時の發揮する價值の多少を論ぜん。一生を無爲に送りたる者に對しては、時の價值は零なり。一瞬々々を何物かも充實せる者には最大價值を發揮せるものと云ふ可し。即ち、時それ自身は偉大なる價值を有するものなれども、之が使用者によりて價值に大小の變化を生ずるなり。

されば成功せんと欲する者、或は偉業を爲さんと欲する者は須らく時をして最大價值を發揮せしむ可し。

英文欄

"Hagi, my beloved Cradle," by T. Nasu

Many a beautiful scenery there might be in the wide world, but I think even the so-called most beautiful scenery may not surpass the one from my home. Why so? Let me explain some of the reasons.

Getting up early with crows, I first feel a cool wind greeting me and then hear her whisper the morning song to my ears. I cannot but smile at her.

The undulating hills across the broad river Abu are covered with a light silk of royal purple. Cast a glance to the east. The ruddy glow of the eastern sky is beyond description. As the sun travels, the scenery changes. Now songs of cicadas are heard here and there. Minute by minute Phoebe begins to show the fierceness of his

sword flaming fair. But, here in Hagi, we feel no oppression of the tyrant, because we have a good protector—the cool wind.

Look toward the west. There lies in the middle of the river an islet, on which many an old pine-tree is playing with winds, each in its own form. Beyond the islet is seen the mouth of the river, where lies a sand-bank, long and white, and beyond it, a part of the sea.

Now the sun, tired with the day's long journey through the broad aerial field, seems as if he wants to have a rest. Now he stands in the midst of his highest beauty, and the ruddy flames become rosy. The western sky is all gold; no, no, all gold is not only the sky, but are the sand-banks, the pine-trees, the birds flying to their nests, the sails coming back to the port; everything is sprinkled with golden powders.

All at once the curfew tolls solemn, echoing all round. Oh, how happy, happy, we are! The

soft shades of twilight are beginning to settle upon the earth; the darkness is now falling slowly upon everything. To my surprise, looking toward the east again, there hangs a full moon! After supper, my mother and I sit side by side on a chair to enjoy the silvery moonlight. The stars twinkle around her, in so many small sparkling diamonds set around a big pearl.

Views on a moonlight night are especially attractive, and, moreover, a soothing wind passes by. This is one of the eight celebrated views in Hagi. "No," I would rather say, "it is surely one of the most beautiful views on earth."

(The End.)

"Modesty,"

by E. Yoshida

Really no virtue, of all moralities, can be more admirable than modesty. A man dislikes others' arrogance, but he is unconsciously apt to forget this virtue. If he has some advantage over

others, he wants to exaggerate or parade it. So naturally he is apt to become arrogant. We must always suppress these feelings, we must value the virtue of modesty.

Arrogance is derived from the feeling to exaggerate oneself, but no feeling, it is true, is more disliked by people than arrogance. Vanity is also a feeling similar to arrogance, being derived from the feeling to exaggerate oneself. Naturally, this is also abhorred by people. Both arrogance and vanity are the results of having no virtue of modesty.

The virtue of modesty needs much courage. We must summon courage that we may overcome arrogance. Modesty does not mean flattering to others. Fine words are abhorrent to men of virtue. To supersede oneself, maintaining one's character and depreciating oneself, is, I think, the true manner of modesty.

(The End.)



生徒作品

夕涼

一年 吉松 陽

真紅の太陽は西の山へ沈んだ。まだ晝の暑さが少しはあるが晝よりも大分涼しくなつてそよ／＼と風も吹き出ししてきた。僕は晝間暑かつたので新道へ出て涼んだ。

水をまいた新道は家の中よりよほどすずしかつた。少し前までは自轉車へ火をつけずに通る人もあつたが、もう少し暗くなつたので火をつけて通りはじめた。

町の方へ大勢で歩いて行く人たちは大方活動寫真でも見に行くのであらう。時々大聲で笑つたり話したりして行く。もう暗くなつた。本町の方の電燈がかゞやいて見える。涼風を出し團扇をつかひながら、すむんでゐる人もある。

八時ごろの汽車がビーと汽笛を揚げ／＼と走る音がした。もうおそいので僕は家へ入つた。それから家の者とおもしろく遊んだ。

魚釣

一年 池田 脩亮

船は大分岸をはなれたので、錨を投げた。沖の方はかすんではつきり見えない。大きな山が遙に雲のやうに見える。あれは須佐の神山だとお父さんがおつしやつた。さうすると萩の方はその右手に當るはずだが、山は一つも見當らない。もう町田さんは、二尾も釣り上げた。魚は船の中をピチ／＼はねてゐる。ブル／＼と糸が動くので、思はず引い

て見ると、確かに手ごたへがある。深いのであげるのに中々手間がかかる。何が釣れたのかしら、逃げねばよいが。町田さんは「食ひましたか。」と問はれる。お父さんは笑つて居られる。やつと引き上げた。十三センチばかりの「のめりこ」である。嬉しくてたまらない。その内にお父さんのにも食ひついた。また町田さんが釣り上げた。底釣はこの度をはじめとあるが、一時間あまりで二十尾ばかり釣れた。

夕 涼

一年 赤木 登

今日はむし暑くて、家のなかにゐるのが退屈だ。僕は、外に出て歩きたくなつた。

外に出た。さすがに外は涼しい。冷たい風がこゝろよく僕の着物の裾をあふる。

どこの家の置座にも、人々が團扇をつかひながら雑談にふけつてゐる。誰の顔も、皆、のんびりとして楽しさうだ。僕は御弓町を通つて濱に出た。

夏 の 朝

一年 水戸邦男

どこからか、ハーモニカの音と、それにあはして歌ふ女の高い聲が、あたりの静かさをやぶつて、聞えてきた。白い濱砂の上を歩きたびに、下駄の上で砂粒がをどり、さく／＼と氣持のいい音がする。僕は、どういふわけかこの音がすきだ。

残照がだん／＼うすくなるにつれて、鶴江の家の灯は、だん／＼しるくなつて來た。漁火も、ちらほら見え出してきた。あゝ、あの船に乗つてゐる人たちは、この暑苦しい夜を、涼しい海の上で楽しく働きながらすごすのだ。波打際を數匹の小蟹がちよろ／＼と歩いて行つた。

夕陽が、だん／＼迫まつて來た。四方の山々も、その黒さをまし、すぐ前をとほる人の顔さへ、見わけにくくなつて來た。

あゝ、夜のとはりは刻々とはられて行く。やがては地上のあらゆるものも、包まれて行くことだらう。

ゴーンゴーンと鳴りひびく鐘の音に眼が覺めた。あたりは薄暗く、ぐつぐつと寝た父の寝呼吸ががすかにあたりの静けさを破つて聞えて來る。僕は素早く雨戸を開けた。東方は町の電燈で大本の上が眞赤になつて見える。此二三日

前より晴れきつた天には幾萬とも知れぬ星がきら／＼きらめいて居る。西方には昨夜出た月が西山に没せんとしつゝある。

未だ教會堂の鐘はさびしく鳴つて居る。

やがて一番鶏も鳴き始めた。鶏の羽ばたきする音が聞える。又、よその赤ちやんが眼覺めて泣いてゐる。

と、其の時まわりの木がさわ／＼ゆれて涼しい風が僕の頬をなでた。夏吹く風は意外に涼しいやうだ。

間もなく東の空が薄明くなつて來た。僕はかう香氣にかまへては居られないので顔を洗つた。冷い井戸水で洗ふ。水をかく度に足へバチャ／＼とかゝる。

顔を洗ひ終ると健康ブラシで體をする。直に體が眞赤になる。それが終るとすぐパンツ一枚で庭先へ出る。東の空は眞赤だ。太陽は美しい顔を出して居る。

前の大木の隙間は日光が眞直にさし、其の日光を縦に切

つて僕が立つて居る。眞赤な太陽は僕の眞黒な顔を照してゐる。

又、鶏の鳴き聲や羽ばたきの音がした。之は多分「鶏屋から外へ出して下さい」と云ふ訴へ事であらう。

魚 釣

一年 長野征逸

朝早く起きて魚釣に出た。餌をつけてボンと投げると、小さい／＼波紋をゑがいて沈んで行く。ものゝ一分もたない中にビク／＼引く。しめたとき上げると鯉だつた。癪にさわつたので石に投げつけるとブク／＼と腹をふくらして死んでしまつた。又ボンと投げる。今度はビク／＼グ／＼と強く引く。「手こたへあるぞ」とえいとばかりに引き上げると、二三寸ぐらゐのが糸のさきにぶらさがつてビク／＼うごいてゐる。その動きたびに鱗が金色のやうに輝く。その時は今年はじめにちんを見たのでうれしくいらひ／＼籠の中へ入れた。それから夕暮まで釣り大小十二匹程釣つた。

夏の朝

一年 神村 正

目がさめた。「今日も又よい天気だな」僕は獨言の様につぶやいた。寢床を起きて庭へ出る。さうして腹一杯朝の新鮮な空氣を吸ふ。齒刷牙子を口に咥む。白い齒磨粉が飛んで地に細かい點を打つ。齒磨粉の香はほんとにかんばしい。日は高く登りまばゆい光を地になげてゐる。あたりの木々は青々と茂り、それ等の木々から「ジイ／＼」とせみのかんだかな聲が聞えて来る。裏の棕桐の木の葉が、風に吹かれて、さら／＼と涼しさうな音を立てゝゆれてゐる。僕はゆつくり齒を磨き乍ら裏の緑濃い橙晶へ出る。木の葉を通して明るい光がもれて来る。「チュ／＼／＼」雀の群が一群二群梢より梢へと飛び廻つてゐる。朝の新生活動を始めてゐるのだ。蜘蛛の巣が夜露にゆれて、赫々たる日射を受けてまるで瑠璃か又は瑪瑙の如くに見えるのも夏の朝の一種變つた見ものであらう。輝やかしい朝だ。

魚釣

一年 中原 吉矩

たら／＼坂を上りきると、眼下に廣々たる大海が見える。急に元氣付いて、一氣に下り坂を驅下りる。青々と澄んだ水の中に、青茶等と色々な魚がいかにも楽しさうに泳いで行く。その大きい岩に腰を掛けながら、釣道具を出し、釣竿に結びつけて、ぽんと投げると、一つの波紋を描きながらぐん／＼底へ沈んで行く。居る居る何十匹と言ふ魚が一時に餌に向つて突進して來た。竿を上げると、一匹もかゝらないで、皆一所にさつと底へ沈んで行く。今度こそはと、思ひながら餌をつけて投げると、出た／＼前の五、六倍もやつて來た。さつと竿を上げると、「しめた」八寸近くあるやつがかゝつた。今度こそ逃がさないと、手早く籠に入れた。見ると、水の中には、一匹も顔を出してゐるのはゐない。

夏の朝

一年 杉原 大泰

夏の朝ふと目を覺すと時計は六時、蚊帳の中から飛び出して顔を洗つてよい氣持になつて、置台の上に腰掛けて花島の方を見れば、朝顔が赤白青紫というふうに咲いて、美しい月見草もまだ盛んに咲いてゐる。どこかで鶏の鳴く聲がした。つづいて遠くの方でかすかに聞えた。朝露のしつとりと帯びた草の中で、こぼろぎが愉快さうに鳴いてゐる海は大波であらう、波の音が此の方までも聞えて来る。ふと長く聞き馴れた燕の聲、顔を上げると電柱の針金に五羽來て南の國へ行く相談をしてゐるやうに思はれる。燕は一羽逃げると皆逃げて行つた。さうなら燕又來年會はう。

私は燕と分れて家の中に入つた。さうして朝飯を食べ机についたが何となくさびしかつた。

夕涼

一年 吉屋 竹治

父は涼台を大工に頼んで造つた。ところが雨が降りつゞいて涼しいので、一向用を足さない。それ處か、うちのばあさんは寒いと言つて戸棚から袖無を出して着た。家中の

者は餘り大袈裟だと大いにひやかした。かうした日もはや過ぎて快晴の日となつた。今朝目をさまして見たら、朝日がばつとさしてゐた。私は久しぶりに日光を受け氣がせいせいとした。人々は始めて日光の下で働くことが出來た。それから日は西に沈んで夕は訪づれて來た。父は早速涼台の裏に大きな字で「昭和六年八月新調」と書いた。

私達は新しい涼台で始めて楽しく氣持よく話す事が出來た。空には幾萬の金沙をまいた様に星が散らばつてゐる。天の川は大橋の様に南北に連つてゐる。

夏の夕

一年 福田 寛雄

月見草咲く岡の上に立つて、太陽の海の彼方に沈むのを見る。眞赤な太陽は水中に入らんとして居る。雲は朱で彩つた様に水は血を融かした様に赤く染まつてゐる。又濱の砂まで赤く染められてゐる。そのうち赫々と照り輝やいてゐた太陽は、海に其の英姿の没してしまつた。

風が靜かに吹いて來て薄が何かひそ／＼語りながらゆれ

子を二三こん釣つてゐるらしい。それからひつきりなしに釣れ時間の立つのを忘れると云ふ有様。そのうちに餌はだん／＼少くなつて行く。漸く我に歸り空を仰げば薄暗くなつてゐる。びつくりして手早く歸り仕度になる。歸途獲物を數へたら二十八こんあつた。

大漁だ／＼。

一年山中健一

「ドーン」花火が上つた。夏祭だ。にぎやかである。大變な人出だ。ドンドンといふ大鼓の音も聞える「うまいのひやいの、おいしいの」「安いく、大安賣」と物賣のどなるのがある。ガス燈の光が目にいるやうに明るい。下駄の音がら／＼と言ふ音、子供がふく笛の音、物賣の聲、それ等の聲や音がいりまじつて、ほんとうに、にぎやかだ。僕はその人ごみの中をとほりぬけて、橋の上へ出た。涼しい。實に／＼氣持だ。空には星が寶石をちりばめたやうに出てゐる。下を見ると、舟が提灯をたくさんつけて、

一年秋山實

夏の夜

一年河村定一

一年岡田章

背の高い蜜の若木が夕べの快い微風にさら／＼と音をたてる。此の木は家の前の土手にある。土手の向ふはせまい稲田が段々にすつと上つてすつきりした杉の森にきられてそれからは竹まじりの雑木林が高い峯に上つてゐる。東の山の頂上の大松の枝の間には、まぶしいほどの黄金の月がかゝつてゐる。それが見てゐる中に、とう／＼葉末をぬけて松の上にぼつかりと浮く。満月である。

月が出ると今迄静かだつた下界が俄に活氣を帯びる。澄んだ空、快い青田、それに月が加はつて夏の夜が一層氣持良く感ぜられる。蜜の青葉がきら／＼と輝いてゐる。さわやかな空氣は山の田圃をつゝんでゐる。そして稲田の畔からは遠く近くつわ蟲の音が靜かにひびく。

一年 石村 豐德

朝風の「そよく」吹く涼しい縁側で。

僕の夏の唯一の樂は水泳だ。此の頃は雨がいつも降る。まるで梅雨のやうな天氣だが時々晴れる。僕等は其の晴雨を見ては、水泳をする。其の阿武川は僕の家のおすぐ傍だ。人々は其の晴間を見て河邊で洗濯をする。

僕等が洗濯をする人々の傍から飛び込むと其等の人々はいやな顔をする。多くの友達が一度に飛込むと終には怒つてぶん／＼言ひ出す。僕等もそんなに小言を言はれては折角の楽しい水泳も面白くないので向ふの濱に泳いで行く。其處は我等の自由な天地だ。

角力をしようが、騒がうが、誰も文句を言ふ人が無い。僕は其處で逆立のけいこをして見るが、いつもうまく出来ない。やがてする内に唇が青くなる。大いそぎで、内に歸つて着物を着る。其の時の氣持は何とも言へない。僕は水泳が唯一の樂みだ。

暑中休暇日記の一節

八月二日 晴後曇

二年 中川 修二

僕は幾度も之を経験した。

濡鼠にならぬ先にと駄足で歸つた。

雷雨

二年 吉津 孝甫

墨を流した様な黒雲が、見る／＼コバルト色に晴渡つた。大空にじんで行つた。雷がごろ／＼鳴り始めると、双の様な稲妻が頻に閃いて、風が颯と前の青田を渡り、家の横の高い薄がざわ／＼と大波の揺れる様に揺れ出したかと思ふとぽつり／＼雹の様な大粒の雨が降り出した。庭先の干物をあはてゝ取入れる間に、もうさあ／＼と大地を穿つ許りの大雨、椽先はまるで洗つた様だ。雨戸を繰る。庭先がびつしより濡れて、ぼた／＼袖から雫が垂れる。庭の凹みに溜つた雨水は見る／＼中に溢れてそこら一面に廣がり、それが追々椽の下にしみ入つて来る。そして石菖の入つて居る水盤の水も外へ流れ出て、中に敷いてある細い砂利は、皆叩き出されてしまふ。どつ／＼と戸袋の外で音のするのは雨垂の音である。

飯井方面へ昆蟲採集に出かけた。

地藏峠を過ぎて磯行道を横切つた時不意に、ピョン、ピョンと鼠色のものが僕の眼前に飛び出した。

オヤツと眼を注ぐと可愛らしい一匹の小鬼が驚いて路邊の岩陰に隠れた。

棒で岩を叩く。兎は慌しく森の中に遁げる。

捕へるのは惨酷だから、見逃しておく。やがて飯井坂山に着いた。少し休んで愈々昆蟲採集に取り掛かる。

途に近い森などは子供達が取つたのであらう。いくら探しても居ない。然し彼方の林には蟬や他の虫が憎らしい程多く鳴いてゐる。然し大きな河があるので行かれない。それでも僕は藪を踏み分け、森林を迂廻し、或は荊棘藪を通つたりして随分辛い思ひをしながら採集した。

始めは同種類のも取つたが終りには駄目と思つたのは棄てた。

約十五種位昆蟲を採集した。

可成りの成績だ。蟬が頭上で頻りに鳴いてゐる。

遙か沖合に雲が出た。こりや又雷雨だ。

黒い雲が廣がると屹度空模様が変わる。

まもなく雨は止んで、轉て天の一方には美しい空の色が現はれ、其面積が段々廣がつて来て、遂に全く雨雲は其影を潜めて了つた。午後の太陽は再び輝き始めたが、其光は前よりは一入麗しく、そのくせ涼しい様な何ともいへない光である。

夏の一

二年 本石 光雄

河を横切つて向ふ岸に着いた時には今や將に陽が面影山の脊中に這入らうとしてゐた。軽い疲れを覺えた體を汀の砂地に轉がしてちつと空を見つめた。早や空の半まで群つて居た入道雲は、正義の光に打たれた悪魔の様に、眞赤な夕映を浴びて、じり／＼動いてゐる。何となしに重苦しい氣分になつて渚を振返つた。小波がざ／＼と砂岸を洗つては、金波銀波の精の如く跳つてゐる。向ふで小魚がびいんと水面からはね出て、腹をきりと輝し、波紋の中に沈んで行つた。立上つて水の中へさ／＼と這入つて行つた。體中ぶる／＼する位水はもう冷かつた。五六本拔手を切つ

驟雨

二年 西本 實

て青泳に移つた。蟲が頻に附纏ふのをやつと追拂つて、ふと四邊を見ると、もう大分下に流されてゐた。急に方向變換をして頭を上に向け流れ勝る體をぐんぐんと進ましてゐた。

ふと何か首筋に觸れた。蛇といふ豫感がぞつと體中かへ廻つて膚に粟粒が一時に立つた。くるつと寢返りを打つて見た。細かと思ひ込んで片手で横へ突き退けた。ちらつと眼に入つた青白い蛇の胴體、無残に縊られて傷いた膚、その瞬間、私は衝動的に飛び退いた。陸だつたら恐らく一間位飛上つたかも知れない。次の瞬間電氣にでも觸れたように拔手を切つて夢中で岸の方へ泳ぎ着かうとした。三四間も行くといやに喉が乾いて目は眩みそうになる。心臓は破裂しそふに早鐘を打つ。總てが無我夢中で焦れば焦せる程進みが遅い様だし、青白い蛇が今にも足下に絡みつきそうだった。岸へ上るや否や、水から飛び上つた。頭が重く呼吸が亂れて體中がぞくぞくする。附近の子供が眞青な顔をして水から飛び出した自分を見て、ぽかんとしてゐた。

松陰神社

二年 新谷 幸治

鳥居を潜つて進むと側の賣店には皆松陰先生に因んだものを賣つてゐる。更に鳥居を潜り境内に入る。拜殿の前に額づいた時に奥から響き聞える太鼓の音。先生が長へに此處に鎮座しますと思へば殊に森嚴なる感に打たれた。記

念館を左に見て松下村塾所在地に行く。そこら一帯の木々は私の心をいやが上にも厭ならしめる。

家の中には伊藤公やその他の塾生の寫眞が掲げられ、机が一つ置いてあるだけである。その飾り氣の無い机は當時の事を物語つてゐる様だ。この小さな陋屋から維新回天の大業をなした偉人を多數出したのは、先生の偉大な人格の然らしめたものに外ならない。それから先生幽因の室などを拜見して益々その當時を追懷してやまなかつた。それより後に引返して米搗臺保存舎の側を通り先生誕生地に向つた。

星移り人變るも偉大な先生の魂は永劫に滅びる事はないであらう。

眞夏の菊ヶ濱

二年 尾崎 一壽

無人島にアホー島の群が居る様に陸も海も澤山の人が右往左往して居る。今年菊ヶ濱へ海水浴に來たのは私にとつて此の日が初めてだった。私は海の上を走る様に泳いで、

クーニンク臺の下へ着き——上へあがつて一息した。濱には海水着の老男若女が數多蠢いて居る。水平線の彼方にはトン／＼と白い煙を吐いて行く舟がある。是は多分發動船であらう。突如側で「ザブシ」といふ音がした。振り向いて見ると、若い男が臺の上から水面めがけて斜に飛んだのである。水中に沈んで間もなく横の方に黒い西瓜の様な頭がボコンと浮いた。拔手、平泳、横泳、脊泳と順次に高い臺から低い臺と泳ぎ廻る。紅日燦くが如き眞夏の晝過ぎを泳ぎながら過すのは愉快の極みである。

雷雨

二年 田邊 實彦

午後の日は皮膚を焦す様であつた。岩も壁も觸るれば熱い。遙かの空に白い積雲が現れたかと思ふ間に厚くなり重なり合つた。私は臆際に立つて天の一角から湧き出して來るむく／＼した雲を見て居た。黄色い太陽の光は暫くは空の黒い影と争つて居たがその最後の華やかな輝もたう／＼消えて、地上は薄暗い陰氣な世界に成つた。さつと吹き出

夕方の一時間

二年 宮崎 茂

西方一帯の空は茜色に染つて、神々しく美しく見える。清麗な日輪の姿は、今將に西の彼方に没せんとして居る。今迄騒がしかった町も、今は忘れたやうに静まつた。電燈が朧にあたりを照らしてゐる。静な夕だ。

獨り黄昏の空を望む時、自然の微妙な色彩、一幅の畫を見るやうだ。高く聳えて立つて居た青い椰子の葉も眞黒に染つた。日は全く西山に落ちた。遠い山、人家、萬物、皆一つ色に融け合つた。豆腐屋の吹くラツバの音がブーと聞えて来る。「平和な夕だ」此の様に歎息せずには居られなかつた。何時の間に黒い幕が大地を襲つた。

高く銀河のあたりには一番星が出た。又カフエーの蓄音器が賑やかに歌ひ出した。

夏の曉

二年 松浦 二朗

あゝ！最早五時半だ。起きて見ると、太陽は東の空で笑

した一陣の風は唸聲を立てゝ窓を襲つた。天氣は次第／＼に險惡になつて來た。黒い塊が後から／＼と空に湧いて來る。その下には赤黒い霧がすん／＼高く廣がつて大きな幕の様になる。雷が鳴つた。一寸止む。今度はもつとひどい雷が鳴る。風は家の邊を吠え廻る。ひどい砂煙を立てゝ窓に吹きつける。木の葉は風に狂つて亂暴な踊を踊つて居る様である。雷が鳴つて居る間に部屋が急に暗くなる。さうかと思ふと今度は又ちきに庭をさつと照らす電光でパツト明るくなる。不意にはつと目が眩む程の鋭い光がピカツと光つて、骨身にこたへる程の「かり／＼ずしん」と云ふ様なひどい音がした。確かに近くに落ちたに違ひない。雷の音が遠退いた。雨が窓を打つ。家の邊りに瀧の様な雨がざあ／＼と／＼と騒がしく音を立てる。窓ががた／＼と鳴る。半時間後にはすつかり雨が上つた。山の上にはまだ黒い雲が残つて居る。遠方からは小さい雷の音が聞えて來る。今まで何も見えなかつた庭が又生々として來た。私は庭に出て雨上りの濕つた空氣を心持良く胸一杯吸つた。

つてゐる。濱に出ると發動船、小舟等は勇しく沖から歸つて來る。中には旗を立てゝ、繪調子を勇しく「えつさ／＼」と港めがけて押寄せて來る舟もある。

市場では「一貫／＼五貫／＼」と競り立てられ、人々は入り交り駆け廻つて我先に魚を買はんと焦る。

六時三十三分奈古驛發の列車は、汽笛一聲朝霧を破つて大井驛へと向つた。

僕は朝の空氣を吸へるだけ吸つた。

雷雨

二年 能美 忠廣

ターニング臺にも人がある。「さんぶ」とばかり跳込んで。如何にも氣持がよさうだ。濱傳ひに澤山小學生が來る。多分、彼等は游泳講習生であらう。

「カンカンカン」さあ今から水泳の講習が始まるのだ。

眞夏の菊ヶ濱

二年 小田 數夫

日はかん／＼と照りつけて足裏が焼ける様だ。

邊には色々のパラソルがぼつ／＼見える。沖には發動機船が白波を蹴立てゝゐる。

指月山の先端では白波が泡を飛ばし、跳込臺の近所にはボートが浮んでゐる。

波打際では小さい子供達が砂いぢりをしてゐる。浮囊に縋つて泳いでゐる者もある。

遠くの方で雷の音がごろ／＼と微に聞える。ものゝ三分も立たぬに雷は頭上にやつて來た。太い針金の様な雨は盛に大地をたゞきつける。雨垂はひつきり無しに落ちる。今まで此の世を我が世と鳴き誇つて居た蟬も雨には叶はないと見えてびたりと鳴き止めた。鶏は「何事が起つたのかなあ」と云つた様な顔をして吞氣そうに空を見つめて居る。一家總動員で干物を入れる。がたん／＼物干竿の落ちる音、ざあ／＼雨の降る音、ごろ／＼と鳴る雷の音、大自然の脅威の前に人と物との入り亂れた様はまるで戦場の様だ。今までは子供の遊び場で有つた庭が俄に洪水の庭と變つて終つた

弟等は雷の鳴るのを恐れて身を臥せて居る。そうする中に眞黒だつた空の雲は千切れて青い空が見え出した。雨は弱く成つて黒雲は次第く向ふの山に姿を隠して終ふ。やがて日が出た。雨上りの地上をやさしく照す日光は何とも言へず氣持が好い。黒雲はさも名残惜しうに山の間より頭を出して此方を見つめて居る。

旅行

二年 山下 誠 一

ジャン／＼ジャン／＼ジャン。

耳を聳するばかりの出帆を報せる鐘の音に耳を抑へて船室に飛込んだ。船室の内部は變な臭が充滿して居た。

遂にその惡臭には堪へきれなくつて甲板に駆け上つた。上海航路の上海丸は將に長崎岩壁を放れんとしてゐる。見送り人の悲しい哀別の聲。向ふの方では頭を何邊も何邊も下げてゐる。先刻から勘定してゐると十一邊だ。何と頭を下げる事の好きなおばさんだらうと心の中で苦笑しながら船の方へ近づいた。

眞夏の菊ヶ濱

三年 中野 博 造

長い休暇だけに郷里に飽き、萩が戀しくてならなくなつたので、一日汽車に揺られて遊びに出た。眞夏の萩の姿は萩中生徒のくせに僕には初めてであつた。菊ヶ濱へ！汗びつしよりになつた上衣をかゝへて急ぐ。クロールの音が直ぐ足元で聞える。汐風が鼻をつく。賑合ふ人の聲。菊ヶ濱だ！蒼々と展げられた海。僕はギュウと、それを睨ん

で、服を捨てる。喰ひつきそうにそれを伺ふ。一つ、二つ三つ。打ち寄せる波を踏んで走る。どぶん！

いよ／＼身體全部が倒れる。冷やつとする。パチャ／＼。初めて志都岐の山が涼しく浮ぶ。と思ふと。もう足の届かない所に出て居る。海に遠い郷里では、餘り海へ行けないのに、今萩の菊ヶ濱へ来て泳いで居るのだと思ふと堪らなく嬉しい。九月學校が初まつてから、級友と揃つて泳ぐのは今年の名残に過ぎない。眞夏の今とは趣が随分違ふ譯である。泳げ！泳げ！思ふ存分泳いでやれ。今時分級友連は此の海を懐しがつて居るだらう。嬉しいまゝに僕は一氣に泳ぎ續けて、夏の日を遊び暮した。歸りの汽車では疲れが出て眠つた。もう少しで乗り越す所だつた。翌日僕は級友數名へ葉書を書いた。眞夏の菊ヶ濱で泳いだ事を鬼の首でも取つた様に威張つて。

夕立

二年 荒川 勉

向ふの山の頂の邊から、一群の入道雲がむく／＼と頭を

プボ！大きな聲に飛上つて驚いた。と同時にガタ／＼と側の機械が今までより一層ひどく動き出す。船は靜に陸を放れた。「左様なら」「左様なら」あちらこちらで大聲で叫んでゐる。最早ディーブも切れ名残惜しうに船の後を追つて來た人々も終に視界の外に消えて了つた。去年以來待ちに待つた歸郷である。眼前に友の顔。師の顔。父母兄弟の顔が髣髴として湧いてくる。空はどんより曇つた雨模様。船は樂しき夢を乗せて一路前進を續けるのである。懐しき上海へと。

もたげた。早い／＼。見る／＼中に頭が皆出て、體の半身以上見える。それが頂を傳つて、ぐん／＼廣まる。やあ又出た。すぐ隣だ。其の雲が又友達を呼ぶ。暫くすると、空の西北方面を除いて、一面墨を流したように散らばつて、僅かに残つて居る青空と戦ひでもして居るように、どん／＼攻め進んで行く。下界が薄暗くなつた。夕方のようだ。今にも電燈がつくのではないかと思はれる程、物凄くなつた風が荒くなつたやうだ。人聲が少くなり、今が今まで往來で遊んで居た小供等の叫び聲も止んだ。耳に面白い音楽を聞かせて居た蟬も此の天候に驚いたらしく、はたと鳴く音を止めた。庭木がざわ／＼さわめき出した。柿の木が葉をばた／＼させては大きな體をゆすぶり出した。いよ／＼物凄くなつた。同じ暗さでも夕方のような落着いた氣分はない。此の下界が今しも何物かに襲はれて、不安な氣分に包まれて居るやうだ。「大分ひどい夕立だぞ」と心の中で叫んだ。と瞬間、大きな雨の玉がぽつりと勢よく落ちた。續いて又一つ、二つ、ざあ／＼と忽ち大降りになつた。大きな奴がさあ／＼と矢のように落ちては、大地に烈しく叩きつけられて、しぶきとなつて飛び散る。家の後の亜鉛板へぶつか

つては「ばた／＼」と大きな音を立てる。通行人が走り出す。兩側の角へ飛び込む。車が水をはねて走る。

ふと此の間買物に行つた途中、丁度此のような夕立に遇つて、びしょぬれになつて走り出した事が電光のように頭に浮んだ。其の時の僕の狼狽した姿を、頭の中に描きつゝ、目でもう一度此の烈しい夕立を見渡して窓を閉じた。

雷雨

二年 田中達樹

かん／＼照つてゐる太陽の爲に、薄暗い筈の僕の机の上まで明るい。藤野君の家のエスも長い舌を垂れてはあ／＼と吐息をついてゐる。向ふの面影山の影からもく／＼と入道雲が現はれた。だん／＼と黒い奴が後から／＼やつて来る。太陽が隠れた。暗くなつた。生澁い風が吹きだした。向ふの林が黒くさわ／＼と動く。大粒の白く光るのが斜に銀の矢をねらひ／＼射る様に、ぽつり／＼とやつて来た。白く乾いた道に黒いしみがだん／＼多くなる。お母さんが大急ぎで干物を中に入れて居られる。隣のトタン屋根を打

つざ／＼と云ふ音が耳に響く。ゴロ／＼と遠くの方でうなる様な音がする。いよ／＼本降りになつた。百姓のお爺さんがしりからげでとつ／＼と走つて来る。瞬間頭の上がピカ／＼と光つた。ガラ／＼／＼ドシンといふ様な猛烈な音がした。近所のおぢさんが「今のは何處かへ落ちたぞ」と云つてゐられる。一しきり横なぐりにしぶき廻つて窓にばた／＼と當るかと思へば、ばた／＼騒ぐ人々の、まだ静まらぬ中に凄じいしぶきが區切つた様に弱くなり、やがてばつと雲の切れ間から太陽が見えた。ゴロ／＼といふ遠雷の音が耳に聞える。庭の樋からぽたり／＼と落る滴が日光に映えて眞珠のやうにきら／＼と光る。湿つた草木の鮮やかな色が生き返つた様に目にうつる。あたりは日本晴の朝の様にすが／＼しい氣分に満たされてゐる。

山への憧憬

三年 蒲 一元

啄木は言つてゐます。「ふる里の山に向ひて言ふことなし、ふる里の山は懐しきかな」。山はすぐに私の故郷を思

ひ出させます。なつかしいあの私達小學時代にはよく春はわらび取りに、秋は栗拾ひ等をしたあの頃の事が頭に浮んで來ます。ほんとうに山は楽しい。あの山の木へ鈴なりになつてゐる栗を取りに行く時は何時も私の心はをどりました。自然はほんとうに我々を幸福にめぐんでゐます。あの行く途中青葉の美しい何んともいへないすが／＼しさがあり、私達の鼻をよはせる新鮮な香に、肺臓は風船のやうにふくらみます。あの山の何んともいへないしづけさは私達の心をおちつけます。そしてあの山の景色は私達を恍惚とさせます。愉快に快活にさせます。故郷の山はほんとうに我々に憧憬を持たせ又懐かしがらせます。おい我が愛するなつかしき故郷の山よ！

幸福の日

三年 永田 晋

心は過ぎ去つた或日に立ち歸つてゐた。
空は紺青に澄み渡つてゐた。日はうら／＼かに照つて、小川の水は躍つて流れてゐた。僕の心は嬉しさで一抔であつ

た。網を持つ手も喜びにふるへてゐた。お父さんと一緒に小川を沿うて歩きながら小えびをすくつた。萩の垂れ下つてゐる下に鮎が威勢よく泳いでゐた。
風が吹いて來ると、岸の尾花がさら／＼と音を立てた。さぶ／＼と水の流をさえぎつて、岸傳ひに歩いて、時々立停つては川面をじつと見つめた。大川が向ふに見える。そして、燕が水にすれすれに飛んで行つた。疲れるのも忘れてゐた。澤山とつた小えびを、魚かごに入れて、楽しく歸つた時の一日、あの様な楽しかつた一日を、今思ひ出す度に嬉しくなる。

忘れがたき著書

三年 田村 甫

私は餘り本は讀まぬ方だ。讀むとしても小供らしい雑誌とか伽話だ。外の友達の中には菊地寛全集とか色々の物を讀んで居る者もゐるが、氣が知れぬ。一寸かりて讀んだが一頁ぐらいであいてしまつた。

だが此の前の春休に讀んだ「坊ちゃん」だけは面白いと

思つて讀んだ。

私の親父は色々の全集ものを取つて居るが、今だかつて親父のその本を讀むのを見た事がない。そのくせ、私が讀まふとすると「まだ早い」とかなんとかもんくをつける。

「坊ちゃん」を讀むには、始めのうちはかくれて讀んで居た。がしかしあまり面白いので夢中になると、堂々と人の前でも平氣で讀み出した。「坊ちゃん」を讀んで居るとつい笑はずには居られなくなる。私が「坊ちゃん」を讀んで居て突然笑ひ出すことはたび／＼であつた。そのたびに妹がびつくりした。「坊ちゃん」は私を何偏笑はせたやら解らぬ。「坊ちゃん」を讀んで居ると、人間世間から、愉快な面白い天國へでも行つたやうで、文中の人物にでもなつて居る様な氣がする。そして「坊ちゃん」を讀んだあとは何となしに、氣が晴々しくなつて、心がどる様である。私は「坊ちゃん」より外面白い文を讀んだことはない。まあ忘れがたき著書といへば、「坊ちゃん」ぐらゐだらう。

山への憧憬

三年 田中 博

僕の理想とする山はあの歐羅巴に聳ゆるアルプスの山々である。澄み切つた大空に聳ゆる山々、谷間に點在する寒村の家々、其處此處の小高い山腹の草を食ふ羊、牛の群。鼠白な衣をつけた山々と空と相映じて恰も碧海に立つ白波の如く。麓や山腹に咲く草花、高き頂に近く咲く高山植物の花、谷間に靜寂にうづくまる湖。湖に寫る白き山々。青き空。

此等の山々の頂の割立せる岩に立つて廣き下界を眺めた時千里四方は一目だらう。此等の事を思ふ時身のむづ／＼するのを感じる。

僕は一度此の壯觀に接したいものである。

母のよろこび

三年 田中 健介

二年前の事であつた。朝早く友達の家遊びに行つた。

「政樹や／＼もう三時になつたよ。」と優しいお母さんの聲が枕元です。あゝ又嫌やな三時が來たと思ひながら、體溫器を受け取つて汗と熱でぬち／＼した腋に狹んだ。

お母さんは軽く蒲團を抑へて下さつた。ほんの五分間ではあるが、その五分間には到低壯健な體の持主に味ふことの出来ない苦痛が腦裡に浮んで來る。抑へても／＼浮んで來る。そして嫌に神經が尖つて一種異様な不安に體全部が占領される。あゝ、いやだ！ とつぶやき乍ら靜かにお母さんの顔を見上げた。母さんは「もう少しの辛抱よ」と、につこり笑はれた。僕は急に悲しくなつた。そして何だかすまない様な感じが胸に込み上げて來る。お母さんの顔は四五日の看護にげつそりやせられた。段々目頭が熱くなつて來るのを感じる。母さんの顔も輪郭だけがぼんやり浮んで見える。思はず目をつぶつた。顔にたらつと涙が流れるのを感じた瞬間「もういゝよ」と母さんの聲。やつと時は経過したのだ。高鳴る胸を制しながら恐る／＼出して見た瞬間思はず「やつた」「有難い」と呼んだ。水銀は如何にも體の健康を物語るかの如く、赤い目盛の下を指示してゐるではないか。母さんもびつくりして「どれ／＼／＼」

空はよく晴れてさつぱりした日であつた。さん／＼遊び疲れて家に歸つて見れば、家の中はがら空であつた。僕は何となく淋しい氣持がした。キングを持つてごろりと横になり、盛に讀書に耽けつてゐると、柵の上の置時計は四時を知らすが如く鳴りひびいた。おやもう四時だな、なぜ母は歸つて來ないのだらう、と思ひ仕方無く家の仕末に取り掛つた。だがその時は何となく氣持良く片附けられた。座敷や庭を掃き、外に水を撒き、とうとう仕事はすんだ。然し母は歸りそうになかつた。それから十分位たつて、やつと母は歸つた。その時の僕の心はなんだか嬉しかつた。お母さん何故こんなに遅くなつたのですか、と問へば母はその返事をせず、にこ／＼した顔で僕を見下した。僕の心は嬉しかつた。その時の母の喜びは今だに僕の心から去らな

うれ／＼／＼／＼

三年 田中 政樹

と體溫器をとられた。「まあ―よかつたね」「もう―大丈夫よ」と慈愛深い聲で言はれた。嗚呼、其の時の喜び、僕の嬉しさ、母さんの嬉しさ、僕の頭の中は数々の嬉しさが走馬燈の如く廻轉し、胸は喜びが充滿した。實際自分は夢と思つた。と同時に止め度のない幸福感が全身に躍動し、餘りの嬉しさの爲母さんと共に心から神に感謝を捧げるのであつた。

汗と涙

三年 來島敏夫

夏のシーズンが來た。此の夏休こそ吾等の身體を汗と涙を持つてきたるべき重要な季節である。なんとすれば秋の大會の準備期であるからであります。汗と涙を持つて基礎訓練より力の養成へと専心すべきである。四十日の練習に依て且つ其の努力によりまして秋のシーズンを飾るにふさわしい光となつて發現するのであります。競技は力であり又汗と涙である。其の内面に潜在する強き生命の力である又この汗と努力によつて養成されるのである。やがては

大なる力となつて表れるのである。吾等は常に汗と涙とを持つてあの赫々と照る太陽の下において努力を続けねばならん。

僕と環境

三年 柳井清

「孟母三遷の教へ」とは何を意味するのであらうか。何が大聖哲孟子をして過去、現在否未來に於ても多數の同胞より尊敬さるべき人物に導いたのであらうか？

その原因を求むるならば種々あらうが、その大なる原因として「孟母三遷の教へ」を考ふべきではあるまいか。

即ち彼が如何に良き環境に恵まれたかを。

我等が歴史を繙き、靜かに過去を眺むる時、史上に大なる足跡を刻した偉人も、政治家も、文豪も詩人も、或は悪人も、破壊者もあらゆる人が彼等の周圍に常に間斷なく働きつゝある環境に支配され、或る者は大人格者となり、或る者は大罪人となつた。

あゝ！人の周圍を取巻く環境、何と云ふ偉大なる力であらう。

あらう。

僕は未だ若く、前途に希望あり。未知數の將來を開拓してゆく行人である。しかもその環境は常に大なる力を、無限にゆつくりと、しかして間斷なく及ぼしてゐる。僕は常に自己に及ぼす環境を眺めんとすれど、それには未だ餘りに若い。然し「英雄は自ら環境を作る」と云ふ言葉を深く考へ、常に良き環境に恵まれて成功の扉への一步一步を確實に正しく歩まんとしてゐる。

僕は望む。環境が成功の助力を與へんことを。

男性美

三年 菊屋嘉十郎

隆々たる筋肉とその中に溢れ盡きることのない精氣の醸し出す美。それは獨り男子にのみ見出す事の出来る美である。昔は所謂業平型を以て美男子とした時節があつたが、今では全く反對になつて、たくましい男らしいのを男性美として讃へるのである。尤も業平と云ふ人は世間に云ふ如く柔弱なフツペリ型でなく、極めて立派なガツシリとした

體格の持主であつたそうで、美男の型をはき違へた後世の人々の評判を黄泉で聞いてさぞ苦笑してゐるであらう。夏の濱邊は男性美の大作である。殊に萩の如き田舎の海に於て最も多く見る。それ等の盛り上つた筋肉の躍動を見ると、つよく／＼嬉しくなるのである。これ等の力強い人々があるからには我帝國の守りは大丈夫と思ふからである。だが幾ら外型は立派でガツシリした筋肉の所有者でも、精神的に缺くる所があれば男性美の持主とは云へない。勇氣、正義、正義、義侠心、理智等を兼ね備へてこそ、初めて眞の男性美の持主と云はれるのである。我々は心身共に錬磨して國家の干城として恥かしくない男子とならねばならぬと思ふ。

溪流

三年 伊東美一

勢よく流れて來た水が、岩角にあたつて白く碎ける。それが又他の岩に碎けて、流れて渦まいて絶えぬ争闘のやうに繰り返へされる。かうして争つて流れてうねり／＼した

その向の遠い彼方の、襟のやうな山合ひから、里の方が一帯に霞んで見える。静かな風が側の竹藪にざわめいた。何處かで鶯がさわやかに鳴く、とその後からいゝ聲で唄ふのが聞える。やがて女が柴を負ふて二人、笑ひながら山を下りて来た。自分の前を通る時、背負つた柴の相磨れる小さな音がした。「あの人鮎をとるのねえ」。通り過ぎてから自分の噂らしい事を云つた。鮎。こんな流れに鮎が居るのかと思ふた。そうして足許の流れを見た。何年か洗はれた岩や小石が、美しく轉がつてゐる上をさアと流る水は、何が流れるか分らぬ程早い。前の山はその恐ろしい影をこゝまで横へて、頂を越した日光は流れを斜に明るく照した。岩に激する水の音が一しきりさアと音を立てると、清い空気を動かして、黄色い小鳥の、滑かな囀りが氣持よくあたりの静けさに響いた。

夏は行く

三年 大島 康 正

夕日輝く水泳台、一人じつと腰掛けて過ぎ行く夏を回顧

必要とするのである。この補給の爲めに生じたのが新聞である。新聞は日々の世界の動き、自國の動き、個人の動きそれは政治でも、外交でも、財政でも、經濟でも、學術でも、文學でも、藝術でも、思想でも、戦争でも苟くも人生に起る新しい動きは皆報する。そして評論もする説明もする、警告もする、これによつて吾人の頭は常に新陳代謝の作用が行はれる。それでも新聞は單にこの新陳代謝をはかるのみならず、實はそれ以上もつと大なる仕事をしてゐる國家の政治、社會の思想、世界の外交は輿論の名に於てその左右する所となつて居る。新聞の威力大なるかなといはねばならぬ。但し新聞も購讀者を離れては立ち行かない。ここに御多分に漏れぬ生活苦があるのではないか。吾人は先づそのことを心得て讀む必要があると同時に、この新聞をして眞に價値あらしめんために吾人の讀者としての向上をはからねばならぬ。

夏は往く

三年 横田 十久 夫

す。只「面白かつた」の一言に盡きる奈古の四十日、此處はいい波も静かだし舟もある。新鮮な空氣の漲る清らかな朝の二時間を讀書に費し、村の小學校で晝迄ビンボンやバスケットの練習、晝からは、さざえ取り、魚釣りに黒んぼの生活、去年に較べるとさざえを取るのも上手になつた。上つてやるつば焼の美味さ、毎日／＼の鹿島行き。今や宿題も完了して僕の心は澄んでゐる。併し僕は悲しい。楽しい四十日は只一片の星霜と過ぎた。明日は又秋へ歸らねばならぬ。
あゝ！ 夏は行く。楽しい幾多の懷をのせて。秋は来る雄々しく立つ二學期の勉強をもつて。
あゝ夕日は沈む！

新聞

三年 永 久 政 次

吾人の頭腦は常に新鮮であらねばならぬ。新に釣り上げられた魚が船底でピン／＼躍る様に彈力に富んで居ねばならぬ。この新鮮を保つには是非とも之に十分な糧の補給を

山の峯からムク／＼と顔を出して、チツと酷熱の下界を見下してゐたあの夏の雲、——それも、もう此の頃では見る事は出来なくなつた。そして、其れは、澄んだ青空に——高い空に——、日和とんぼの飛び交す空に、あの夏の力のこもつた眞白な雲に較べて、ふんわりとして、よく見れば少し黄味がかゝた雲が、あちらこちらに少しづゝ動いてゐる。

雲間から照らす光線が家の黄色の壁に當つて長い／＼影法師を引く。

そうすると、つくつく法師の鳴く聲が、五六枚の茶色に變色した葉を落した木立の上から聞へて来る。靜かに靜かに唯孤獨。あくまでもうつり往く新しい季節に向つて對抗しながら……。

そうして、うつり往く季節に最後の抵抗を試みた此の哀れな蟬も力つきて終には地上に其の死體を横へるのだ。

そしてその上に秋の赤く色どられた夕陽が落ちる。

秋だな！——此う感じる時、一種淋しさに似た氣持に襲はれる。

手紙

三年 小方 司

勉さん。もうきもは焼かぬ様になつたかね、僕があらに居る頃は仲々亂暴だつたね、風呂の中で喧嘩して、裸でぬれた儘とび上つて、さわいでお母さんに叱られた事も有つた。又お菓子を買いに行くと言つて、おばあさんにねだつて、お母さんに叱られたね、今頃は決して勉さんは、そんな事はしない行儀よく遊んで居ると思ふよ。

裏の柿はもう、うれたかね。勉さんと木に登つて真赤にうれた柿を取つて食べた、その愉快さ、その甘さは、今だに忘れられない。もうそちらの方では稻を刈り取つただらう。そのほを山程積上げて、さん／＼と稻粒を打つて居た若い男や女が大聲を揚げて、陽氣に歌つて居た、ことどもを僕よく天氣のよい日など田邊を通る時、思ひ出すのです。それから此の間、雑誌を送つてあげたが讀んだかね、仲々面白いだらう。あれは僕が蓄めて居たお金で送つたんだよ。その事をおばあさんに知らせたら、おばあさん大變よろこんで、勉も、もう本を讀む様になつたか等、年寄らし

歌が口に来てゐる。

こんな事は自分達がよく平常経験してゐる事である。自分達がもつともつと感情を發達させ感覺を鋭く働かせて世に處すれば色々な事に出會して自分の個性をより以上に詩歌や文章や繪畫によつて表し自分の趣味をつくりあげて行くだらう。

自分達が小學校の一、二年の時には作文と言つても幼稚なものだし唱歌と言つても「ハトボツボ」「桃太郎」の様なものばかりであつたが然しその時分にはそれが自分等に相應してゐたのである。けれども世の文化と接觸を保つて行く内に感情も發達して今自分には天が自分達に與へた個性の趣味に徐々と覺えやうとしてゐる。

如何なる方面に向ふとも文藝的情操は誰も持つてゐる。社會の暗黒な裏面に雄々しくも機械を友として働いてゐる勞働者にしても秋の澄み渡つた空に月を見た時あゝ清らかな月！ 靜かな夜！ 感傷的な秋！ をしみ／＼感じるだらう。そして一日の勞苦を忘れてそこに詩や歌を作り出すだらう。假令それが詩人の作に劣るともそれはその勞働者の實直な感じ生命そのものである。

六八

い事を云つて笑つて居られたよ。おばあさんは仲々達者で風呂水などもくんで下さいます。柿も栗ももううれはじめたがはらをこわさない様にしないではいけませんよ。

歌

三年 辻野 三郎

「まあ！何と美しい花だらう」そう自分達が感じた時に文章を作る事に趣味を持つ人達は之を文章にし。詩人は之を歌としてその花の美に對しての自分の感情を表す。さうして自分の心を慰めるだらう。

善人でも悪人でも亦強者でも弱者でも男子でも女子でも人は皆表現本能をもつてゐる以上、或る物を見、或は聞いた時一種の感じを起すだらう、それが強く感ぜられた時人々は自分の個性にかなつた表現をするだらう。

自分達が机に向つて勉強してゐる時でも寂しく優しい文になると「エジプトの夕」「ナイルの流」といふ様な歌がいつの間にか口笛となつて歌ひ出されてゐる。問題がどんな／＼出来て嬉しく勇敢になると「マーチ」の様な華やかないかなる作品でも自己の個性の表現である以上言語の裝飾は別として感じは實感であらねばならぬ。個性の表れてゐないならばどの様な作品でもそれは生命のない藝術味のない何の價値もない作品であらうと思ふ。

勤勞の愛好

四年 佐伯 一男

勤勞の民族は榮える。然れども私は支那を考へた時、どうしても亡び行く民の哀愁を感じさせられる。

支那は勤勞の國ではある。そうして國民は勤勞に對する百パーセントの忍耐力を有する。然れどもその勤勞たるや底知れない大陸に受けた底知れない忍耐力であるだけで一歩進んで勤勞を愛好するに至つてはゐない。

では我等の國を考へざるを得ない。興亡盛衰の相移りて一たび世界に豪華を驕れる國も、何日かは廢墟となる。唯だ移らず變らず榮えて世の盛衰の外に立つたものは、我が君のしろしめす貴き大八洲のみである。

是等は一に歴代陛下の御稜威に依る所であるが、又一面

六九

下に仕へる赤子の勤勞でなくて何であらうか。彼等の勤勞は自發的であつた。つまり勤勞を愛好してゐたのだ、故にその結果の勝利は永久的であるのである。立派な記録を作つたのである。

我等はその下に生れ榮ある歴史を有し、美しい自然の中に育まれて地味豊饒河海に利を得一步を出でずして、そこに生活物資を得る事が出来た。恵まれし民族、それは幸と限るであらうか。自然は我等を餘りに無感覺ならしめてゐた。勤勞の必要がなかつたのである。

が地球は又廻つた、時代は遷つた。我等が今勤勞を忘れてゐる事は、國家の發達を遅れしめるのではなく、實に亡びさしめる運命を招くものである。

「勤勞に親しみませう」私は今から同胞にさげびたい。

自由と平等

四年 木本 靜 广

地球上の全人類は、自己を中心として一切の自由を希ふそれは、世界全人類の欲して止まざる平等的、普遍的なる

慾望である。我等の日常の努力の目的は種々多様であるが結局はよりよく生きんが爲めに、より多く自由平等を求めんとするのである。

然るに我等は往々にして小なる目前の自由を求めて、本能的或は發作的なる自由の行動をなし、遂には大なる後悔の不自由に束縛されることが屢々である。而して其の得たる自由も結果は我が生活に不自由を與へるものとなる。然れば眞の自由とは如何なる性質の物を稱するか。天地宇宙の法則即ち眞理に一致すべきものであらねばならない。而してそれは不自由の中に見出したる秩序あるものでなくてはならぬ。本能的に發作的に起る自由をその儘行動する時は、往々にして法則に一致せざるものがある。而して若しもこれを一時壓へるならば不自由は直ちに眞理に一致する眞の自由に通ずるものである。故に眞の自由は不自由を開拓せる結果より生ずることが知られる。而して其の自由は大宇宙の眞理に通ずるものだ。

大氣の流動である風を見、水の動揺たる波を見る。而してそこに平等と不平等の事實的現象を目撃する。即ち自然現象によりて起る特殊の低氣壓は高氣壓によつて平等とな

らんとつとめて風を生じ、水は水平ならん事を欲して波を生ず。風波の原因は平等にあるか、又は不平等にあるか。

不平等を欲して平等を破りたるにあらず、平等ならん事を欲して不平等の風波を起すものであり、その不平等は平等に向はんとする努力である。此處に於て眞理は平等にあることを知る。然れば平等も不平等も眞理追求慾の二面に現れたるに外ならないものである。

我等は日常生活に於て自由を従とし、平等を横となして眞理に合致すべく努力するならば、それは不自由、不平等と戦はねばならぬ。我々の日常生活は餘りに小なる自由慾に、餘りに小なる平等慾に捉はれすぎて居ることを考へねばならぬ。そこに人間本來の運命も使命も考へる事が出来るだらう。

自由と平等との意義を曲解し、徒らにマルクス、エングルスに憧れて自己を省みる事を失つた人々は甚だ憐憫に堪へざる輩である。安價なる人生觀を以て一生を終らんとする人々や、人間の使命を忘れた人々は、不治の病魔の牢獄に繋がれたも同然である。ハートの全部に一旦病菌の食ひ込むや、如何に考へ直しても捉へられたる者はもはや脱す

る事は出来ないのだ。大それたそれ等を心の主人に持たねばならぬだらう。

我等は須らく病菌を持たざる健康なるハートを以て思索し哲學することだ。或人の言葉に「青年よ、二十歳にして偉大なる哲人たれ」と。我等は人間の尊嚴の爲に、使命の爲に、眞の自由と眞の平等の上に立脚して、人生生活を營まねばならないと思ふ。(八月十六日郷里の小學校講堂に於て浮川彌太郎氏の講演を聞き歸りて感激未だ覺めざる時に執筆す。文中には浮川氏の言もある。講演は「現代思想問題に就いて」)

皇室中心主義

四年 金子 治 平

人類は社會的動物なりとは既に數千年前に於て彼の碩學アリストートルが道破せし格言なり。人は單獨には生存し得ざることは喋々と辯を待たず。歴史ありて以來數千年間邦家の興亡其の數を知らずと雖も、現今の世界に國を建つるもの大概皆其の發達の軌道を一にして、所謂共同生活に

よりて鞏固なる團體を爲すにあらざるはなし。人の心の同じからざることは宛も其の面貌の同じからざるが如しと云へば、此の相同じからざる數千萬人の心を打つて一國とし、國家と稱する一活動物たらしむる所以のものは即ち國家主權の作用なり。而して彼の帝國主義と稱するものは大和民族を本位としての帝國主義ならざるべからず。彼の平民主義と稱するものは日本國民を總括したる平民主義ならざるべからず。社會主義は富豪に禍ひして貧民に祉するにあらず、一切の階級に通じて皆その慶びを共にすべきものにして貧民救済策と云ふべきものならざるべからず。然も帝國主義や平民主義や社會主義を悉く擧げて繋ぐ物は何ぞや。皇室中心主義是れ也。今や我帝國を國家的に觀察せん乎、民族の首長は皇室にて在す也。民族的に觀察せん乎、民族の首長は皇室にて在す也。社會的に觀察せん乎、社會の本幹は皇室にて在す也。果して然らば今日に於けるあらゆる主義も主張も渾て是皇室中心主義に包容し、含攝せざるは無しと云ふも誰か敢て失常をとがめんや。更に蹈み込んで論ずれば、我國の舉國一致も只皇室を中心として一致する也。若人よ奮起せよ！現時に於ける社會及び社會思想

を省察せよ。我が社會は世界思想の混沌たるを受けあらゆる新奇思想、危險思想破壊思想さへも醗酵され醗造されつゝあるに際し、尙根本的思想の依然存立を見るは何ぞや。他無し、期せずして皇室中心主義に一致すればなり。見よ彼の維新大改革の容易に封建割據の弊風を打破し、國民的統一の大事業を成就せしめたるは主として皇室中心主義に依るにあらずや。若し我國に皇室なかりせば、今日の支那と大差なからんと信ず。然るに我國は一朝にして三百諸侯が版籍を奉還したるは何ぞや。是れ普天の下王土にあらずなく、率土の濱、王臣にあらずなきの自覺あるが爲めならずや。彼等は決して何人にも奉還せず、只天皇陛下に向つて奉還したる也。斯の如く我國は世界未曾有の社會的大改革を一呼吸の間に成就したり。是れ實に皇室中心主義の自動的働きによるのみ。

要するに世界思潮の混沌たる現代に於て、生活の安定を得ることは是れ偏に皇室の彌榮をさせ給ふ餘光を仰げばなり。故に國民は萬世一系の皇室を中心として國民團結融合して我日本の光輝ある歴史を益々光輝あらしめざるべからざるなり。

勤勞の愛好

四年 杉 光 男

勤勞と言ふ事は人生の最も尊ぶべき責務である、ウィリアム・ペンも言つた「勤勞を愛せよ。これ身體を強壯にし精神を健全にし、そして怠惰を防衛するものなり」と、實に勤勞すると言ふことは一身に取つては安全に生活する道であつて、一國に取つては富強に繁榮して行く道である。日本では「稼ぐに追付く貧乏なし」と言ひ、西洋でも「勤勉は幸福を生むの母なり」と言つて居る。之等は簡單なれど真理である。

人間は勤勞すべき使命を以て生れて居ると言はれて居る勤勞しなければ身體精神共に發達せず、安快な顧客な生活に身を持ちくずして遂に健康を害し、生命を喪ふ事になるのである。富者が金有る故に勤勞を怠り日夜贅澤を盡して健康を害し、一日も氣持良く空腹を得ぬ爲めその富者は決して幸福ではなく、自分もさう考へて「空腹とは羨しき事なり」と叫んだと言ふ事を聞いた。嘘の様であるが眞剣な訴へであらう。勤勞は總ての人に取つて愛好すべきもので

ある。サミュエル・レイニングも又云つた。「勤勉は國民を富ます唯一の資本なり、此の無趣味の説教こそ國家無二の經濟學なれ」と、實に國家の盛衰は國民の勤勞如何にかゝるのである。朝鮮の衰亡も國民が怠惰で勤勞を賤しむ爲である。支那には「雨讀晴耕」の言葉があるのに朝鮮では「雨晴遊」である。この様に國民としても勤勞は愛好せねばならぬ。

近頃労働時間を短縮して勤勞を省き之を以て文明人として居る様に思はれるが洵に馬鹿げた事である。單に八時間労働し、八時間休息し、八時間睡眠すれば三八二十四時間で、丁度都合が良いと言ふ様な事を考へて貴い労働時間を短縮せんとして居る者があると言ふが以ての外である。眞に勤勞愛好の貴いことを知つたならば決して斯の如き事はないのである。

東洋では「小人閑居して不善をなす」と云ひ西洋で「怠け者は七人の惡魔之を誘惑す」と言ふ。勤勞せざれば自然に惡念を生ずるのである。國富めるアメリカに最も殺人者多しと言はれる如きである。故に勤勞は罪惡の消毒劑であり、惡魔に對する避難場である。あらゆる場合を考へて勤

勞愛好は我等の務であり、神の真意でもある。

七四

郷土愛

四年 木藤正典

我が懐しの故郷は昔の姿其儘であつた。

朝露に裾を濡らして黎明の二里先の町に向つた朝、あの大きな太陽が向の山の木の間から朝日を浴せながらにこの微笑む朝、老いた祖父に負はれて田の見廻りをして歩いた晝、わびしく祖父と二人暮した晝。幼い自分が、赤い西の空に漂ふ夕雲を眺めて淋しく町より歸る父母を待つた夕焼も、一人ではしやいだ夕餉の後一家五人夕涼台で星の飛ぶを喜び、夏の夜の光のみの稲妻をこわがった晩も。

あゝ、一家五人ではなかつた、六人だつた。わずか生後一箇年餘にして墓石と化した雪ちゃん、僕の唯一人の妹雪ちゃん居た筈だ。あの時誰が此の様に變り果てた姿で會ふ事を約束したのだ。淋しい思出はまだくく澤山ある。祖父様が死なれた日、今でも覺えて居る、紀元節に町へ來た兵隊が見たいと言つて看病に忙しい祖父に泣き付き、やつ

との事で町へ見に行つた翌日、指折り數へれば丁度十年前の二月十二日。それから隣の無二の親友竹ちゃんが疫痢で死んだ時。お家重代の刀をそつと引出し、振廻して庭の立木征伐をやつた爲、やさしい祖父が唯一度ひどく叱つた時その爲に刀類は一切二階深く藏ひこまれた。今でもその儘になつてゐる筈だ。も一度立木征伐をやつて祖父を怒らして見ようかしら……

……そしてそして……

我に歸れば轟然と地をゆるがす列車。あゝそうであつた僕の知らない昨年の末、家の直ぐ前に鐵道線路が敷設されたのだ。十數年昔を回顧する自分の身は緊縮、減俸、恩給法改正、學制改革、外交、支那、共產黨、露西亞、ブル、プロ等の交錯する現代の世に置きもどされた。が長き餘韻と共に汽車が去れば再び追想の闇がたゞよつて來る。

自分は日に數回となく裏山に登り、我が昔のまゝの自然の運動場を見渡して再び永遠に來らぬ少年の自分の姿を求める。これが故郷に歸つた唯一最大の楽しみであり、目的であつた。その途中、汽車に出會ふのは何よりの殘念である。去年の夏はほしきまゝに出來た追想の世界も今年から

はもう自由にならない。轟々たる爆音は自分の身を狭い現實の世に引きかへす。我が最愛の故郷よ、汝の姿はもう完全には僕の目には現れないのか。

人類が自然を征服するか、又やがては造物主の前にひれふすべきか。それは疑問である、しかしながら今人工が自然を驅逐しつつある事實は否定出來ない。我が最愛の故郷も何時しかは全くその姿を變ずる時が來るかも知れぬ。しかし僕の短い一生の間にはそうなりそうでない。だとすれば何時歸つても故郷は見える、見える筈だが其姿は段々衰へて行く。衰へて行つてもどうでもよい。僕としてはその姿のつかめる間は愛し続けよう。人工が如何に邪魔をしてもよい、唯僕は故郷を愛すればそれで十分だ。

愛さうく唯、唯、愛さん我が故郷よ。

愛するが故郷は再び追想の天國へと。

……そこには眞の愛に打勝つ汽車も何もなかつた。故郷、故郷、唯故郷のみ。

我が懐しの故郷が昔の姿其儘であつた。

新聞と雑誌

四年 綿鍋義夫

今や文運の進歩發展に伴つて、各人の希望趣味に適應した讀物が是非とも必要となつて來た。此の目的に副はんが爲に新聞或は雑誌等が發刊されてゐる。是等は社會一般の事象思想學術言論等あらゆる方面を研究本位に、興味本位に夫々發表し、報道し、普遍的に世人に提供する。思ふに新聞はニュースを生命とする報道機關である。

社會一般の現象思想學術言論の正しき姿を的確に報道するが故に尊い、だから正確敏速の一を缺いでも、もはやその生命を失つてゐるものと言つてよからう。此の正確と敏速とを發揮するところに新聞の意義あり價值があるのである。然しながら新聞は幾多の社會現象を日々報道すべき機關であつて、吾人が自然理法の蘊奥を研究するには餘りに不十分である。此に必然的に雑誌なるものゝ必要を感じる。新聞は吾人に積極的に益する所あるに對して、雑誌は消極的に吾人と社會の融合を計る。雑誌は社會の内容を批判し、學術の研究なり、興味を興ふる教化機關である然し

安閑な享樂を目的とする雑誌は、凡ゆる點に於て吾人青年の敵である。何となれば劣悪なる雑誌の多くは殆ど魅惑的であり、餘りに感傷的であるから。雑誌はどこまでも教化機關である所に尊さがある。

新聞と雑誌

四年 田坂興道

假りに社會を有機體と見做し、交通機關を以てその循環機能に比するを得ば、新聞雑誌は慥かに其の神經系統に相當するものなり。

新聞雑誌は實に人類の共同生活の支配者にして其の進歩に至大の効用を有するは論を俟たず。故に社會の進歩繁榮は即ち新聞雑誌の進歩繁榮なり。若し新聞雑誌にして時代の精神を解し、其の希望に適ふならば、それは必ず時代と共に進歩し、其の社會と共に繁昌せむ。此れ獨り理に於て然るのみならず歐米及び我國に於ける事實に依て是の眞理を證明せざるなし。社會は進歩するも新聞紙は依然時代精神を解せずその希望に適せず、社會は多方面なるも雑誌は依然

單調に、人文開け趣向移るも記者は依然其下の阿蒙たり。是の如くんば新聞雑誌は衰亡せざらむと欲するも得べくむや。故に諸種の新聞雑誌の廢刊は悲しむべきも寧ろこれに依りて現はるゝ社會進歩を慶し、日本文明の前途あるを祝せざるべからず。

然らばそを作り出す記者や如何。

記者は常に社會の耳目なり、木鐸なり、社會一切の批評家なり。所謂社會の良心は彼に依て代表せられ、その制裁は彼に依て行はる。彼は議院以外に於ける行政立法の監視者たり。彼の聲は國民の名に依て傳はり、彼の褒貶は輿論の聲として聞かる。彼の一言一句は口より口に、胸より胸に、陸を超え水を渡り風の如く雨に似て忽ち四方に擴がるなり。善き者は彼の聲を聞いてその孤ならざるを喜び、邪なるものは彼の眼に觸れむことを恐る。彼の是非は法廷以外の宣告、彼の主張は法律以外の法律なり。個人も社會國家も、或意味に於て彼の監視下にあり。嗚呼、誰か記者の職責大ならずと謂ふか。

然も記者の惡徳者と嘲けられ、賤められ、社會に貴げられざるは主として彼の資格に於て缺くる所あればなり。抑も

その才にあらずして位にあるものは亂す。今日の記者斯の如きもの少からず、彼等多くは職を江湖に求めて身を容るゝ處なく、偶々文筆の才を挾んで一時の生を此に寄するのみ。彼等或は無資格を顧みずして社會國家を論じ、時に隨つて僥々の辯を弄びて民心の歸向を過り、或は匿名の下に曲辯舞辭、唾罵の怨をも報じ、毫も中傷譏諷を意とせず社會人の秘密を暴露し、或は書籍の批評をなすや、一讀私情の好惡に任せて褒貶し去る。故に現代彼等の所説は必ずしも輿論に非ず、殆ど私言なり。

新聞雑誌を進歩せしめ改良せしめんと欲せば先づ記者を改造せよ。今日の新聞雑誌、醜猥卑陋、好んで性的方面を暴露し、民心亦これを愛好し、社會人心を墮落に導くもの如何に多きか。新聞雑誌は社會の木鐸なり。彼浮華放縱の説を弄せば社會自ら浮華放縱に流れむ。彼質實剛健の言を尊ばゞ民心日に質實剛健に赴かむ。彼は社會の生殺與奪の權を有す。而して記者はその指揮者なり。社會を改造し、民心を堅固ならしめんとせば新聞雑誌を改良すべし。新聞雑誌を改良せんと欲せばその記者を一新せよ。社會は惡徳記者に制裁を與へ、當局宜しく記者試験を嚴に施行すべし

而して記者たる資格の有無を檢査せよ。社會の公安秩序進歩幸福と密接なる關係を有する新聞雑誌記者の資格を規定するは國民道德涵養の一法として須要なる一大事業ならずや。

東洋と西洋

四年 玉井友世

古來流れ來つた絢爛たる物質文明を其の土臺としヨーロッパ、アメリカ、アジア等々の廣汎にわたつて悉く諸列強國を網羅して、大活動、大發展をなしつゝあるは、これ現下の西洋文明の情勢なのである。

傳統的に淡白な精神文明の基礎として、其の上に濃い物質文明の色彩を帯びた大日本帝國を中心に、精神文明の根源とも云ふべき支那、印度と其の他の諸小國を含有し、大進展へ向はんとするもの、衰亡への道をたどらんとするもの等、種々な傾向を有し、混沌として定まらないのは、これ現今の東洋文明の趨勢なのである。

かくの如き現今の情勢に至るまでには東洋、西洋の文明

勢力の變化、變遷は相當に頻繁に起つたのであつた。

この東西の文明は大河の遠く源を發し、延々として流るゝが如く、一定の時速に従ひながら、或は瀬となり、淵となり、大急流となり、大曲折となり、或は没して行末もわからない暗流となつたこともあつた。

然らば其の文明の變遷の根源は何處より發せられたか。

西洋に於ては五千年前、自然の恩恵に富むナイル河及びチグリス、エウフラテス河の流域にその曙光は發せられたのである。

確固たる物質文明は此處に芽ばえ、發してはエーゲ海文明、ギリシャ文明、ローマ文明を含有する地中海文明となり、遂には現今のヨーロッパの大明明となつたのである。

東洋に於ては如何、一は今を去る四千年前地味豊饒な支那の黄河河畔、一は印度のガンヂス河畔に芽生え出した。

其の文明は東洋諸國にあまねく迅速に擴がつて行つた。それは時の経過するにつれて洗練せられ、改良せられ、遂に日本を中心とする確固たる精神文明を形成するに至つたのである。然し其の文明の進展は決して容易にして坦々たるものではなかつた。西洋文明の根源とならんとしををつた

チグリスエウフラテス河畔のメソポタミア文明は、東洋民族によつて、一朝にして破壊せられてしまつたが其の反動は東西文明の融合となつてこゝに新たな合流文明を見出すに至つた。

其の合流文明は西洋に於ては一部は地中海文明の背景となり、一部は東洋にをける支那文明に取入れられて東洋文明の一部となつた。其の後キリスト教の勃興となつて此處に西洋文明は著しく洗練され、東洋文明はその根元をなせる佛教、儒教にキリスト教的觀念が加へられて現今の東洋の精神文明となつたのである。西洋文明は彼の暗黒時代に於て一時停頓の状態に陥つたが、十五世紀以後その進展がさまじく今日の大明明とはなつたのである。而して此の文明に多大の影響をもたらしたのは、諸國の勢力の消長なのである。古來幾多の國は興亡した。就中西洋諸國は其の興亡の最もはげしかつたと同時に國家組織は次第に改良が加へられて、國家を形成すべき國民も文明と共に向上して強國は強國を生み、遂に今日の列強相並ぶに至つて、その文明も十分な發達を遂げたのである。

然るに東洋諸國は古來強盛を誇つてをつた支那、印度も

全く衰へ、東洋文明も其の根源たる國より、跡を絶ち他の小國は云ふに及ばず西洋列強のためにあやつられて國民は向上心に乏しく、遊惰に流れて古を思はず、獨り我が大日本帝國の列強の間に列せるのみである。惟るに東洋諸民族は西洋諸民族と全く派を異にし、兩民族間の大衝突は免れぬことなのである。

ルーズベルト曰く、「古ローマ帝國の衰亡と共に終りを告げた地中海文明は、轉じて大西洋文明となり、其れは目下其の絶頂にある。是れ亦遠からず資源の枯渴を見るであらう。」と、嗚呼、其れに代るものは何ぞ。其は實に太平洋時代の到來ではなからうか。此處に於て東洋民族の活躍の舞臺はひらけるのだ。世界最優秀の日本民族は東洋諸民族の覺醒を促し、文明上に大いに採長補短して西洋文明を取り入れ全世界に東洋民族の威名を轟かすべきではないか

不平と満足

四年 原 嘉 道

身を修め世に處するに忘れてはならない事は「常に不平

を抱け、而して常に満足せよ」と云ふ事である。一體不平を解剖して見ると二種の意義が含まれてゐる。一つは自己以外の者の行爲存在を自己に照して生ずる不平、一つは自己の行爲存在を自己以外の者に對して生ずる不平。前者は憐むべき小人、利己主義者の心に常に起るべき不平、即ち自分はなぜこの様に出世が遅いのだらうかなぜ金持にならないのだらうかと、自分に接するもの觸れるもの悉くが不平であり煩悶であり、忿怒の種となるべきもの後者は尊ぶべき君子、報恩主義者の心に常に起るべき不平、即ち自分には何故かゝるあさましき惡心が生ずるのだらうか、何故社會に益することが出来ないのだらうかと、良心を激勵し奮闘させるもの、かゝる不平の所有者は接するもの與へられたものは悉く分に過るといふ點に於て満足であり、自己より與へるものは餘少であると云ふ點に於て満足を超越したる不平をいふものである。

要するに前者の惡心の不平を振りすて、後者の良心の不平を採用しこれを實行した時を無上の満足とすべきである。

犠牲的精神

五年 吉田 榮一

世を益し、人を利し、衆の爲めにし、社會の爲めにすると云ふことは、多くの場合、この犠牲的精神を有せずして出來得るものでない。犠牲とは己れ一身を捨て、社會の爲に盡し、世に奉仕すると云ふことである。自己を考へる前に、他を思ひ一般を顧みることである。

服従も一つの犠牲的精神である。慈善も一つの犠牲的精神である。忠義も孝行も一つの犠牲的精神の發露であると云へやう。

犠牲的精神のない者には共同生活の目的は達せられないことは勿論のことである。民族とし、國民とし、社會の一員とし、又家族の一員として、組織的生存の下、共同的利害の下にある以上は、總ての事が悉く己が意に適ひ、己が満足を買ふものばかりとは限らない場合は、往々にして起るものである。この時に當つて他を顧みず、我を通し、自己を主としたならば、共同生活は根本から覆へされて了ふのである。共同の利益のためには自分一個人位位の損害は、

これを甘んじて受けなければならない。

この犠牲的精神は、共同生活に於て最も必要とし、人間として最も美しい徳である。

元來我が日本民族は、我慢強い國民であつた。我慢も犠牲的精神がなくては能くするものでない。殊に我が民族は任侠を大の誇りとした。身を殺して仁をなし、義を見ては勇氣百倍し、水火も辭せず、白刃を物ともしない大勇こそ一にこの犠牲的精神の旺盛に發露したものである。殊に忠孝を人間第一の高い義として、身を忘れ、家を捨て、難に赴く美徳に至つては、實に宇内に冠たるものである。

我等はこの尊い祖先の血を體內に受け繼いでゐる。我等民族の誇は永久にこれを保持し、これを助長し、これを發揚しなくてはならない。然るに近來西洋の個人主義が輸入され、青年はこれを考へ違ひして、犠牲を以て愚直だとして居る。然しこの愚直なりとせられる犠牲的精神があつてこそ、社會の安寧は維持され邦家の基礎は築かれるのである。眼前の我利を貪る個人主義がどうして強い國民を作り、永久の國民性を養ふことにならう。

社會奉仕

五年 山崎 正義

“Service above self” と云ふ語がある。即ち自己を超越した奉仕である。社會奉仕も亦此の覺悟を要する。自己の混入したる社會奉仕は寧ろ有害無益である。吾々は社會の一員である。社會の一員なる以上は吾人は之の恩恵に浴してゐる。而して萬物の靈長たる人間である。故に社會の恩恵に對して之に酬ひ與へられたる恩恵にのみ陶醉すべきではない。之れ社會奉仕の生ずる所以である。

然るに現代の社會には僅かな學問才智を以て利巧ぶる者が多く底力ある腹の据つた人間は少い。かゝる輕佻浮華は大いに戒むべき事柄である。即ち現代の社會に於ては社會奉仕は更に必要である。併し吾人は社會奉仕の遂行を急ぐべきではない。大きく眼を開いて世界を見る時太平洋を隔て、新興國たるアメリカがあり、更に大西洋を隔て、歐洲の老舗たるイギリスがある。米國が莫大な金を有する事は勿論、英國もその保有する金力は頗る大である。然るにその國民は決して金に満足しては居ないで、反つて絶えず同

盟國業に苦しみ、辛穢なる惡思想に襲はれてゐるではないか。之れ世界の強國たる英米も、尙社會の狀態が満足してゐない明な證據なのである。

歐米に於てすら斯くの如くである。故に吾人は社會奉仕を急がず遂行し得るに必要な基礎を築かねばならぬ。然らば基礎とは何であるか。

近時世人の精神は墮落の過程を辿りつゝあるといはれてゐる。果して此の評の如くならば、社會奉仕遂行の基礎は作り得ないであらう。何となれば社會奉仕は健全なる精神を必要とするからである。社會奉仕遂行の基礎は精神である。現代に於ての急務はこの精神を向上させるにある。然らば精神を向上させるものは何であるか、私は大きく叫びたい「信念である」と。

住時の信念は言ふまでもなく武士道であつた。而して信念に依る學問を重んじた。されば明治維新の際に眞の人物は雲の如く出で、寸時にして大業は成就されたのである。信念に依る學問、それは混亂の現代に最も必要なものではあるまいか、國民の精神を向上させるその一歩前に。

吾人は深く信念に對して考慮を置かなければならぬ。

公明正大

五年 那須武雄

信念と精神。國民が此二者相互間の密接不離の關係を探究し得て之を實行するならば、社會奉仕遂行の基礎は既に作成されたのである。

社會奉仕なるものは更に一の人物を必要とする。斷乎として難事に屈せず冷靜水の如く、又一度社會の爲に立つや忽ち社會の惡弊を除き、社會をして泰山の安きに置かしむる人物を望んでゐる。獨逸にビスマルク英國にデズレリー伊太利にムツソリーニ、トルコにケマルパシヤが出でその政治組織を一變したやうに、現代の沈衰せる社會を向上發展の機運に回轉せしめる人物を要する。即ち往時の武士道を國民の唯一信念たらしめんとするのである。

武士道は人間の道に對する信念である。而してその信念は國民の自覺から來るものではあるまいか。國民の自覺に國家愛の伴ふ事は云ふまでもない。要するに社會奉仕は國民の徹底せる國家愛とその自覺とによつて完成されると云ひ得よう。

松陰先生が「士の行は質實欺かざるを以て要となし、巧詐過を文るを以て恥となす。」と士規七則中に教へられてゐるが、誰でもさうなくてはならぬ。質實にして欺かないと、天地に對して恥ぢることがないから、その心に疚ましいことが一つもない。人は、何と云つても心に疚ましいことのないほど快いことはない。天地に恥ぢることがなければ、大手を揮つて大道を闊歩することが出来る。否、大道を闊歩しない迄も、いつも快活になつてゐられる。何も恐れるものはないのである。人生に於て、私はこれ位貴いものはないと思ふ。而して公明正大である人が至つて誇いのは人生の最貴なものを得ることを欲しないのであらうか。是に於て私は、殆ど誰もが所有しない所の最貴なものを得たい。然しこれを得るには金錢を得るよりも多大の努力を要する。その努力に對しては、勇氣が必要である。私は先づこの勇氣を養はう。さて質實にして欺かないとは、口で云ふは易けれ、實際にやつて見るとなかく出来るもの

ではない。況んや巧詐過を文らざるに於てをやである。これは、畢竟するに、勇氣のない爲であらうと思ふ。やはり士規七則中のことだが「士の道は義より大なるはなし。義は勇によりて行はれ勇は義によりて長ず。」とある。これで見ると、この勇氣には義の力が與つてゐることが分る誠に、義は勇を助成するものである。そして質實欺かざるの行は、この人道の首たる義の力によつてこそ生ずるのである。巧詐過を文らざるの根本は、實にこの義にある。そこで松陰先生は、「光明正大皆之より出づ。」と言はれたのである。

水郷の夏

五年 田邊滿希

「ボート」宿命的な汽笛の音が、曉の靜寂を破る。此處難林八道の門戸釜山の港は、靜々とさし上る太陽に、刻一刻と夜のベールを取り除かれて行く。山々島々に深く垂れこめてゐる霧も、次第に四散して、巨大な牧の島や、黒崎赤崎の半島が、鮮に東方に雄姿を現はす。

今や四邊は、全く夜の世界から解放せられて、まぶしい光を、空に、海に、地に放つ。宛も今日の暑さを約束するが如く。蒼々たる天空、紺碧映ゆる大海。見よ其の雄大さ朗さを。汽船、小蒸汽、漁船、帆船、出船、入船の往來で港は俄に活氣付く。はしけを長蛇の如く索引せる小蒸汽、發動船、數千噸の巨艦を、悠々と港内に推し進める汽船、滿帆に風を孕む帆船、等々が、夏こそ吾が天地なれと許り足繁く港内港外を往き來してゐる。

陽今や中空に懸り、赫々として燃ゆるが如き熱光を燦々と地上に投げる陸上のあらゆるものが、炎暑に喘ぐ時、此處水の世界のみには、些の苦痛もなく、唯樂しき活動のみが續けられて行く。繁華なるかな釜山港。聴けエンデンの響きを。見よ諸船の活動振を。

やがて太陽が西に傾くと、港は徐々に鳴をひそめて、休息の時刻が迫る。晝の喧噪さは何時しか消え果て、靜に夕暮が迫る。

晝間の暑さを忘れた港は、今やとつぷりと夜のとばりに掩はれて深い／＼眠に陥つて行く。

犠牲的精神

五年 瀬畑良作

犠牲的精神とは如何。それは、何等の利益、報酬を期待せず、自己の勞力、財産、ひきては、生命をも捧げんとする意氣を云ふ。

凡そ時の今昔を問はず、洋の東西を論ぜず、千載青史にその名を残せし人にして、犠牲的精神に乏しき人無しと云はんも、過言にあらざるなり。大忠臣との譽高き楠公父子義民佐倉宗五郎、或は、黎民の爲め外に在る事十幾年、三度家を過りて入らざりし禹、人道を説きて身は遂に十字架上の露と消えし基督、等はその適例なり。

近時世運衰頹し、浮薄の徒の口に犠牲を唱へ、心に利益を貪るあるは、寒心に堪へざる次第なり。人、個々の生活を營む間は、犠牲の要なきも、共同生活を營む以上犠牲の精神なくんば、何んぞその進歩、發達を期するを得んや。

我々日本國民は、太古より犠牲的精神に富み、之れ又、國民精神の一要素となし、古くは三韓征伐、元寇、近頃は

此現象は共存共榮を理想とする社會には、コレラ以上の大敵である。コレラは近代醫術に依り驅逐せられるが、此惡風は如何ともなし難い。

憂ふ可き此社會に在つて、常に溫い愛と、一道の光明とを授けて、我等の日々の社會生活を愉快ならしむるものは實に社會奉仕ではあるまいか。

元來、社會對個人は密接不離なる關係に在りて、社會を構成する各個人は、相互扶助的立場にある故、各個人が小我自我を省みず、一般大衆のために奉仕する事は望ましく當然なる行爲である許りでなく、他面、社會意識を明確にする所以である。

社會奉仕は現代に於て、最も重要な役割を演ずる。小にしては隣人愛、大にしては人類愛となつて、常に溫い愛のしぶきを擧げて、滔々たる自我主義の奔流する社會の淨化に、懸命となつて、盡力する事を惜しまない。若し、現社會から社會奉仕を除去すればどうか。疑も無く、其處には醜惡極まる個人闘争の巷が現出して、冷かな惡寒のする社會が忽ちに出来るのである。

されば我等は常に、社會奉仕の眞價を念頭に置くは勿論

日清、日露兩役、世界大戰、にその精神を發露せり。

斯くして、吾等は祖先の犠牲により一等國の伍に列したり今や、世界列強國は、軍縮を口實として、陰に軍備の充實に汝々とし、以て他日に備へぬ。而して、その大勢は、極東に向ひて突進し、太平洋の怒濤とシベリヤの寒風と、相激して是に一大風雲を惹起せんとするの勢なり。

吾人、之に鑑みこの難局に處し、祖先に對して、恥ぢざる大なる犠牲的精神を、涵養せざるべからず。

社會奉仕

五年 河野希一

文明の進歩に伴つて、社會關係は次第に複雑化する。そして此現象は過去、現在、未來を通じて、層一層、甚だしくなるものと思はれる。而も個人主義利己主義、排他主義は極度に其鋭鋒を現はし來つて、社會は今や全く、其渦中に投ぜられ百般の惡現象は全く、其處に因を發せるものと觀ても差支ない程である。

であるが、一言斷つて置くべき事は、其に對する觀念である。不幸にして、若しも、其が義務的觀念乃至は他人の強要に依りて、嫌々乍らする所の觀念より發した社會奉仕であるならば、毫毛の價値も無い許りでなく、反つて其眞意義を没却したるものとなるであらう。

社會奉仕には、絶対に義務的觀念や嫌惡的精神を伴はない。寧ろ、其は人間の深奥所に存在する偉大なる眞實性と考へ度い。他から束縛せられる事なく、牽制せられる事の無い溫い愛であらねばならない。

之を要するに、社會奉仕は近代に於ては、既に一つの信念たるを失はないであらう。

水郷の夏

五年 小橋一男

滔々たる水を湛えた阿武の流れが、幾々二十里流れ流れて、日本海に入る所に、ぽつかりと浮いた一片の地、恰も齡少き雄鶴が、羽音高く北方の天地に向つて飛び立たうと

する形をした萩、維新の大業の發祥地として、一時は海内に喧傳され、今は古き歴史に包まれ乍ら、靜かに眠る萩、おゝ此こそ我が懐しのユートピアなのである。

元來萩は水に因縁の深い土地で、發生の時からして、既に水が興つてゐるが、近年は水郷としての萩が、世人に認められたと見えて、阿武川に小鮎が躍り、木々に蟬が喧しく鳴く頃になると、都會の紅塵を厭ひ、水の女神を憶れて殺到する人々の醸す雰圍氣に、歴史の都にも近代的色彩が濃くなり、白砂青松の菊ヶ濱は、赤白青とりんの水泳着モダンなパラソルに彩られる。斯くして或は跳込みクロールに、酷暑も忘れて活動し、或は磯釣に投網打に、親しき友と獲物を競ひ、又或は獨り渚を逍遙しては、朝日夕日に染められた六島の絶勝を賞で、又時には清き阿武の流れの舟遊びに打ち興じ、賑やかな住吉祭や夜店で、夜は火の波人の群で、水郷の夏は忙しくも又楽しく過ぎて行く。

舊師を訪ふ

五年 筒井 深

「エー、相變らずですの。」とこころへトシ／＼と二階から下りて來られるのが先生。「矢つ張り筒井だつた。でも見違へたぞ。兎も角も上つた上つた。」とせきたてられて上りこんで終つた。丁度晝飯時だつたにも拘らず。でも「矢張り」と云ふ言葉が無暗に嬉しかつたんだもの。「何故？」て、先生が僕の聲を忘れずにゐて下さつた事が分つたんだから。

「何だ、そんな事でよく／＼するな。入試第一回失敗位で悲觀しちや男子の面目に係るよ。さういふ僕も餘り強くはないんだが。」然し先生、餘りにまさ／＼と失敗を見せつけられるんですもの。入試は罪な奴ですよ。「うむ、さうかも知れぬ。」屢らく話が途切れた。咲き始めたばかりの庭の櫻が風も無いのに散つて行く。空はどんよりしてゐる。音の無い空氣を、突然鶉の聲が破つた。

「あれはうちのだよ。」「……………」「いつ來てもいい處だらう。」「エー、ほんとに。」何でもいい、何かをちつと考へ込んで見たくなつた僕の心を、先生は見えてとられたかの如くに、きゅつと口を結ばれた。ちつと考へ込んで見たい僕だつたに、さて何を考へていゝのか分らなかつた。

高校入試合格者發表の日、僕は憂鬱だつた。今年はどうせ投げてゐたのだつたけれども、又其の疑に萬一の機嫌を頼みにしてゐた僕の心には、餘りにもはつきりとした此の事實は、少からざる痛手であつた。此の憂鬱な心を癒すべく、僕は宇部へと足を向けたのだつた。しつかりと僕をかき抱いて廻りして下さる人の澤山に居られる宇部へと。S小母さん、友人Yのお母さん、そしてF先生等、懐しの人多き宇部へと。

「御免下さい」と訪れたのが山門に在るF先生の御宅。其の名の通り山のすぐ麓に在る。家は物思ふ詩人の様な落着きがある。實に靜な處だ。其の筈だ。先生は歌人だもの。俳人だもの。始めて先生の御宅を訪れる時、路傍の畠の農夫に家を尋ねたら、「あの木立の中にある風流な家がそれです。」と教へて呉れた。「風流な家。」何かしら心にピンと來た言葉だつた。それをふつと思ひ出して、僕はひとりでに微笑んだ。

「ハイ。」と出て來られたのは先生の奥さん。眞の純日本風の奥ゆかしい人。懐しみを覺ゆる人。「マ、よくいらつしたわね。何日此處へ。」「昨日です。……………」先生は

然し只かうしてゐる此の心境は、誰も味はひ得ない快さであつた。其の僕のうつろな視野の中へ、先生の本箱が入つて來た。万葉集の研究材料や、啄木、藤村、あき子等の詩集歌集が背の黒文字を並べてゐた。「一寸見せて頂きませう。僕は藤村詩集を繙いた。懐しき思ひ出の詩、「椰子の實」眞先に目についたのが此れだつた。僕は飽かず詩集を拾ひ讀みしてゐると、「君、御飯は？」と先生が聲をかけた。」「ハイ、有難う御座います。」「晩までゆつくりして行き給へ。僕も見たいものがあるから。が、先づ御飯としよう。」

晝飯は美味しかつた。ほんとうに美味しかつた。先生御夫婦の愛情が溢れてゐたんだもの。

さうと村雨が降り始めた。一しきり降つては止み、降つては止みした。山は霞んだ。そして一層美しくなつた。傘を持つてはゐなかつたけれども、少しも心配する氣にはなれなかつた。反つて益々心が落ち着き出した位だつた。

「見せたいつてのは此れだがね。」と出された二冊の本一つは宇部同好者の歌集「南蠻車」一つは先生の兄さんの死を書かれた「幻影を追ふ」其の一節。

兄は自分に對していつも元氣だとしか云はなかつた。それ程侯の心持をいつも思つてゐた。一見さういふ風に見えない兄は一層うちに心を粹くところがあつた。目のあたり鼓の兄に對しては、只もう人目も憚らず存分泣いたあゝ、云ひたい事もあつたらうに、聞きたい事もあつたのに。得言はで、聞きも終らで逝つて終つた。幽霊でもいい、話して呉れ。あゝ、今一度目をあけて、只一言でもいい、物言つて呉れと希ふのだつた。

先生達御二人の愛情は縷々として盡きず、綿々として絶えない。僕は泣きたくなつた。たまらなく泣きたくなつた。「先生、お寂しいでせう。僕、ちつとも知りませんでしたので……。」「此の頃はやつと平靜になつて來たがね。一時は全く頭の中が滅茶々々だつたよ。……ハッハハ、いかに温つぽくなつてすまなかつた。萬葉集でも讀んで見給へ。大きい歌があるから。」でも、此の時の先生の笑ひは淋しかつた。

僕は突然尋ねた。「先生。」「何だ。」「先生はほんとにどちちがお好きですか。萬葉集と啄木と。」「どつちもいゝ。寧ろ啄木だらうか。が僕にはそれよりも一茶の俳句

え、いゝんです。道が悪いんですから。」「なーに、構はないよ。」

「おや、もうお歸り、餘り、お早いのねー。ちやお暇があつたら又おいでなさいね。」奥さんの聲を後にして、ぬかるみの道を街の方へと歩き始めた。二人は黙々として、靴で水溜りを踏む音がピチャ／＼としてゐた。その内に岐路に來た。先生はつと足を止められた。

強くなるんだよ。そして何處までも闘ふのだ。運命に負けたら駄目だ。いゝかい、僕みたいに氣が弱くてもいけないし、兄みたいに體が弱くてもいけない。體も心も、どつちも強くなるんだ。……ちや來年の吉左右を待つてゐるから。」之が先生の最後の言葉だつた。先生御自身は涙に生きて居られ乍ら、僕には「強く生きよ。」とおつしやつた。御經驗上、強く生きる方が僕の爲に幸福だと御信じになり、兎角弱くなり勝ちな僕の心を勵して下さつたのだらう。何處までも變らぬ御愛情。僕は涙さへもよほした。「有難う御座いました。では先生も御達者に。」それ以上物が言へなかつた。

空は相變らず曇つてゐた。黄昏の野道には外に人影も見

が一番しつくりしてゐる。」そして別の本箱から一茶、々々、々々、どれも一茶に關したものはかり四五冊出されたのだつた。あゝ、先生は矢張り笑ひの人ではなかつたのだ涙の詩人、寂しさを友とする人、そして人一倍深い人情味の持主だつた。

同じ味の栢榴に這はす風かな。

雀の子そのけ／＼お馬が通る。

角落ちて耻づかしげなり山の鹿。

先生が僕等の前で口にせられたのはこんな句だつた。教室で「一茶が小さかつた時の有名な句を知つてゐる者？」と尋ねられた時、「ハ－イ」と手を舉げて、「俺と來て、……俺と來て遊べや親のない雀。」と僕が答へたら、「うむ／＼さうだ／＼」と涙を浮べて喜ばれた先生だつた。一しきり激しく降り續いてゐた雨が、ほつと一息ついた折角の櫻が大方散り果てた。鶏が濡れた翼を羽ばたいてゐた。

「先生、お蔭で今日は非常に楽しい御座いました。ではこれで失禮します。」「さうか、ちつとあつけないなあ、でも仕方があるまい。ちやそこまで一緒に行かう。」「い

えなかつた。僕はふりかへり／＼歩いて行つた。願ふ毎に先生の淋しい姿がちつとこちらを見詰めて居られた。僕は口の中でもう一度、「先生、左様なら。」とつぶやいた。



卒業生通信



海軍經理學校より

同校 淺原精次

秋！何といふ魅力を學生諸君の間に惹起せしむるシーズンであります。それは運動、勉學には絶好のチャンスであります。諸兄はさぞかし燃ゆるが如き希望の下に、汲々としてその準備に餘念のないことゝ蔭ながら思つてゐます。今回懐しき母校々友會の御求めに依りまして聊か本校の内情を御知らせ致します。

我が帝國海軍の發祥地、東京市築地の一角、隅田川の岸邊に、嚴然と聳ゆる殿堂、これこそ將來帝國海軍を雙肩に擔ひて起たんとする六十名の人々が、日夜その業にいそしんでゐる所であります。海軍經理學校！その生徒は常に聖

訓を奉體し、高潔なる徳性を涵養し、體力を練成し、須要なる學識技能を修得し、さうして將來帝國海軍主計科士官として遺憾なくその責務を遂行し得る所の實力を養ひつゝあります。堅實なる軍人精神と、嚴肅なる軍紀風紀とは實に軍の生命であります故、常に思想を剛健にし、言行を慎しめ、命令は絶対に服従すべく訓練されてゐるのは勿論でありますが、特に本校に於いては、「戦時にありては國防の第一線に、平時にありては公徳の第二線に。」といふことが精神教育のモットーとされてゐます。

小生達が強健なる身體を作る手段として諸種の運動が殆んど強制的に獎勵されてゐます。例へば短艇・水泳・陸上競技・剣道・柔道・野球・庭球・蹴球・角力・射撃等はその主なるものであります。之等諸種の運動は分隊對抗競技として

絶えず行はれます。尚ほ剣道には中山博道、柔道には三船久藏先生等の斯界のオーソリテイが親しく教授されてゐます。それから小生等は將來主計科士官としての基礎を固めつゝあるのであります故、従つてその修得する學術も特殊な専門的なものが課せられてゐます。その中尤も重要視されてゐるのは法律、經濟、語學でありまして、これらには夫々専門の博士大學教授達が親しく教鞭をとつて居られます。決して上算盤や簿記や習字の練習は行つてはゐません。この點は殆どすれば本校の内容を毫も知らない人々によつて可成り誤解されてゐます故特に注意します。決して事務員をつくつてゐるのではなく、士官としての基礎を養成してゐるのであります。故に萬事に於いて嚴重なことは勿論であります。その反面として非常に愉快なことが多々あります。教官と生徒、上級生と下級生との間には實に親子兄弟の情愛が充満してゐます。本校生活中尤も愉快なことは、毎日曜日、祭日、其他公休日の外出であります。スマー１トな軍装に身を包み、腰間の短剣をひらめかしながら大帝都の中心地を堂々と闊歩する時は確かに或る一種のプライドを感じざるには居られません。或はまた時々行はれる

乗艦實習に於ける各地巡航は我々海軍生徒ならではの味ひ得ない所のものであります。その外野外演習、旅行等一々枚舉に追がありません。それに年に五十日の歸省もえもいはれない樂しさがあります。本校の入試には身體、學術の二種ありまして、身體検査は他の兵機、機械と同じであります。がたゞ視力だけは相當輕いものは採用します。學術の方も試験問題、施行場所、方法は兵機と全く同じで、要は膽力にあります。諸兄の奮闘を望んで擲筆致します。

鳥取高農より

同校 岡崎正信

秋益々深く、燈火親しむべき好時節と成りました。そろ／＼猛烈な試験勉強が始まる頃と思ひます。校友會雜誌部の方からの御依頼にあまへ、且亦在校生諸君への日頃の御無沙汰を兼ね、近く御卒業の五年生諸君の入學校御選擇の参考にもと、拙い文章をも願みず大膽にもペンを取つた次第であります。

近く開通豫定の山陰本線を東へ東へと走る事十餘時間に

して、山陰屈指の大都市鳥取に到着します。同驛の東北十八町の處に、巍々としてそびゆる瑠璃色の建物こそ吾等が輝く學園であります。創立日尙淺く本年四月盛大なる創立滿十周年記念祭が舉行されたばかりなるに拘らず、内容外觀共に充實し、他専門學校學生の等しく羨望の的となつて居ます。目下農學科、化學科の二科があり、併せて學生二百餘名居ます。人數の點に於いては他校に劣るかも知れませんが、然し私共は之に依り無上の幸福を受けつゝあり、亦國家社會の爲にも實に貢獻する處大なりと思ひます。何となれば近代社會は教化の不充分な者を澤山社會に送るよりも、教化徹底せる人材を多く送り出す事を要望して居るからです。又是に依り教授と學生との接觸の機會多く、教授は各學生の性質を良く了解し、學生は教授の心理を了解し教授學生間の親密さは恰も親子の間柄の如く、凡ての場合に於て教授を良く利用して居ます。従つて學生は教授の宅を屢々訪問し、講義以外の種々有益なお話を承り、學生も亦自分の意見を述べる等その間に少しのギヤツプも存しませんが。

本校の目的は大學のその如く學問の蘊奥を極むるに非

らず、最高技術の習得にある關係上、實習實驗なるものが課せられます。實習などは初め二三ヶ月は苦痛の様に感受されますが、その後は却つて實習がなければ寂しさを感じる様になります。それは學生が自然の懷から取り入れた力と感激に依つて、身心共により清く強く美しく伸びて行つた一證據ともなる理由です。

入學試験に就いては別に困難な問題は出ず、只平素の勉強で充分間に合ひます。一昨年迄は一人對四人位で割合に容易でしたが、昨年頃から急に受験者が増加し本年などは相當競争も激烈だつた様です。それはおそらく不況時代に於て將來割合に就職の路の開くるを見込み集まつて來たものと見られます。尙述べたき事の半分も述べませんが、紙面の都合上これにて擲筆します。詳細は直接私へ御手紙下さい。出來る丈の努力は惜まざる考へです。

明治専門より

同校 赤 間 傳

我々は山川、松本兩先生の出資により、故山川男を總裁

ります。

とし、的場博士を校長として生れたものです。從て他の學校とは非常に趣を異にして居ます。即ち德育を重んずる事基礎學科に力を入れる事、軍事教育を重んずる事でありま

す。學校でのみでなく、歸つてからも先生により又お互に人格の向上を計るべく、殆ど全部の教職員役宅と、又殆ど全部の學生を收容する寮とがあります。従つて學校の敷地の廣い事は他に比を見ない所です。創立者の考へは専門學校で入學の過程をやる事にありました。從て修了年限は特に四年で、一年生の時は科別なく全部が同じ基礎學科のみ習つてゐます。上級に進んでも實地よりも理論に多く傾いて居ます。之等の目的は將來より深き研究に進まんが爲です。又本校の教練は廿數年前設立された當時よりあるもので、山川博士の洞察力の素晴しさが分ります。そして其の成績は全國高専中隨一とされてゐます。我々は御存じの如く非常に有利な地點にあります。北九州の工業地帯の真中にありますので、毎土曜日の午後は工場見學に出かけます。之等は他校には出來ない事です。

我々は以上の如き特徴がありますので、廣く社會より認められ、就職状態も善く、又先輩も有力な人が多いのであ

五高より

同校 田 原 義 雄

中秋の冷い風が訪れる頃となりましたが、其後諸兄には御變りはございませんか。

熊本と云へば誰でも森の都を思ひ出す様に實に自然美に恵れた美しい都です。上熊本驛から十分間ばかりバスに身をゆだねてゐるとやがて車は五高前と云ふところで停車するでせう。そこには莊嚴な赤煉瓦の本館が松林の間に隠見してゐるのを見るでせう。これが僕等の學園なんです。

我等龍南兒は剛毅朴訥をモットーとしてゐるのですがこれはやがて五高魂となつて現れるのです。只今では熊本在住の萩中卒業生は極めて少く本校には僕一人きりです。實に寂しい感じがいたします。本年は一人も熊本に参らなかつたので新人生歓迎會もしない位でした。只諸兄に一日も早く會へる日を待つてゐます。

試験のことですが、先づ受験生は九州方面が大部分で福岡、熊本、長崎と云つた方面が多い様です。山口縣からも周防の方からは可成來てゐると思ひます。どうか來年は諸兄よ大學して來て下さい。

課目に付いては英語は意味の解る直譯が一番いいのです。文章を文法的に考へることが大切です。國漢はあまり六ヶ敷い問題はない様です。いづれも名譯は禁物ですから忠實に譯して下さい。特に漢文は全文の意味を考へて易いと

思ふ字を等閑に附さない様にして下さい。作文は平凡なもの

は書かない様にして下さい。平凡な作文には平凡な點數しかくれませんか。少しでも創作的な新し味のあるものを作つて下さい。數學はしつかり頑張つて下さい。特に文科に志望の方はこれが合格不合格の分岐點ですから。文科に志す人等は、大抵數學の不得意の人が多いのですから若し諸兄が數學が出来るなら屹度パスします。一般に五高の受験生には浪人が多いのですから國漢はどうてい諸君はかなはないと思ひますから數學でうんと頑張つて下さい。暗記物は教科書にあることを充分に覚えてゐれば充分です。決して教科書以外のことは出さないと或る地歴の先生が言つてゐました。物理化學は推理といふことが大切なことで物化主任の教授がいつか推理が尤であれば結論は間違つてゐても充分な點數を與へると云つてゐました。入學試験に關しては五高の教授は感想批評を利用雜誌に載せてゐない様ですから、試験に關しては解らぬところは僕に尋ねて下さい。

とにかく森の都熊本の地を幻の中に描いて來年は大學して來て下さい。レモン花咲く南國は若き血潮に燃ゆる萩中

健兒の學園なんです。

先日九大でラクビーの試合で負傷してまだ床についてゐますから充分なことは書けませんが詳しいことは學校宛に僕に尋ねて下さい。さらば萩中學校諸兄。

長崎高商より

同校 村田 秀 夫

清秋の候、五年、四年の諸兄は受験期を控へ益々御奮闘の事と察します。本校はエキゾチックな楠葉香る鶴の港西陵ヶ岡に在つて、本科、海外貿易科、貿易別科、特設豫科（支那人の爲）に分たれ、同種學校中最も古く、在校生、卒業生數、設備等に於て斷然他校を壓して居ます。八百の生徒は先輩より傳へられた長崎高商スピリットを受繼ぎ眞面目に學生生活を送つて居ます。多數支那留學生の日支紛争をよそに愉快に學業に従事して居る様は他に見られない状況です。武藤、淺野教授等の博識が學ばれて愉快です。學費は月三十圓位で足りません。次に入學試験科目は英、數、國漢で數學は毎年指數、對數、方程式は一題宛出て居ます。

想思樹の蔭から

臺北高商 三 島 將

形容詞も裝飾語も省いて本校の入試に關する要點のみを極めてビジネスライクに書上げませう。商業出身者の事は蛇足でせうから省略しますが、先づ課目から當つて見ませう。

課目は例年國漢、作文、英和、和英、代數、幾何で内地の専門學校と變りはありません。

が此處に注意を要する事は各學校には各異つた創立精神がある如く自ら各學校の課目中でも重點の置所が相異してゐる事であります。

本校に就いて言へばそれが先づ英語でせう。

英語を厳密に採点して七〇點から八〇點邊りの實力があれば先づ成功候補に入る事が出来ます。教科書及び國文、漢文の解釋を読んで置けば國漢幾何は恐るゝに足りませんが作文、代數は少し注意を要します。之も重點に入れる程でもありません……と言つてもどうでもいいと言ふのはありません。入學試験ですもの宜しく御賢察下さい。さて重點は英語だと決めましたがそんならどんな風に勉強したらいいでせう。

之に就いては毎年の問題集で相當御研究のあつた事でせうが餘り捻つた問題は出ません。

時節柄、合理化と失業問題、殖民地の記事は動かない所。打明けた事を言へば本校にはあの薄氣味の悪い試験問題を製造する教授が三人居ます。毎年交替で作られる理ですが、各教授の特徴が自ら問題に濃厚に現れる事は當然の事でありますが、本年の事は一月頃にならねばこの邊りの具體的な消息は御傳へ出来ません。

若し受験せられる方があれば御通信下さい。大いに先輩顔をして御世話致します。本年入學せられた四君の如くコ

熱もて熱を制す

南支南洋我市場

(一九三二・二〇・九、内臺郵便飛行に託す)

神戸高工より

同校 中尾 喜彦

懐しの母校を去り滿二ヶ年半になります。唯今在校當時の事どもを追憶して何か知ら胸に迫るものがあるようです。我が神工は建築土木電気機械の四科に分れ、總人員四百五十數人居り、教授以外に三菱等の大工場より技師が來り實際教育を施してゐます。學校の空氣は斷然眞面目に走り、校則の嚴重な事高等專門學校とは思はれないくらゐです。入學當初に際して禁酒禁煙を誓はせます。校内では絶對的に喫煙は出来ません。實際私共は皆子供の様に型にはまつた教育を受けてゐます。いさゝか不自由な感がありますが青年時代の訓練には、適してゐるのではないかと思はれます。授業時間は七十分五時間あります。毎朝十分間體操と稱して全員運動場に集合、朗かにラヂオ體操が勵行され

ツツリ臺灣に來られたのでは御世話の仕様がなく、入試の當日初めて會つた様な始末で甚だ面目なかつた次第です。是非御一報を。創立十一周年の我校には萩中出身者は數へる程しかありません。そのトップを切つた者は私の兄で三島文平(本校七回卒)金子梅春(八回卒)篠原正太郎(十回卒)の三氏で次が私でありますが後續者のないのを悲觀してゐました所。新進の有馬、高橋、長谷、古谷の四君を迎へ斷然本校生徒間に異彩を放つ事になり安心して私も卒業出来ます。

不景氣が内地より一年遅れた様に就職難も内地程激烈ではありません。卒業して一年後に未だ遊んでゐると云ふ様な者は皆無と言つて宜しいがそんな事象を捉へて皆様に臺灣へ發展なさいとは言ひません。そんな氣持で來られると氣候的、地理的、家庭的事情に煩悶しなければならぬ時期が來ます。日本の經濟的推移、殖民地の意義を理解した家庭の事情の許す人は双手を擧げて歓迎します。

南國には南國の生活があります。スポーツの出来る明朗活達の士の大いに驕足を伸ばされん事を希望致します。最後に我校のモットーを掲げこの稿を終ります。

てゐます。就職率は割合によく各科通じて殆んど就職してゐます。來年の入學試験は後班で科目は多分數、英、物、化で建築科は化學の代りに書法が有ります。入學を左右するものは何と云つても數學です。出題傾向は代、幾、三、立各一問其他代數物理の混合三角、代數混合問題です。代數物理混合問題は物理の公式を與へて題意の數値を代入するもので可なり複雑な計算問題です。當局はこれで受験生の計算力を試すのです。實際入學しても計算力にとぼしいと困る事が多々有ります。立體三角は可なり程度の高いのが提出されるようです。中學校の教科書にある問題が縱横無盡に記憶する程度に解決される様にして置くのが大切でせう。幾何は軌跡が多い様です。參考書は吉岡斗松を一問餘さず獨力で解決した積りです。次は英語は至極容易です容易ですから用心するを要します。單語をしつかりやつて居れば安心でせう。單語でも現代科學用語でウィクリーを勉強して下さい。參考書は小野氏を暗記する程度にやりました。物理は電氣力學各一問其他普光に關する問題が提出されます。ですから電氣と力學は力を入れて下さい。化學は容易で主として理論方面即ち定律に關する計算問題です。中

和もよく出ます。又我が科長は單位をやかましく云つて居られます。單位が異ふと答が合つても零點にするさうです。馬力の單位でもG.S.制で疋、米ではなく疋米毎秒です。兎に角、點をより多く獲得した者が勝利です。他に何物の力も有りません。身體検査はかなり嚴重ですが心配する必要は有りません。併し製圖宿題レポートで我々は可なり肉體上のショックを受け入學後病氣で休學の止むなきに到つた人が可なり有ります。實際中學時代以上の Over load です。兎に角努力奮闘一意専心勉強に熱中して下さい。かくすれば来るべき試験場裡に於て必ず榮冠を獲得出来るでせう。何うか左學生諸君銳氣奮刺たる元氣と熱を持つて帝國の大工業地神戸に屹立せる我が神工に於てあつばれ都會への一戦を交へられん事を希望して止みません。唯今神工在學生は大部分都會人に占領されてゐます。萩中卒業生は私と大和君のみ。而して山口縣人が唯の八人とは實際もの淋しく感ぜられます。何んぞ恐るゝに足らん神工の牙城。

東京高等師範學校より

同校 來島 秀男

い嚴格な感を與へるがさにあらず、その想像以外なるのに驚く。

本校の特長は授業料不要、小額の學費、就職運動無要だ。卒業生の就職状態は百パーセント。現今の教育界、思想界は實に渾沌として居り、他方には何もかも困難だ。これを打開するは我々と共に、第二の國民に待つより他なし。その國民を教育し、有用の人物たらしめるのが我々の義務だ！我々の生活は重大だ、そこに又希望、新生命が生ずる。松陰先生の士規七則の精神によつて常に薰陶されて居る諸君、國家社會の爲めに教育界に志す者は此際奮然と起ち給へ。人生をして有意義たらしめる道は何か、自己の個性、又周囲の事情をよく考察し、冷靜にかへつて前途を誤らしむる事なかれ。

ページ數に制限がありますので以上で擧筆致しますが學校問題、受験等につき御不明の點があれば左記の所に御一報下されば喜んで御報せ、又御世話致します。

× × ×

大塚豪上に登ゆる學府、教育界の重鎮を以て自他共に許す東京高師！私はその御紹介旁々私見の一斑を述べます。御承知の如く、第二の國民養成を目的とする高師、文理大の無謀なる兩校廢止文部省原案は教育界に多大の波紋を起しました、が輿論の前には適せず、現今では反つて從來の我々の主張したる内容改善の機運の促進をうながすが如き状態になつて來ました。此の問題は受験期を目前に日夜勉學に御精進だつたらう諸君を迷はしめた事と存じます。文理大と高師との關係について、よく質問を受けますが、一口に云へば、高師の卒業者の有志者が大學に入學するので高師は從來の通りです。（高師三年課程終了者に入學資格を與へる事も内容改善中の一事です。）入學試験は中學校の各科目が相當に理解され、特に自分が専門に學ばんとする科目（例へば理科二部は數學）に充分自信がなければ駄目です。内閣する所によれば、平均點は殆ど同點になつて居ます。その場合には専門科目に長じた者が合格するわけですから。次には唯度胸の問題です。入學後は二年間（二年生は自由）は寄宿舎生活をなし、團體的觀念、人格の陶冶に努める。その反面は實に愉快だ。高師と云へば何だか重々しい

山口高校より

同校 井上弘幸
岩田忠夫

愛する母校の後輩に一筆書けとの命であるが、生來作文が苦手の上に紙面が非常に限られてあるので、纏つた事がやれるか叶ふか簡単に簡條書程度に書いて見よう。

『校内事情』 哲學・宗教・科學・文學・スポーツの一大殿堂たる本校は、鴻南の一角、全く俗塵を避けた閑靜な地にある。或者は高校生は呑んで、食つて、ストームをやつて暮して居ると考へて居るらしいが、これは一昔の事で今では大學入學でう難關が控へて御座るので、勉學の空氣が一般に濃厚になりつゝある。

吾々萩中卒業生は新入員歡迎會と三年生送別會との一年二回の會合を有し、其夜は一堂に會し、懷舊談に耽り母校の歌を唄つて互に親和に努め、昔を忘れぬ様にする。

『入學試験雜感』【國語】これは有名はモダン爺、満井教授の健全なる間は、世の平凡者流の問題とは譯が違ひ、正に時代の尖端を走る。昔流に字句の解釋のみに致々としてゐても結局駄目。國文學に對して高尚なる鑑賞力を養ふ事

が必要らしい。和歌・俳句・謡曲の又大先生だから此の方面も低氣壓がある。

【漢文】先生は年寄にて視力弱く、御自身いとも綺麗な字を書かれるので、答案は綺麗に判然と濃く書く事必要也。

【數學】數學の田淵教授か、田淵の數學か、事程左様に餘りにも有名である。彼氏は彼氏の著作による數學參考書を基礎に出すとの噂がある故、これにもちよつと當りをつけなければならぬ。而し彼氏を除いた他の教授達が主體になつて問題を出せば、皆大學出のホヤ／＼丈、今年の如く容易だらう。

【英語】これも無理のない、進歩した、明るい問題だ。學生の口に膾炙してゐる所謂入試的な文は一間も出さうもない。英作も實用文だ。附焼刃でなく實力をミツチリつけて置く事。又一人非常に字を見る教授が居られる。

今年理科は多分【博物】かと思ふので少し博物についても附け加へる。先生は學究肌の大學者であつて、これ丈には絶對に『やま』をかけない様事大小となく何處も充分に研究される事。吾々もこれで枕を並べて討死をした苦い經驗を良く味はされたものだ。

以下不備ながら士官學校生活を紹介する事とする。

豫科二ヶ年は總ての意味に於て準備の期間である。先づ彼等は此處で、徹底的に軍人精神なるものを叩きこまれるのだ。肉體的には、將來の大飛躍を可能ならしめる體力をそしてまた普通學をみつちりと詰めこむのである。

隊付半年の生活。それは士官候補生として實務を體驗すべき期間である。しかも、將校團の後繼者として最も大切にされ、最も愉快な期間である。隊付が終れば本科に派遣される。此の時は既に軍曹であるのだ。

本科一年十ヶ月こそは士官候補生としての實際の研鑽の活躍臺なのである。帝國將校として恥かしからぬ能力はこの時に獲らるべきものである。

やがて冬去り春去り、七月の太陽が地上に猛威をたくましくする頃、三軍を叱咤すべき大將軍の卵は、彼等の前途に幾多の抱負と幾多の春秋を有して門出するのだ。以上が四ヶ年の生活の梗概。

學校の起居は如何。それは全く軍隊と變らない。號音で起きて號音で寝る。不精者には相當つらい。しかし習慣は大したものである。余等の如き者でも今では左程に感じな

『後輩諸君への氣付』巴城の地靜かに學究の道に精進されつゝある諸君、諸君の環境は餘りにも平和ではないだらうか。常に新しい學問上の刺激を求めて心の弛緩を緊張せしめよ。餘りに學校及先生に頼り過ぎてはならない。成績の良いのに満足してはならない。最後に祈御健康。

市ヶ谷臺より

陸軍士官校 村木八郎

武寮の生活は即意氣であり、熱である。

千餘の健兒が日夜修練して止まざる所、市ヶ谷臺上には六十年の歴史が燦然と光輝を放つてゐるのだ。

彼等は先輩の偉勳に刺激され啓發される。しかしながら彼等の達せんと欲するところは、先輩の人格にあるのだ。先輩の遺志を繼承して、益々光彩陸離たるものあらしめんと努むるにあるのだ。

彼等の腦裡には至誠報國の志操が脈絡一貫、嚴として存續してゐる。市ヶ谷臺上の傳統精神は即ちこれだ。

臺上四ヶ年の生活には、もとより特記すべき事も多い。

い。要は意志の問題である。

最後に當校を志望される諸君の爲に一言する。それは入學試験である。頭の良否は問題でない、頑健なる身體と倦まざる努力とがすべてを解決してくれるだらう。

現在當校には本科五名豫科二名の母校卒業者が居る。豫科弱勢は近來の不振を意味する、奮て臺上に馳せ参ぜられんことを切に望む次第である。終りに諸兄の健康を祈りつゝ筆を措く。

鯉城より

廣島高校

光田幸夫
大庭義人
芳野滋

肥馬高天の候に當り諸子益々御健闘の程を御悦び申し上げます。

こゝに懐しい母校校友會雜誌に愚生等の愚感を載せることを絶大の悦びとし、いさゝかなりとも諸子の御參考となれば至幸に存じます。

我等が三年間の身を宿す廣島は外には風光明媚、世界に

その名を知られてゐる瀬戸内海を控へ、内には太田川を初め八本の支流を有し、三條のデルタの上に位置を誇る水の都であり、近くには日本三景の一たる宮島を有し、全く東洋のヴェニスであります。殊に物價の低廉は我々學徒にとつて大福音であります。

この景勝の地、經濟的優越の地、鯉城の西南に位する學の園、廣島高校は創立以來幾多の年月を重ねずと雖も、その新進の意氣物凄く傳統に夢みる他校を凌いで居ります。今日社會の一大問題たる思想に於ても我校は堅實なる思想の涵養に従事して、確乎たる人格の團結は如何なる凶惡なる思想をも突破して居るのであります。今日に到るまで一度も學園の騒動なき事實は、雄辯にこれを物語つて居ます。人は之を意氣地なきためといふかも知れません。しかし騒動を起すのが眞の意氣ある學徒の態度でせうか。又大學入學試験に於ても日頃の研磨の効は直に影響し、他校を凌いで居ます。

我校は外にはかくの如き美點を有し、内には師弟の關係頗る緊密を加へ、意氣投合して研究に修養に専念してゐます。又新設校であるだけその設備の點は完全であり、殊に

黨風寮の如きに於ては完備せる設備と統制ある團結により圓滿なる一大家族をなし、日々向上發展してゐます。入學試験も昨年迄は語記物がありませんでしたが今年はありました。來年はどうなるか分りませんがその固定的なもののみについて述べませう。

英語は易い。しかしそれだけその譯法の巧妙さを要します。又ごまかし譯は絶対排斥です。字は丁寧に書き、略字を書かぬ様に。和文英譯は殊に大切で、英語の點の分岐點です。數學は易い。それだけ注意が肝要です。國漢は丁寧、字を略字、當字で間に合はさぬこと、殊に作文は必要です。書取もこれで取られます。要するに細心の注意と根柢的な實力をもつて居ればパスします。來年度の聖戦を目ざす四、五年諸君、眠つて居ては駄目です。傳統の地巴城の一角で世間を知らず、井の中の蛙を眞似ては駄目です。今後の頑張り様が泣くか、笑ふかの分岐點、メインポイントです。尚ほ本校を受けられる方があれば何時でも問合せになつたら助力します。

× × ×

横濱高工より

同校 藤原 悠

四月七日機械工學科教員養成所の百拾番の番號を受取りました。締切は十日で、採用人數は六人（後に七人になりましたが）、受験日は二十六日でした。

この學校の受験日決定は、十番迄は第一日目、二十番迄は第二日目と十番づゝ分けて行くのです。これは受験者にも都合であり、學校當局にも都合の事と思ひます。間は飛びまして、直ちに試験當日の學校から書き始めます。私は少し早目に受験者控所に行きましたが、驚いた事には既に殆んど集つてゐた事です。

言ひ忘れましたが、本校は定められた一日を出席したら宜しいのです。

借検査は一日中に口答試験と體格検査がありますから、志願者は午前中に體格検査を遂行せられる部分と、午前中に口答試験が行はれる部分と二つに別れます。而して私は體格検査が午前中の方でした。

本校は體格検査が及第落第の主たるものと聞いてゐ

ましたから、不安中に指揮者に引率せられて體格検査場に入りました。

さあ！入りました。入口には學生が二名椅子に腰かけて寫眞と本人とを見比べます。

さうして指示に従ひ、偶數は右、奇數は左と別れて行きます。私は偶數でしたから右に行きました。

検査場は一から十までの検査所があり、一は色盲、二は視力、三は握力調査と簡単に次から次へと進みます。

最後の十番の硝子戸の締めて在つた所は、濃顔のお醫者様が内臓を聴診器で押へてみただけでした。これで終りでこの間一時間位でした。人を待たなかつたら十五分位で全部終るでせう。

それから體格検査場を出て、口答試験の集合、午後一時まで遊びました。

この間に偶然同級の人に會ひました。異郷で同中學の人と會ふのは非常に嬉しいもので、心強いもので、東に金棒の氣持が致します。無試験と言へども幾分の不安はありますから、快談して鬱氣を拂ひ除くのです。

あゝ！ 午後の口答試験が始まりました。第一試問室に

「藤原君御入りなさい。」の聲と供に、私は此處ぞ暗の舞臺と許り、試験特有の胸の高鳴をおさへて、ドアを靜かに開けて入ります、と二人の試験官が同時に首を擡げて「掛け給へ。」と云ひました。

こゝぞ氣の落付け所ともう一度禮をして、（なんとなく禮が爲たくなるものです。）ぐうつと腰を下しました。すると「君は數學が得意だそうだが之はどうかね」と西洋紙に大きな字で、 $\cos 30^\circ$ と $\sin 30^\circ$ とは何れが大きいかと問ひました。何條堪らぬ、何も得意の學科は無いのです。はたと當惑致しましたが、ぐつと唾液を呑込み、そこにあつた紙に圖を小さく書いて見ましたら、 $\cos 30^\circ$ が大きいやうでしたから、 $\cos 30^\circ$ が大きいと云ひますと、「よし」之れはどうかと言ひましたが、解らなかつたから問題は覺えて居ませんが、 $\cos$ と $\sin$ の何れが大きいかの問題でした。弓矢八幡宮にも祈らなかつたのですが、少し瞑想して、前の反對に $\sin$ が大きいと云ひますと、「もうよろしいです」と言ひましたので、ほつと一息して、第一試問室を出ましたが、正解やら不正解やら見當が付きません。

第二試問室に入りました。英語です。苦手の英語です。

但し以上は機械工學科の口答試問でありまして、應用化學科は物理の代りに、中和とか、加水分解とか、カーボンの製法の如き化學が問はれたらうございます。

次に私の知つてゐる本校の特色を示し、諸兄の御志願を希望致します。

又本校につきまして御疑念、未知の點がありますなら、喜んで私の最善を盡して御報せ致します。

特色

先づ本校は自由啓蒙主義を根本主旨とし、無處罰、無探點制度を取つてゐますから、落第等はなく、三年を経過すれば、誰も彼も押し出されて社會の一人となります。

而して本校創立以來十數年間此制度に依つて、一度の紛争無理が起らなかつたそうです。その主旨の發露としてか……諸兄が御受験になれば明かに解りませうが、學校の看板の門に扉がなく、受付が有りません。之は看板の自由主義のシンボルで内部に増々多くの主旨が表れてゐます。

圖書館が自由制度で、學生自身が圖書館に入り、自身で本を引出し、讀み持出出来るやうになつて居り、又校長自らが本校の生徒主事の不必要な事（學生監視の職です）を叫

前と同様一禮して入りました。

一枚の西洋紙に二問題英文が書いてありました。その西洋紙を取つて「之を讀んで譯して見給へ。」とおつしやいましたので、容易さうな上の方を爲しました。單語は中學三年生程度でしたが、譯が中程に來て停止して一向進みませんが、氣がそわ／＼して許しませんでした。誤魔化しを怒鳴りますと、一つで「宜しいです」との御聲掛でした。物足らぬ、情無い氣が致しました。

次に第三の試問室に入りました。物理です。こゝでは物理の外に本校志願の理由をお問ひになりました。

物理はこの電燈は五十Wだが百Wにしたらどうか、一馬力はいくらか、遠心力とはどんな事かの三つでした。

以上で私の受けました口答試問の問ひの全部も記載しました。中には大變突込んで問はれた人も有るらうございます。

後に友達より聞いて見ますと、數學は三角が多く、次いで代數幾何ださうで、代數は級數と $\log$ が多いやうです。

英語は西洋紙に書かれた英文を譯したり、和文英譯を口で答へたりしたさうで、物理には電氣が最も多いやうです。

ぶ等でございます。且又本校教育の主旨は、各自の長所を伸ばし、國家社會の爲に有爲の人物を作るにありと思ひます。

以上の制度主旨に共鳴してか、無試験制度がお氣に入りましたか、本校志願者は全國高工志願者數の超最高數を占め、第二位の廣島高工志願者數一四四五人を超過する實に六百餘人です。

諸兄の中にも必ずこの主旨制度に御共鳴下さる人があると思ひます。

多少距離は遠いですが、來春は必ず志願なされ、櫻花咲き、金波銀波の波打つ横濱にて供に凱歌を高らかに歌はうではありませんか。

終に臨み、諸兄の御健康と御奮闘を切望いたします。

次に募集狀態及び志願者數を記載致します。

部	科	年	代	第	一	期	第	二	期	計
募集人員	40	6	40	6	40	2	25	35	6	180
志願者	476	169	345	141	383	36	223	245	58	1,648
比	率	11.9232	8.7235	8.8150	9.1	7.0	9.7	9.2202		



九州旅行記

四年 田坂興道

七月廿三日 木曜 曇

此の日我等四年生有志三十三名より成る修學旅行團は、下間・山本兩先生に引率され、玉江驛にて校長先生の御見送りを導うし、一番汽車に乗り込んで愈々九州路の旅に上つた。

車の進むにつれ、景移り客變り、まだ見ぬ國への憧れは胸に燃えて車の進みを遅く感じた。とかくして十一時八分下關着、同廿分門司に向ふ。流石日本の關門の名に恥ぢず汽艇、漁船、運搬船等の縦横に馳驅する中に、斷然浮城の觀を呈したる大汽船が巨大な體軀を幾つも横たへてゐる。卅五分門司着、直ちに十一時四十分發の鹿兒島行汽車に乗つた。

日本工業界の心臓、斯く言へば一言に盡きる北九州の大

工業地帯、それは餘りにも將來の工業立國を語るに相應しい誇を示してゐる。渡峽中、淺野洋灰工場の偉大さに驚いた。我等は大里・小倉・戸畑・八幡と堆高い石炭の山積と、指を屈する道もない大小煙突の文字通り林立して居る中を進んでいよ／＼大工業地に驚かされた。

あの世界的製鐵所は戸畑から始つてゐる。黒煙空を蔽ひ天日爲に暗しといふやうな有様。立ち並ぶ巨大な煙突から吐き出す黒煙や、灼熱せる大溶鋼爐をまのあたり見。而して場内に敷設された鐵道が百幾哩もあると聞いては、實に驚くの外はない。言ふ迄もなく工業は勞力・動力・交通に支配されるもの。而して此の一帶は勞力たる人口は稠密で動力は直背なる築豊炭田より無限に供給され、更に販路として滿蒙・南支等の大陸を控へ交通至便なるに依て斯くは

日本の心臓とも重んぜられ、大規模な防空演習の行はるゝ程國防上重要な地點となつたのであらう。

さて、科學工業の威力に驚きつゝ八幡も過ぐれば、右手に洞海を見、遠くこの灣頭を扼する若松市を望み、やがて若松・築豊兩線の分岐點たる折尾を通過、福岡驛にて施運開福の宮地獄明神を祈り、香椎にては車中より仄見ゆる疎林の中に、神后・仲哀二神を奉祀せる香椎宮を伏し拜み、在りし帝の御績を偲びつゝ西に進めば右手の松原には九州大學所屬工・農・法文の三學部の建物あり、程もなく一時卅五分箱崎驛に到着した。

人員點呼の後箱崎宮に詣づ。白砂青松の中に規模宏壯、殿宇莊麗な御社を仰ぎ、坐ろに森嚴な氣に包まれ恭しく賽し終つた。社は官幣大社にして應神天皇・神功皇后・玉依姫命三柱の神を奉祀し、三大八幡宮の一として又武神として古來上下の尊崇は非常に厚い。社前の神木「標の松」は神功皇后の帝と共に新羅を征し給ふや、不幸帝の崩御に遭ひ給ふた時、恰も胎内に應神帝の姪ませ給ふたが宇美にて御出産、その御胞衣を此處に埋め給ひ標として松を植えられたもの後朽ちて再植ゑたのが現今のものだと言はれる。本

殿・樓門は共に特別保護建造物で、前者は大内義隆、後者は小早川隆景が征韓祈願の爲建立したもので釘一本用ひてないと言はれ、門頭高く掲げられたる敵國降伏の額は長くも醍醐帝の宸筆の寫したと聞く。仰げば伏敵門頭彌高く、妖氣を手歳終息せしめ、國敵來らば殲滅せしめんとする觀がある。刀伊の入寇、忽必烈の蠻勇、清露の橫暴等古來國難は此の方向に起り、皆我が正義の刃に服し我が國光は益々光輝を發した。將來も此の神の在します限り我が神國をどうして異國の爪牙に委し給はう。感慨無量、現今の平和を謳歌した。社苑に群れ遊ぶ鳩の可愛さよ。やがて去つて九大醫學部の建物を見學し、東公園に赴く。あたりは千代の松原。松の梢を渡る風音にも昔日の懷古に耽る。元寇記念館前を過り、日蓮上人像を拜す。嘗て法華の奥義を説き立正安國策を建て、三度北條執權に諫國の建白をなし、四度法難死生の危機に遭遇し自若として動ぜなかつた偉丈夫威ありて猛からず炯々たる眼光の裡猶溫容玉の如き潤ある慈愛の輝を見せてゐる。法華信者の熱烈に御題目を唱へるのは尊敬に値する。巡りて龜山上皇像に謁す。身を以て國難に代らんと祈らせ給ふた愛國の敬慮こそ感激の極みであ

る。此處を出て福博電車を驅つて荒津山頭西公園に向ふ。途中黒田五十二万石の福岡城趾を過ぎた。昔日の面影を纔かに苔蒸す石垣に止め、濠には蓮の清らかに育ち、舊城域には歩兵十二旅團司令部、同廿四聯隊の營舎が見える。並木路を通り石階を登つて黒田如水・長政を祀る光雲神社に詣で、松林を抜けて濶を臨む一角に立つた。

若杉寶満の諸山は遙か雲際に聳え、脚下に遠く擴がるものは大福岡市、白砂長く松青きは千代松原、直下に見ゆるは國際飛行場である。轉じて東北を望めば海の中道を隔てゝ玄海は天に連り、志賀島殘島は七百年の昔の歴史を語りつゝ、筑紫富士は玄洋の波に煙つて宛かも南畫の態を見せる。景物壯大、天空海濶の胸を養ひ得て餘りがある。下山の途植物園あり、珍しい名の樹木が多くあつた。彼の愛國十年東走西馳尊皇討幕の大義を唱へ、生野の一舉事志と合はず遂に殉國の鬼と化した贈正四位平野國臣の銅像は山下の丘上に儼然と立つてゐる。歸路、百貨店玉屋を約四十分見學し、エレベーターにも初めて乗つた。

博多驛近くの宿所高島屋に着いたのが五時過。夕景から大部分はキヌマ見物に行つたが、余は四五人の友と再び玉

屋に行き、樓上に憩つて夕雲赤く暮れ行く空と明滅する町の燈火を望み、初めて異郷に宿る情緒を味ひ故郷を思つた。買物をし市内見學をして歸つたのが十時。門限は十時半だつたが皆亢奮してゐるのか、容易に寝なかつた。

七月廿四日 金曜 曇後雨

異郷第一夜の夢も覺め五時起床、まだ皆寝てゐるので二人で道を尋ねつゝ聖福寺詣でをした。到れば所化僧居士等が甲斐々々しく朝の行を勤めてゐる。此處は初めて禪をもたらした千光國師榮西の開基。山門には後鳥羽院の宸筆「扶桑最初禪窟」の扁額が掲げられ、一境清淨些かの俗塵を止めず今尚清家の僧堂として重きをなして居る。今一休仙厓老師は嘗て此處の住職であつた。「つながられて暫し浮世に墨染のそでの湊の捨小舟かな」と云ふ作がある。

さて今日は日程變更、太宰府府希望者廿二名は殘餘の者と二日市で會するを約して兩先生と七時久留米行急電を驅つて天満宮參詣、朝霧は筑紫野に立ちこめ車窓に入る涼風の快さ。廣漠たる平野を突走る。二日市乗換太宰府着。直ちに普公廟に參拜する。樟の大樹に繞らされた心字の池に懸る太鼓橋を渡れば志賀社がある。愈々進めば愈々氣改ま

り心清きを覺ゆる。樓門前には普公遺愛の飛梅あり。これより南一帯は幹枝材瘦古苔枯壁蒼蒼たる梅園だ。莊麗な樓門に入り本殿前に到り、口を嗽ぎ衣を正し恭しく禮拜を終へる。當社は官幣中社にて祭神は無論贈正一位菅原道真公、樓門は慶長中石田三成の建立に係るもの先年烏有に歸し、

今やその型に倣つて面影を新にし、本殿は小早川隆景の建築で志賀社と共に特別保護建造物である。普公を蒙り此の地に貶謫に逢ふや、只管謹慎して一步も門外に出でず、世を恨まず人を咎めず君恩の厚きを謝して居られたのである。公の詩「都府樓觀看瓦色。觀音寺只聽鐘聲」の都府樓は北十六町餘かに礎石のみを存し、觀音寺は西北六町にあり既に傾廢し軒傾き地荒れて只鐘樓のみ残つてゐると聞いた。後の山に登る途中、普公彫刻の觀音像安置の小堂あり、山上の眺望は雲に妨げられ普公が天に冤を訴へられたと傳へらるゝ天拜山も一向見えぬ。見學を終へて十時過二

日市驛着。飛行隊が飛行機を解體して汽車に積むのを見、十一時八分發。車中で點呼して一路熊本へ向ふ。長崎縣分岐點島柄を過ぎ筑後川近くに差掛れば先日來の降雨に廣き田地は水浸しとなり慘澹たる光景を呈してゐる。河を渡り

久留米に入れば右手に梅林寺・水天宮が近く、諸方に足袋・久留米耕の工場も見える。今や我等は筑紫平野の只中を南進して行く。櫛の木が萩で際を見る如く多く晩秋紅葉の美觀が想像される。三池炭坑で生きて居る大牟田市には四ツ山なる景勝地が見える。

誰か「あ、潮があんなに引いとる」と。成程もう有明海だ。十五米位遠退いて居る。何時の間に降り始めたかとてもひどい驟雨の霧。近く海上に浮いてる舟すら水の上か霧の中に居るか定かならぬ。たゞ中空にぼつかりと浮いてる様。漸く汽車は丘陵の中へ進んだ。熊本縣に入つたのだ。

高瀬・木葉・植木驛の邊は西南戦争古戦場として知られ、肉迫戦を演じた田原坂は鐵道より東方。忠臣の名を永劫に傳へる菊池川はその南を西流する。

さる程に零時五十一分上熊本驛に下車、出迎への司旅館の人に案内せられ小雨を降降る中を本妙寺に詣づる。同寺は清正公京都より日眞上人を聘して開祖とせられしもの。壯大なる仁王門を通り長い石疊と石段を上れば櫻並木を隔てゝ左右には幾つも塔中がある。到りて公の廟に謁し、更に公に殉じた大木土佐守・鮮人金富の菩提を弔ひ、案内者

の説明を聞く。此の君にして此の臣あり誠に感すべき人達である。恰も今日はお祭の最終日だとかで香煙縷縷として四邊に漂ひ、打鳴す太鼓と御題目の聲は勇ましくも殊勝に聞える。

道を轉じて錦山神社へ、更に熊本城へ。

同社は縣社、祭神清正公、配祀は大本・金二人の殉死者。参拜を終へ説明を聞きつゝ廻り行きて、第一天守趾、師團司令部前で市街眺望、森の都と聞いてゐたが成程こんもり茂つた樹木が多く閑靜な氣分を起さしめる。それから唯一の殘存天守閣宇土櫓に登る。中には舊藩時代・西南役當時・其他有益な歴史参考品が澤山陳列されてある。

城壁の構造、井水の完備、兵糧貯蓄法、其他開けば聞くほど公の築城術の周到綿密さに驚かされる。城内に樟樹の多いのも生で燃え易い爲薪炭用に植ゑられたと云はれる。此の城に銀杏城の名を冠せしめた公手植の銀杏は司令部前にあり、西南戦争に枯れて今は新しい發芽のものがある。

城内の見學終了するや、自動車に分乗し水前寺成趣園へ走る。雨は幸ひ降止みとなつた。人工とは言へ、園は流石に美しかつた。清冽な水、天鵝絨の様な緑の芝生、それが

一人も歸らず、一緒に歸つた二三人は再び外出、余は一人で就床する。兎に角、熊本は路がわからぬ。そして舗装工事最中だからでもあるが道が悪い、願れば福岡は矢張り九州一だけあつて道路もよく整頓されてゐた。こゝでも舗装終了後は定めて良道となるであらう。皆が活動見物から歸つたのはかすかに知つてゐる。夢は屹度大阿蘇をかけ廻るであらう。

七月廿五日 土曜 曇雨不定

噫、無情。阿蘇登臨に勇んで床を蹴り出づれば生憎雨が降つてゐる。然し測候所の豫報に一縷の望を抱き雨中を水前寺驛へ。八時零三分發豐肥線列車に乗つて東進すれば、程もなく高等工業學校が遠望せられる。沿道は殆んど農家でしかも形は皆一樣の小桑屋。聞けば清正公當時斯う一定されたのを今猶墨守してゐるさうだ。然し農家は矢張りこんな質朴なものが望ましく實用的でもあらうし詩的價值も大きい。

南窓に倚れば、阿蘇外輪山の裾野は遠くなびき、極めて緩かな勾配に緑の優しい毛氈を敷き列ねてゐる。躍る胸に快い印象を刻む。白河の鼓打つ響はやがて脚下に聞え、對

雨を得た後だから一層清新な趣を見せる。池には鯉魚群れ遊び、東海道五十三次に象どつた築庭には富士山がすつきりと聳えて居る。北側に細川家一統を合祀した縣社出水神社あり、その東には細川護全公の銅像がある。彼の古今傳授の間は幔幕をめぐらし昔そのまゝの古風な面影を池畔に残してゐる。公園の盡きた丘上に大動物園がある。約一時間、赤道直下の砂漠高山や兩極地方の氷山海底からまでも集めた珍妙怪奇猙獰可憐な鳥獸を相手に樂みつゝ豊かな動物智識を納め得た。愛嬌者は何と云つても猿公だ。電車便にて五時半頃宿所旅館に到着。

夕食後今宵も市内夜景見學に出た。最初道に迷つて飛んでもない方向に行つた。市役所前に舞戻り、歡樂郷にそゝり立つデパート銀丁見學、眺望臺にて休憩。敷島八割を製造すると云ふ專賣局が魔王の如き暗き巨軀を目前に横へて居る。公會堂、逓信局の前を過ぎ、地圖に頼つて放送局を探したが見當らず三度同じ場所をぐる／＼やつた揚句、人に尋ねてやつと判つた。一寸横丁へ入つたらよかつたのだ。内部參觀は許されまいと諦めて入らず外から眺めただけ。意外にアンテナなんか小さかつた。九時に歸館したがまだ

岸に瑰琦な依山が屹然と現はれ、汽車のやう／＼喘ぎつゝ外輪山の斷口に差し掛れば、行手に烏帽子岳が雨を含んだ雄姿を見せる。

立野―立野。愈々火口原に突入する。汽車は後退し又前進して次第に高所に登る。黒川は時に美しい瀑布を懸け、奇岩を配し奔流を作つて流れて行く。雨が止んだ。火口丘の麓には京大所屬火山研究所が廣い緑野に只一つ、學究の所として相應しげな姿を見せる。雲は次第に失せて右手に阿蘇五峯は次々に顔を現はし高岳は斷然高く聳えてゐる。

乗車二時間、十時二分坊中着、皆争つて登山杖を購ひ、身支度して愈々征途に上る。雨は晴れて雲の切間より折々眩しい陽光がさつと流れる。幅員四五間の登山道路の工事中、今秋、陛下の行幸あらせられる迄には竣功の豫定。道を通常登山道に取れば全く泥濘の路。「滑べるぞ」「滑つたら罰金だぞ」。然し間もなく盡きて良い道となる。一路頂上へ。緑、緑、全く緑、しかも雨後とてその清さ鮮かさは格別で、天鵝絨を敷き列ねた様な起伏した小丘は無限に續く。五合目にて眺望すべく休憩、實に雄壯な典雅な絶景だ。黒く茂つた外輪山は横一文字に空と地とを劃し、東北遙か

にまた浮き漂ふ雲煙を抱いて久住山は屹立してゐる。脚下の火口原、どうしても火口とは思はれぬその廣さ、世界一と云ふも誣ふるに非ざるを知る。しかも、その坦々として外輪山に接する平野に點在する聚落こそ平和郷そのもの、姿を見せて静かに眠つてゐる。朝出芙蓉下。夕宿芙蓉下の風情はなにもこの偉にして優なる景勝の懷に住む人はどれだけ耳目を清め、詩的生活に耽け得るだらうかと羨ましい。眺望を終へて頂上突進。僕等は健脚だ、どん／＼先んじて行く。根子岳・杵島岳・烏帽子岳も間近に見え高岳は壓附ける様に前に立ち塞がる。七合目の頃薄霧が山膚を掠めると見る間にさつと走る驟雨、通り過ぎの雨らしい、しばらくで止む。漸く進めば緑野を脱して磊現たる火山礫、大分峻しへ前と比べて荒涼たる気分を起す。然し氣は益々勇む。硫黄の氣界をつく九合目に至れば石造の小屋がある。下りて来る登山者に此のあたりで幾組も會つた。中に十四五名の女學生の一團もあつた。山に弱い諸君に好い刺戟だらう。勇を鼓して岩漿の流れた跡もあらはなとして一層／＼／＼した噴出岩を踏破しつゝ遂に中岳頂上にT君と共に第一着の凱歌を擧ぐ。時正に十二時。直ちに懷れの火口見學。想

像してゐた程今は噴煙せず幾十丈の絶壁の底には湯玉を碎く熱湯が白い湯氣を濛々と立てゝ居る。火口を一周すれば一時間を要すると云ふ。凄絶な絶壁で雨揚句の今日は駄目だ。そう。火口に向ふが高岳で全く草一本もない岩膚の山、此處から頂上まで一時間半は要する上。

兎角してゐる中道々皆も上つて来る。殿りは僕等より四十分遅れて喘ぎながら到着。三度阿蘇に來て一度も上らぬと云はれた山本先生もどう風が吹いたか案外大元氣が頑張られた。登山の壯快味を噛みしめて費食。硫黄臭い。僕等と殆ど最初から一緒に來た中年の一異人さん、練れぬ箸で米飯を掻き込んでゐる。語る人なき異國の寂しさ、物言はまほしげに碧い眼を折々我々に投げ掛ける。沛然と驟雨が來た。疾風も加はつて物凄い。雨が止めば氣温低下と汗の冷えて惡寒を催す。藥賣りが試みだとして皆に寒さ除けの藥を貼つてくれた。

火口を背に記念撮影した後、再び襲つた驟風と強雨を衝いて第二、三、四の噴火口の縁を通りつゝ下山の途につく。此等は何れも深き絶壁の底に異なつた色の熱湯を噴出し、就中、第四は昨年九月に爆發したのでまだ新しい火山灰は

遠く流れて當時の凄壯さを物語る。此處まで來てこんな所で自殺する自殺者の心理はどんなものか。暫くして本道へ、草の岡には放牧の牛馬が幾群も仲よく遊んでゐる。あの草千里ヶ濱はのんびりして實によい景色だ。茫々打撲がれる緑野の中央に小湖を湛へ一日頃は水はない野原だそうだが――その間には靜中動あり幾十の牛馬が点々と生動し全く名畫そのまゝで日本で見える景色とは思はれなかつた。

そこから暫くして小徑を朽木へと下る。走つた／＼。湯の谷温泉迄一走り、少憩後下間先生外三名と立札を便りに宿所へ急ぐ。四時四十分小山旅館着、再び一着だ。早速湯に浸り登山の疲れを絞り出す。温泉プールで水泳もやつた。旅館は溪流に懸り、幾度の瀑布に望み、對岸外輪山の碧翠に對し誠に優雅閑靜の地である。豪快な阿蘇山中に斯うした温泉場も澤山あるが名實共に優しき我等の朽木温泉こそ隨一の好保養地であらう。泉量豊富で浴場三つ娛樂室・談話室など設備も整つて居て家族連れの避暑客が随分澤山居るらしかつた。今宵は何處へも行かれぬ寂しさに大いに校歌を歌つたり、騒いだりした。九時から茶話會開催、各々勝手な氣焔を上げて十時散會。皆靜かに就床した。穴の阿

蘇・草の阿蘇・豪快で優美な世界の阿蘇は年來宿望の胸にどんなに快い忘れられぬ印象を刻みつけたことか。山峽の一夜は又々降り出した雨に送られ靜かに更け行きて客旅の情を一入深うした。

七月廿六日 日曜 雨一時曇

起き出づれば物凄い程の雨の土砂降り。前の溪流も昨夜よりずつと増水し、瀑音と相合し巨雷の落つる如き響を立てる。さはれ一夜の假りの宿、急ぐ旅程に心焦々しく七時四十分宿を立ち出づ。雨は益々烈しく先發した爲自動車へも乗らず、是亦旅の一興と四人連れで迂餘曲折の道を立導驛へ。途中白黒雨川合流点戸下温泉あり、祿々見もせず通過、一時間余りで立野着。服はびしょ濡れとなつた。九時十三分同驛發、再び豊肥線に投じて別府に向ふ。昨日通過した火口原を通りつゝ雨烟る懷かしの五峯を後に官幣大社阿蘇神社（祭神健甕彥命外十一柱、肥後文化發祥の地）の鎮座まします宮地驛を通り東側外輪山突破となればトンネルが目立つて多い。一體此線路の列車は煤煙多く迂濶に窓へ覗かれぬ。岩の裸出した外輪山も越え行けば已に大分縣竹田、三重、犬飼、瀧尾等の田舎町を縫ふて進めば田園所

深に蘭草を栽培してゐる。國東半島に入れば更に多いそう
々。墨表は大分特産の一、熊本縣では煙草の畑が目立つた
が此處では蘭草の田、山一畝でこんなな違ふ。所かはれば
品變る。なるほど實際だ。一時廿八分終点大分着。同五十
分發。海岸の景勝地西大分。濱脇二驛を通過、二時十五分
愈々泉都に入る。宿所長崎屋の人に導かれて別館到着。嘗
て秋に御成りなつた閑院若宮の御通過を拜す。一時晴れた
雨は當地着前から再襲。自動車に分乗して地獄巡り。先づ
八幡地獄へ、熱氣數丈を飛す間歇泉の壯觀は生憎噴出せず
所謂地獄の鬼骨を見、鐵輪の轆を走つて海地獄見學。明礬
を含んでゐる爲、宛然海の色の様で随分廣く噴氣亦烈しい。
血の池地獄は名の如く赤褐色で泥土がぶつ／＼湧き立つて
ゐた。酸化鐵を含んでゐるからだ。有名なこの三つのみ巡つ
て「かまど」地獄の傍を素通りして歸館した。途中到る處田
の畦の様な所でも蒸氣が噴出して居た。流石泉郷の名に恥
ぢぬ。往路に京大所屬地質學研究所があつた。

地獄廻りもよいが商賣女達が口々に買物を請うのは大變
うるさい。菅公靈廟の地でも仕方のない程客の吸引をやつ
てゐるが旅行中續の種はこれ等だ。歸館後二三の先生へ後

れ走せながら信を發した。

「まづ泊れ湯もあり春の雨も降る」雨と蒸氣と濛々とし
て鈴蘭燈街を包み、客旅の情は暮靄迫りて更に悠々たるを
覺ゆる。夜景見學に出掛ける。埠頭に出づれば恰もよし定
期船線丸は出帆せんとする所。美しいテープは船上の人埠
頭の人の間をつなぐ。急に銅鑼一聲高鳴るや艦に渦巻く
波、舟は平らかな暮潮を動かせば、テープは次第に伸べら
れやがて切れてひら／＼と夕風にそよぐ。時然と立つ人。
巾を振る人、思ひは同じ別離の情だ。不圖眼を上ぐれば由
布鶴見二峯は雲の切間薄暗い夕に默然と聳えて居る。鶴見
園は五時閉館で行かれず、宿所流川通から一線上のケーブ
ルカーにも余りに遠い。町を巡つて土産品を買ふ。不良兒
が多いと注意されてゐるので物騒だ。道を轉じて他の方角
を歩いて見たが目ぼしきものもなく八時頃歸館した。

此處は兎に角泉量豊富、交通便利、都會的設備の整頓さ
れ且つ景勝地である爲多數浴客を吸収し得るので堂々たる
大温泉宿は幾つも／＼もあり中には飄蕩狀をなした奇形な
旅館もあつた。陸海軍、滿鐵、門鐵等の療養所もあるさう
だ。

負ふ所が多い。

今宵はどうしたことか一眠れぬ。まゝよと寝るのを止
めて最後の一夜を楽しく遊ばんものと打ち興じた。別館は
我々一行の獨占だから心配いらぬ。前の共同風呂へは二時
頃迄も人が入りに來てゐる。二時半頃からは夢に入つた。

七月廿七日 月曜 雨後雲夜雨

愈々最後の日程に入る。何だか旅行に名残り惜しい。朝
七時四十七分泉都を後にして北上する。小降りの雨で海上
は狭霧立ち込め沿線亦到處噴氣濛々として居る。龜川近
くなれば奈良の大佛より大きい野口の大佛様が左手に露座
ましますを車窓より拜みつゝ、海岸を進む。此のあたりは
風景の好い處。やがて宇佐八幡宮行分岐點宇佐驛を過ぐれ
ば折柄雨も止みて雲の途切れに山容特異の豊州諸山が姿を
冒せる。進路の左右は概ね田地で蘭草も随分栽培して居
る。行橋等の町も折々あるが田舎らしい所だ。

さる程に九時四十五分中津着。十時二十分耶馬溪に向つ
て軌道列車に乗る。陸蒸氣時代の遺物にも等しい機關車、
むさくるしい客車は餘り氣持のよいものではない。

中津市は慶應義塾の創始者福澤諭吉先生を生んだ所。先
生の人格には私淑すべき點多く、慶大學風亦先生の感化に

ぼろ汽車は大貞公園の側を過ぎ、こと／＼と耶馬溪に近
づく。愈々近づけば景愈々奇態を呈するを覺ゆ。「あの山容
はいゝなあ」「あの石脈はどうだ素敵だな」など語り合ふ
中、左手に青の洞門を見る。洞門の側壁の諸所は打壞され
てゐる。明るい點から言へばそれでいゝが神海十八年の功
績を傳へる爲には舊觀を保存して欲しい。其邊りの岩石は
實際南嶺等で見ると奇形な石峯を幾つも作つてゐる。頼先生
の董巨刻意圖と云はれたのを實際に味はひ得た。此處が舊
耶馬と稱せられる十一時五分羅漢寺驛着。荷物を預けて希
望者のみ羅漢寺に赴く。發車迄に一時間しかないで馬力
を掛ける。山國橋上に佇んで彼の奇石秀峯の眺を恣にする。
河水も色が深藍色で異つて美麗。長門峽との比較談が出た。
或者はこちらは遠望し得るが、長峽は仰向いて見る様で餘
り狭い感じがすると云つた。余は矢張り長峽がいゝと思ふ。
山陽氏は扶桑第一としたが彼の擲筆石位なんか長峽にはさ
らにある。氏が長峽を見たら恐らく腕を投げるだらうと某
紙にあつたが本當だ。擲筆石なんか平々凡々たるものだ。
餘談よりは足のスピードが早い。余等五人の健脚は他を

すつと引き離して禪海堂の前を通り苔蒸せる石畳みを小走る。雨後で滑りさうで甚だ危険。寺はとても險阻な所にある。弱者の登るには一寸骨折れだ。今上。秩父宮の御參詣碑が立つて居る。羅漢堂には無數の飯杓子がうちつけて一々名前が記してある。大した所とも思へぬ。石を穿つて洞窟とし本堂も後半は洞の中にある。時間が迫つた。案内しようと言ふを耳にも假さず、五人一齋に急なごつ／＼の石坂を木の根を便り、滑るを危く支へつゝ走る。麓からも走り通した。他の者は麓まで歸つてしまつた。余等五人は時計を見つゝマラソンをやつて驛に着せば直に乗車。汗びつしよりで鼓動も高いが、人の見ぬ所まで見た氣持は大變良。名だゝる馬溪も急ぎながらも大分見學し得た。零時五十三分中津着。一時十五分發。山國川を渡つて福岡縣に入る。旅程は刻々縮まつて行く。車中廣島縣人が余に向ひ頻りに萩を賞した。就中明神池を以て水前寺に勝るものだと矢張り自然的な人工を加へない所が結構だと言ひ、夏蜜柑に就いても色々賞美してゐた。國の事をほめられると流石嬉しい。

紫川を下つて小倉市を縦貫し、再び黒都を走つて二時五

は益々暗く雨は愈々降る中を車の轉する音も高く分秒に萩に近づく。

八時四十五分玉江着。河野先生等の御迎へを辱うす。余は萩驛下車。五日ぶりに假寓の門を潜つた。

縣外への最初の旅行の印象は極めてよかつた。少くとも余には相當の收獲あつたことを信じてゐる。他の諸君も多分さうだらう。雨もずゐぶん降つたが、日程の邪魔もせず阿蘇登山、馬溪探勝の時等折よく降らずに幸福だつた——尤も阿蘇では少し降つた——然もその爲に暑熱甚しからず且つ景勝に一段の趣を添へた事は特筆すべきだ。「名物を食ふや無筆の旅日記」で拙文の爲面白く讀者の胸には響くまい。然しこの旅の意義あり愉快だつた事は確かだ。特に阿蘇登山は必ず一度せられんことを諸君に薦めて止まない。最後に旅中に得た拙詩數首を掲げ、同好の士の御叱正を待つ。

自中岳望久住山

雨濯群峯靄色爽 淡煙頻過阿蘇間
登臨猶半止筇處 雲外遙望久住山

十分門到着。三時十分發。

連絡船の艀に皆集合して船長の好意で海峽の説明をして貰つた。曰く彦島、巖流島、曰く日和山砲臺、春帆樓、引接寺、曰く淺野セメント、税關。其他多數碇泊の汽船をあれは何々所屬、あれは何々汽船と教へられ、潮流等の説明も聞いた。三時廿五分下關着。發車迄に一時間半あるので母校卒業生某氏の案内で驛頭日和山公園に上る。要塞地帯内のこんな高い所に公園なんか作つてもよいだらうかと思ふ程峽内、關・門兩市は雙眸の中に收まる。眺望は好い。然し軍事上果して又しても危懼の念に驅られる。上水道貯水池の傍を過ぎ、下つて驛前で土産品を購ひ、汽車を待つ。驛は實に大きいものだ。待合室へも擴聲機で一々汽車の發着を放送して居る。

正五時下關驛發秋線列車に身を投ず。歡樂の後の悲哀とも云ひたい氣で一杯だ。皆もそんなのか、寂しさ紛れの爲か校歌の合唱を始めた。暮色は漸く海を掩ふて來り、雨再び降り出す。油谷驛頭打つ波音も靜かに周圍の人家の燈はイルミネーションの如く明滅する。

正明市からすつと客も減つて殆ど我々ばかりとなる。夜

絶頂作

風拂脚頭雨洗顏 奮然鼓勇競登攀
凱歌先起噴煙處 立杖蘇峯第一山

草千里ケ濱眺望

茫々曠野草千里 翠綠淡粧得雨清
忽見疎々牛馬走 靜中動態畫難成

朽木溫泉

泉亭掠檻白雲生 閑坐窓前風氣清
浴後忘勞幽遠境 偃登臨快聽溪聲

別府泊

泉府濛々雨與湯 悠然浴了洗塵腸
挑燈共談旅亭夕 三十健兒興轉長





校 報

第三十一回卒業式

昭和六年三月三日午前十時より第三十一回卒業式を講堂に於て舉行す。生徒父兄及保證人並に來賓多數の蒞席あり。河内校長畢式の辭に次ぎ勸語奉讀あり。次に卒業證書及び賞品授與ありて學校長の告辭、來賓を代表して福田彦助中將閣下の祝辭、父兄保證人を代表して藤井倉太郎氏の挨拶あり午前十一時に終了す。當日卒業生にして受賞せる者左の如し。

一、學力優秀にして能く校則を守り佐長となりて能く其の任務を盡したる者

一、平素勤勉にして能く校則を守り學力優秀にして佐長となりて能く其の任務を盡したる者

- 森澤陽亮
- 一、平素勤勉にして能く校則を守り皆勤五ヶ年に及び佐(室)長となりて能く其の任務を盡したる者
- 綿鍋一郎 吉村貫一
- 一、平素勤勉にして能く校則を守り學力優秀なる者
- 中野 茂
- 一、平素勤勉にして能く校則を守り皆勤五ヶ年に及べる者
- 齋藤 正
- 一、平素勤勉にして能く校則を守り佐長(室長)となりて能く其の任務を盡したる者
- 原田 豊
- 一、平素勤勉にして能く校則を守り皆勤五ヶ年に及べる者
- 中村 昇 品川正夫 柴田良一
- 一、平素勤勉にして能く校則を守り佐(室)長となりて能く其の任務を盡したる者
- 吉原重泰 池田辰夫 藤井謹二
- 福田繁人 中村梅男
- 一、本學年間佐(室)長となりて能く其の任務を盡したる者
- 平川五致 玉屋收輔 長谷五郎

賞品授與式

- 四月八日、新學年の始業式後、前學年度に於ける第四學年以下の生徒に對し賞品賞狀授與式行はれた。
- 一、特等賞(平素勤勉にして能く校則を守り學力優秀にして佐長となりて能く其の任務を盡したる者)
- 四年 岡本益亮
 - 三年 中村晋作 木藤正典
 - 二年 玉木和彦
 - 一年 山本誠一 能美忠廣 新谷幸治 中野博造
- 一、一等賞(學力優秀にして能く校則を守り佐長となりて能く其の任務を盡したる者)
- 四年 小橋一男 芳野泰禮 大山慶太郎
 - 三年 田坂興道 石川 浩 佐々木軍治
 - 二年 辻野三郎 小方 司 菊屋嘉十郎
 - 一年 松尾美男
- 一、二等賞(平素勤勉にして能く校則を守り佐長となりて能く其の任務を盡したる者)
- 四年 同藤宗次 河野希一 山崎正義
 - 三年 金子治平 金田喜典 齋藤孝正
 - 二年 三浦尚彦 中原正久 林 希男
 - 一年 栗田常雄 横山岳夫 小田敷夫
- 一、三等賞(本學年佐長となりて能く其の任務を盡したる者)
- 四年 岡藤徳太郎 渡邊觀吾 仁保文雄
 - 三年 田邊滿希 天野元興 近藤信一
 - 二年 河村一夫 瀬川良作 頼野幸夫
 - 一年 簡井 深
 - 三年 中原五郎 原 嘉道 矢次三重

先生の更迭

- 昭和五年十一月以後(前號報告後)更迭せられし先生左の如し。
- △香川先生 昭和六年二月七日退職せらるる先生は本校に八年勤続せられ訓育に盡せられたり
 - △岡庭先生 昭和六年二月七日新任せらるる地理科歴史科擔任
 - △安藤先生 昭和六年三月二十日退職せらるる先生は本校に勤続せらるる事實に三十年以上訓育に盡せられたり
 - △頼野先生 昭和六年三月二十日退職せらるる先生は本校に勤続せらるる事實に三十年以上訓育に盡せられたり
 - △相島先生 昭和六年三月二十日退職せらるる先生は本校に勤続せらるる事二十六年以上訓育に盡せられたり
 - △田中秀一先生 昭和六年四月八日新任せらるる英語科擔任

- △八木澤先生 昭和六年四月八日新任せらる
- 國語漢文科擔任
- △金藤先生 昭和六年四月八日新任せらる
- 國語漢文科擔任
- △青木教官 昭和六年七月二十日高知第四十四聯隊へ轉任せらる
- △柳屋教官 昭和六年九月一日本校教官に新任せらる教練科擔任

校誌 (簡略)

(自昭和五年十一月至昭和六年十月)

- △十一月三日 明治節賀式舉行
- △十一月十七日 第五學年六四名陸軍大演習御親臨參加の爲岡山市に向ふ
- △十一月十九日 第五學年生岡山練兵場にて御親臨を受く
- △十一月二十日 御親臨參加の第五學年生歸校す
- △十一月廿一日 松陰神社秋季祭禮に就き放課後一同參拜
- △十一月廿二日 松陰先生追慕會舉行、職員生徒の松陰先生に就いての感想發表會あり
- △十一月廿五日 學校長より 御親臨に關す

- る狀況報告あり
- △十一月廿九日 向原警察署長の火災に關する講話あり終りて秋季辯論大會舉行
- △十二月五日 廣島放送局小田部長のラヂオ放送に關する講演あり
- △十二月九日 教練查閱、査閱官第四十二聯隊附益田中佐
- △十二月十六日 熊本督學官來校視察せらる
- △十二月二十日 村岡教諭の國產愛用に關する講話あり
- △十二月廿四日 第二學期終業式
- △昭和六年一月一日 拜賀式舉行
- △一月八日 第二學期始業式
- △一月十日 武道突格古開始
- △一月十九日 武道突格古終了
- △一月廿七日 武道大會開催
- △一月三十一日 御眞影奉還、職員生徒一同金谷祠畔に赴く
- △二月七日 御眞影奉還の爲萩縣前に赴く、奉迎後禮拜式舉行
- △二月十一日 紀元節賀式舉行
- △三月三日 第三十一回卒業式舉行
- △三月六日 渡邊縣體育主事來校視察

- △三月九日 第四内親王御誕生に付第一時限朝會に於て東方遙拜
- △三月十日 陸軍記念日に就き長岡少將の講演あり
- △三月二十日 本學年度終業式、安藤、頓野、相島三教諭の告別式あり
- △四月八日 始業式、賞品授與式、入學式次々に舉行、金藤、八木澤、田中秀一三教諭の新任式あり
- △四月十三日 自今毎日朝會を行ふことにす
- △四月十四日 學級自治會開催
- △四月十五日 志都岐山神社參拜
- △四月廿一日 朝會の際國民保健體操を行ふことにす
- △四月廿五日 第一回チブス豫防注射施行
- △四月廿九日 天長節賀式舉行
- △四月三十日 放課後招魂祭參拜
- △五月二日 第二回チブス豫防注射施行
- △五月四日 第四・五年辯論小會
- △五月五日 第一・二年辯論小會
- △五月九日 武道競技小會
- △五月十八日 全校生徒一日遠足(五年長門峽、四年油谷洞、三年三隅大日比、二年笠

山大井、一年秋史蹟巡

- △五月廿三日 放課後火災消防演習施行
- △五月廿六日 渡邊體育主事來校、體操視察
- △五月廿七日 海軍記念日に就き朝校海軍大佐の講話あり
- △五月三十日 山口高事主催陸上競技大會に出場選手出發
- △五月三十一日 山口高事主催陸上競技大會に於いて本校奮闘空しく六位となる
- △六月一日 行啓記念式後陸上競技大會開催
- △六月十日 時の記念日に就き朝會の臨學校長より講話あり
- △六月十三日 山口高事水上競技聯盟主催第三回近縣中等學校水上競技大會に出場選手出發
- △六月十四日 水上競技大會に於て本校四位となる
- △六月十八日 武智本縣視學官來校視察授業參觀あり
- △六月廿十日 萩町明倫青年團主催の第一回陸上競技大會に本校も參加し全校職員生徒一同應援に赴く
- △七月一日 山本校醫の衛生講話あり本縣醫師會より優良體格者として五年生吉賀弘一

に賞狀を授與せらる

- △七月四日 武道大會開催
- △七月二十日 第一學期終業式
- 青木教官告別式
- △九月一日 第二學期始業式、柳屋教官紹介式
- △九月六日 第三・五學年保證人會、校友會主催各部製作展覽會開催、煙草實驗もあり
- △九月十二日 乃木將軍追慕會舉行、香川阿武郡教育會主事の講話、市川陸軍大佐の三典詩朗吟あり
- △九月十八日 武道競技小會開催
- △九月二十五日 田淵山高教授より四・五年生に對し數學講話あり
- △九月三十日 教練查閱、査閱官第四十二聯隊長山口大佐、終りて山口大佐、猪狩少將の講話あり
- △十月九日 縣體育會主催陸上競技大會出場選手壯行式
- △十月十日 武道部選手出發、陸上競技は第三位となる
- △十月十二日 縣體育會主催陸上競技武道大會出場選手の報告會開催
- △十月十四日 午前十時より縣立森圖書館三

特別會員 森本 德雄

七夕聯想詞

小川邊の草叢にふとひとひらの赤き短冊散りて残れり。
にぎやかに伽子提灯をうちつりて星祭りせしいとけなき頃。

新 秋

この朝明手洗ふ水の冷くてすが／＼しくも秋は來にけり。

失 題

よすがらに吹きし野分のしづまりて燈の影うす青き朝。



校友会報

書道部

九月六日、例年の如く、第三學年第五學年生の保證人會を期として、生徒成績品展覽會を舉行せり。吾が書道部は、第四學年二組の教室を以て陳列場と爲し、午前八時より午後四時まで一般の觀覽に供したり。此の日早朝大雨なりしが、九時頃より空晴れ、絶好の展覽會日和となれり。其の上日曜日なりし爲、人出多く、殊に午後に至りて一層増加し混雑を極めたり。抑今回の陳列品は、學校に於て教師監督の下に書きしものにして、その中より優秀なるものを選び、一等二等三等に分てり。榮譽ある一等賞を得たるものは次の如し。

第一學年 石村豊徳君

書道部

第二學年(其二) 能美忠廣君
第二學年(其一) (現在の第三學年) 河野通弘君
出品者の成績年々進歩の跡見ゆるは、眞に喜ばしきことなり。尙參考品の出品者左の如し。

第五學年 那須武雄君
終に臨み今後益諸君が努力せられ我が書道部をして隆盛に赴かしめられんことを望む。

(菊屋嘉十郎記す)

第二學期に入つて最初の日曜日、九月六日例年の如く第三學年第五學年の保證人會を機に、生徒成績品展覽會を開催した。が當日は昨夜

來の大雨、折角昨日晩くまで吾々が準備した會場も多少亂れて居たが、それよりも更に懸念したのは、雨の爲め觀覽者の少くなるであらうことであつた。然しいざ開場となると、流石は秋中日和カラリと晴れて、朝までの大雨は何處へやら、晝からは更に觀覽者殺を絶たず、特に我書道部の會場は賑つた。他の何處の部よりも。

第五學年二組の教室には主として我校生徒夏期休暇中の入選作品及び水沼先生の作品數點を陳列した。特に本年からは一等二等入選畫にはその短評を附して、簡單なる批判を與へた。爲に繪に理解ある人にも、理解のない人にも、大變よい思付きだと喜ばれ、中には熱心に一つ一つ繪と短評とを、引き比べて見る人もあつた。何しろこれは書道部の一發展であつた。一つの新しい企てであつた。四年の佐伯君は油繪も水彩畫も上出来だつた。五年の平瀬君の製圖の精密にして、不斷の努力が畫面に表れて居るのは心服した。三年の小方君の幾何圖案は原色を、うまく配置して綺麗に出来上つた。二年の吉津君の運動場の寫生は、遠近の色分けがよく出て居り、二年の中野君の果物籠も、二年生にしてあれ程畫

ければ立派な物だ。四年岡君のボアラもよく描けた。

四年三組の教室には、生徒の學校に於ける平生の作品を出品した。

小學校からは明倫、椿東、越ヶ濱、白水等からそれ、伸びくした畫を出品され、一段と觀覽者の目を惹いた。出品學校にはこの誌上に、感謝を表す。

最後に今後諸君の努力によつて、我書道部の益々隆盛に赴く様、切に希望する次第である。(吉田記)

地歴部

九月六日、例年の如く三五年生の保證人會を機とし、森中學校生徒成績品展覽會は催されたり。當日生憎夜來の雨に見舞はれしも、午後になりてからりと晴るゝや急に觀覽者増加し、隨分と盛會なりき。

我が地歴部は、出品數に於ては、昨年比して稍遜色ありしも、概して手極よく出来、大作は少かりきと雖も、一般的には進歩の跡歴然たるものありき。殊に下級生諸君の努力に對しては感ずべきものも有り、此の點大いに満足に思ふ次第なり。

理科部

前日より氣づかはれた天氣は、遂に雨となつて、保證人會の始まる八時半頃には、一層の猛烈さを加へ、眞に車軸を流す様だ。こんな天候ではと大いに心配する。

一、理科部

外觀と内容との完備を縣下に誇る、新實驗室には、未來の發明家、エンヂニヤを夢みる諸君の苦心の傑作で、所狭きまでに陳列してあつて見物人は早くから詰めかけて居る。中にも居田君兄弟の起重機や大島君の飛行機等は、其の技術の圓熟さと設計の精密さは、

大いに將來を期待するに充分である。又岡田君の軍艦模型、河野君の扇風機も立派なものだつた。木村君の電氣音器は、現代に於ける新界の權威であるビクターのR5四五に比するもなら遜色なきものだ。又スウキツチを切り換へればラヂオの受信機にもなるもので、アマチュア界の域を脱して殆んど専門家に伍するものだ。岡田君の天才を助長せられ將來のラヂオ界への貢獻を祈る。

販賣店は三年四年の委員諸君にやつてもらつて、僕や田嶋君、新谷君は此の日の呼び物標榜の製造に取り掛る。青年訓練所からも數名見學に來て居られるとの事、失敗したらと思ふと天秤を量る手が震へる。その中に用意が出来上つて校庭に持つて出てずらりと列らべた。マッチを擦つた。導火線がついた。火藥が燃へた。だが、だが一向に煙は出ない。一分経つても出ない。二分経つても……。

僕はじり／＼して來た。ア、駄目だ。折角の苦心も水の泡かと悲觀して居た時、一本からむく／＼と煙が出た。占めたとはつと一息すると出ないのに火藥を詰め改へて點火すると今度は皆勢ひよく白煙を吐き出した。數秒にして煙は全くあたりを包んで一寸先は愚

自分の身のまわりさへ判らなくなつてしまつた。そこへ赤、青、黄、黒の煙幕を出して美しさは譬へようもなかつた。其處へ集まつて居る父兄及び見物人は、賞讃の聲ぞくぞく新化学兵器の偉大さを讃嘆して居た。數分間は我々は煙の中にあつて、周囲は全く煙だつた。かくして午前の實驗は大成功に終つた。午後の實驗は、朝の様な事が無い様に早く準備して火薬もしつかり詰めて置いたので、すばやく煙を吐き出した。之も大成功だ。ア、之で僕等が暑い日中を、毎日學校に通つて來て研究した甲斐があつた。僕等の努力は酬ひられたのだ。小橋君を始め大谷君、田邊君、新谷君に、夏休中の御骨折りを厚く感謝する次第である。

今、煙幕の實驗について考へて見るに、日本の現在の時局は餘りにも多事であつて、特に支那の折衝は將に決裂せんとして居る。一たび宣戰布告され國交斷絶すれば、直に敵の飛行機は我等の頭上に飛來して、重要な建築物、交通電信機關等に爆彈を投下する事は火を見るよりも明らかである。こうした時の第一の防禦策は、煙幕を張る事である。しかば煙幕とは如何なるものか？如何なる効力

二、博物部

地味ではあるが、確實な歩みを續けて居る本部は、一二年生徒の植、動物（主に昆蟲）の諸弟の苦心の後が歴然と見へる。暑中休暇中の名は聞いて居たが見るのは初めてだ。あまり大きいので氣味が悪い。牛の様な鳴き聲をすとは益々驚かざるを得ぬ。一般にも珍しいものだらう。

最後に、如何なる偉大なる發明も、必ず模範の道程を経て、實用の域に進むのである。模範は發明への一階梯である。さればこそ我

萩中學校の展覽會も模範ではあるが意義があ

競 技 部

山口高等專門學校競技聯盟主催

第六回近縣中等學校陸上競技大會

第六回近縣中等學校陸上競技大會は山口高

事陸上競技聯盟主催の下に縣下陸上競技大會のトップを切つて五月三十一日午前八時我等のオリムピヤ鴻南原山口高等學校グラウンFに於て舉行、参加校五縣十五校、此の日絶好のスポーツ日和に恵まれ、参加選手の意氣物凄く、觀衆はグラウンドを埋め壯觀極まりなきものがあつた。

定期午前八時、昨年の優勝校山口師範を始め、必勝を期する各校選手これに續き壯觀極に入場式が舉行され、ついで優勝旗及優勝杯返還式が行はれた。奈倉副會長からスポーツマンの名譽のため不撓不屈日頃の練磨を發揮し、あくまでもフェアプレーの精神を以て闘はれたいと激励された。

かくて午前八時半百米第一豫選から戰の幕は切つて下された。熱血漲る若人の胸はいやが上にも躍動してゐる。吉岡、辻野、杉本の諸君をスタートへ送る。G組の吉岡君よく闘つたが惜しくも落選。D組の辻本君は連日の頭痛のため日頃のレコードも出ず鴻中の新内君と大接戦だったが三着で落選。F組では老練杉本君よく頑張つて輕く二着で入選。タイム十一秒三。フィールドでは砲九投の決勝。巨豪近藤君と若武者富田君共に惡戦苦闘して頑張つ

たが遂に榮冠は萩商の巨人長富君に與へられた。レコードは十一米六十七。近藤君は四等との差僅二三種で惜しくも落選。砲九投と同時に走高跳口火の出る様な大接戦を演じて大いに觀衆の目を引いた。萩中からは老練藤田、杉本、中村の諸君を出す。最初バーは一米五十にかゝげられた。三君とも皆鮮かなフオームでオーバー。バーは五十に上げられた。これも皆輕く飛ぶ。バーは更に六十に上げられた。中村君飛ぶ、アツ、バーは落ちた。が落ちつきを見てニツコリ。次は藤田君輕くパス。杉本君は百米第一豫選の直後で疲労の爲か一米六十五は確實の實力があるのに三回とも失敗。これで遂にオミットとは残念だ。然し中村君二回目は自重して十分餘裕を見せ飛ぶ。六十を飛んだ者は僅に七人。バーは六十五に上げられた。中村君頑張つたが三回とも失敗す。次は藤田君、十分落着きを見せて遂にオーバー。一米七〇で藤田君は遂に飛ぶた。強敵萩商の三好君よく頑張つて遂に飛ぶ七〇を飛んだ者は三人。バーは七三に上げられた。が豪者三次中の小田君だけが輕く飛んで一等。結局藤田君は四等で最初の一點を獲得した。トラクツでは八百米豫選。吉村、中

村君共に棄權。來島君よく頑張つたが惜しくも落選。A組では萩商の神田君輕く一着で入選す。次は二百米第一豫選。吉岡君は足尖をいためてゐるため已むなく棄權。杉本君はスタート惡くダン／＼距離をちぎれたけれども遂に落選。F組で若武者辻野君猛者連捕ひの組に加つて山師の藤井君、宇工の近藤君と一、二を争つてゐたが、ゴール直前で遂に胸一つ差で敗れた。あゝ必勝を期してゐた二君とも遂に敗れた。日頃の實力も發揮し得なかつたのは實に私の責任である。次で千五百米豫選のコールはかゝつた。初陣の田中君スタートよくトップを切つてダン／＼走る。奮闘の結果三着で入選。B組の吉村君、G組の中村君共によく戦つたが残念にも落選。次は低障礙第一豫選。吉岡君は萩商の猛者右田君と組みスタートするや大接戦を演じたが遂に右田君一着、山師の長崎君二着、吉岡君は三着で落選。あゝ天運盡きたか、唯一の望みをかけてゐた君は不幸にも敗れた。君の心中を察するに同情に堪へず。實力は十分あるにかゝわらず、それを發揮し得なかつたのは如何にも残念だ。然し君は若い、前途遠達だ。以後ますます奮闘せられん事を望む。君も近き將來

に於ては陸上競技會の名ハードラーとしてう
たはれるであらう。C組の杉本君、スタート
感かつたけれどもダン／＼走つて二着で難な
く入選。D組の中村君初陣の事とて十分場馴
れのしないためか、實力を出す事が出来ず惜
しくも敗れた。フィールドでは圓盤投が始つて
ゐる。猛者近藤君は砲丸の練習で手首を挫い
た爲か練習の時の實力も出ず、非常にコンデ
イション感く残念にも萩商の長富君に榮冠を
譲つて近藤君は二等。長富君のレコード二十
九米八十五。新進富田君もよく頑張つたが惜
しくも落選。これと同時に走幅跳が始まる。
杉本、藤田、吉岡君よく頑張つたが日頃のレコ
ード出ず敗れたのは残念。トラックでは、百
米第二豫選のコールはかゝつた。杉本君ダン
／＼敵を追ひつめてゴールに入る。然し僅の
差でおいしいかな落選。次は八百米決勝。萩商
の神田君スタートするや、悠々落ちつきを見
せて走る。斷然トップを切つて走る。輕
くテープを切る。タイム二分十秒四。續いて
二百米第二豫選。B組では防中の雄福永君十
分余裕を見せてゴールイン。之に次いで千六
百米繼走豫選のコール。萩中のメンバーは五
島、飯田、富田、來島諸選手。頑張つてく

れ、死ぬまで頑張つてくれと勵げましながら
スタートへ送る。トップは五島君。萩中はB
組で鴻中、三次中、宇工、山師と組んだ。萩
中はインコースで都合はよい。砲丸一發、矢
の如くに飛び出す。アツ五島君は四番目を走
つてゐる。然しダン／＼敵に接近してゐる。
スタートの線から約五十米の邊で一人抜いて
又デリ／＼つめてゐる。吾々はもう夢中にな
つて我を忘れてゐる。アツ又一人抜いてトッ
プを走つてゐる敵に肉迫しようとした刹那、
あゝバトンをは五島君の手から落ちた。五島君
はバトンを落して約十米位走つて後へ引き返
し、又バトンを拾つて走つた。然しもうおそ
かつた。あゝ悲壯、々々。天は何故かくまで
して吾々を不運に導くのか。吾々は唯天を恨
むの他はないのである。然し四君ともの奮闘
を深く感謝す。續いて午後一時からトラック
では百米決勝。防中の雄福永君悠々一着。フ
ィールドでは之と同時に槍投の決勝。これは殆
ど山師の一人舞臺である。萩中は之の練習は
しないため棄権。山師の石井君斷然一等を獲
得す。これは先日甲子園に於ける西日本中等
學校陸上競技大會で五十二米五十投げて新記
録を作つた猛者である。投げる投げる、槍は

尾を引いて飛んで行く。そのフォームの鮮々
さ。二等三等とも山師が占む。三段跳では遠
征軍陸手中學の豪者古田君十三米十五飛んで
悠々一等。吾が杉本君自重して飛び十二米六
十一飛んで三等で貴重な二點獲得す。次で千
五百米決勝。田中君は豫選に入選したけれど
も五千米に力を注ぐために之は棄権す。次は
二百米決勝。山中の藤本君鮮かなフォームで
走る。軽くゴールに入る。續いて低障礙決勝。
杉本君自重して走つたけれどもその功もなく
遂に落選。萩商の右田君悠々テープを切る。
タイム二十七秒五。萩商の立野君これに續く
あゝ天勢はほゞ決した。山師、萩商が斷然優
勢である。それに引きかへ萩中の成績を見よ
今までの得點値に六點のみ。時にフィールドで
は棒高跳の白熱戦。中村、來島兩君よく奮闘
したけれども遂に敗れた。山崎君初陣の意氣
物凄く三米十、二十は難なく飛ぶ。強敵萩商
の右田君、陸手中の池田君を見事蹴落して、
山師の佐伯君との血と熱との肉弾戦だ。敵も
さるもの、先日の甲子園に於ける西日本中等
學校陸上競技大會に二等の榮冠を勝ち得た猛
者だ。山崎君自重して飛ぶ。バーは三米三十
へ。最初が山崎君だ。これは我々にとつては

少し不利だつた。「萩中山崎君」コールと共に
に勇躍して出る。觀衆はかたづを存んで見守
つてゐる。私は目を閉ちて神に祈つた。君の
必勝を。山崎君ゴールをしっかりとぎつて走
り出した。アレ飛んだ。バーは依然としてか
ゝつてゐる。觀衆はわつ／＼ばかり感激の聲を
上げる。我々は狂氣亂舞。次は佐伯君、落つ
て出て行く。我々は手に汗を握つて見守つ
てゐる。アツ飛んだ。これも見事オーバーす。
バーは少し上げられた。山崎君は落ち着いて
飛んだけれども残念ながら失敗。佐伯君もか
ゝる。バーは又三米三〇に下された。山崎君
は少しあせり氣味で飛び惜くもかゝつた。佐
伯君は鮮なフォームで飛び越し遂に榮冠は君
の頭上に歸した。山崎君は破れたとは云へ、
充分敵に肉迫して敵の心膽を折る寒からしめ
た。來るべき秋の大會の必勝を祈る。次は大
會の最後をかざる華千六百米リレーだ。選抜
チームはウオーミングの後それ／＼スタート
につく砲丸一發一着に彈丸の如く飛び出した
走る／＼皆物凄いスピードだ。萩商が斷然優
勢だ。萩商神田君の力走。敵ながら天晴れな
ものだ。遂に榮ある榮冠は萩商の手に。結局
一等三八點山口師範、二等三七點萩商業、三

等二〇點陸手中學、……之に對して我々は
六等九點。あゝ戦は終れり、萬事休す。何の
顔あつて歸られようか。天は何故かくまで我
々に不運を與へるのだらうか。願くば幾年か
連勝し陸の王者の名をなせし萩中黄金時代に
復すべくます／＼奮闘努力せられんことを。
最後に先輩諸兄の熱誠なる御援助を感謝す。
(吉崎生)
荷同日の決勝記録並びに本校出場選手姓名
を掲ぐ。
トラック
百 米 十一秒三 福永(防府中)
二百 米 二十秒九 藤本(山口中)
八百 米 二分十秒四 神田(萩商)
千五百 米 四分三十四秒六 増岡(三次中)
五千米 十七分四十二秒一 村田(宇部工)
低障礙 二十七秒五 右田(萩商)
千六百米リレー 三分四十六秒五 萩商チーム
フィールド
砲丸投 十一米六十七 長富(萩商)
圓盤投 二十九米八十五 長富(萩商)
槍投 四十七米九十四 石井(山師)
幅跳 六米五十四 古田(陸手中)
高跳 一米七三 小田(三次中)

三段跳 十三米十五 古田(陸手中)
棒高跳 三米三十 佐伯(山師)
本校出場選手姓名
百 米 杉本等 辻野三郎 吉岡健
二百 米 杉本等 辻野三郎 吉岡健
八百 米 吉村彌太郎 中村太三夫
千五百 米 吉村彌太郎 田中猛夫 中
村太三夫
二百米低障礙 杉本等 中村正四郎 吉岡健
千六百リレー 飯田純祐 五島正一 來島
敏夫 富田義治
走幅跳 藤田武亮 杉本等 吉岡健
走高跳 藤田武亮 中村善一 杉本等
三段跳 飯田純祐 杉本等 吉岡健
棒高跳 山崎義正 中村正四郎 來
島敏夫
砲丸投 近藤信一 杉本等 富田義治
圓盤投 近藤信一 杉本等 富田義治
槍投 棄権
第二回 萩商業學校 對抗陸上競技大會
萩聯合青年團
昭和六年六月二十一日。その日我等が持
一二七

ちに待てる第一回藤野中、商、青の對抗陸上競技大会の日だ。本校六百の若人は今日こそ聲のあらん限りの應援をせんとて勇み立ち、選手を擁して堂々萩商業学校グラウンドに参込む。暫時休息の後選手入場式、壯且つ厳なる「君が代」二唱の後訓話等ありて愈戦の幕は百米第一競選によつて切落された。時將に午後一時、グラウンドは萩中應援團、萩商應援團及び一般觀衆で人の山だ。黒山だ！ A組の辻野君連日の不快のため日頃の實力もあらはれず、しかし二着にて輕く入選、一着は青年の來島君、B組にては同じく青年の大田君一着、中學校よりは杉本、吉岡の二君を出せしもコンデション悪く惜しくも落選。之と共に内では砲丸投と走高跳の眞最中。皆よく投げる、跳ぶ、觀衆は潮が上にも熱狂して來た。砲丸では萩商の巨豪長富君最後の一投げにて十二米五十二と云ふレコードにて一等、中學の近藤君、五等にて最初の一着を獲得した。ハイジャンプ。之は追憶するだにも血湧き肉おどる如きはなやかなゲームであつた。バーは今や一米五十五、萩中の四人皆あさやかにオーバー。この頃よりゴツリ／＼稍天候がややしくなつて來た。バーは六十に、中村

杉本君共に頑張りしも落ちた。しかし見よ、田中、藤田の兩君が居るぞ。次は六十七、なれどさしもの老練藤田君も踏切り悪くオーバー成らず、之を越せしもの僅に二人、一人は彼の萩商の重鎮三好君、他の一人は我等が新進田中君、共に飛ぶは／＼まるで羽が生えた様だ。三好君が飛べば、北方のグラウンドでは「指月山上……」の萩商の應援歌の響、田中君またもひらりと越せば、萩中也負けず劣らず「指月の櫻花咲きて……」を吟出す。今や人々の目が皆唯バーにのみそゝがれてゐる。かくしてバーは一米七十三を共に飛びて縣體のレコードを破つて觀衆をアツと云はす。外では千五百米決勝、之に我校の一人も入着せざりしは残念至極。商業一、二、三等をつゞけて鼻息荒し。次はローハードル競選、萩中杉本、吉岡兩君共によく頑張りて輕く入選、内では早や圓盤のコールがかゝつた。此の春の第六回近縣中等陸上競技大会に於て萩商長富君のために惜敗せし近藤君の復讐なるか又長富君の返討なるかは我等の興味を中心であつたが、遂に近藤君の復讐功を奏して一等、しかも縣體のレコードを破ること三、四十、即ち三〇米八十五なり、これより前に、一萬米

のスタートは勇ましくも切られた。飛ぶが如くグラウンドより出た彼等、果して榮冠は誰の手に？ 次は四百米競選。この頃降りしける雨にもかゝはらず、我が熱誠の應援團は聲をかざして聲援々々又聲援。此を見ては感涙を催さざるはなかつた。我が石光君之によく頑張りて入選、フキドでは走高跳、これこそ我等が得意の十八番、杉本、有田兩君共によく頑張りて一、二等で九點をかせぐ。次は百米決勝。一着は青年の來島君。辻野君よく頑張りて三着にして三點を獲得。次は二百米ローハードル決勝、一着は萩商の右田君にして萩中の吉岡君又よく彼について二着となり杉本君四着となる。アツ一萬米が戻つた、あゝやつぱり一着は青年の新見君、萩中の吉村君よく五着まで頑張りつた。次は四百米決勝、萩商田中君一着となり、我が石光君遂に四着となる。次は我等が期待せる棒高跳、山崎君よく頑張りしも僅か五厘の差で三等となりしは残念至極、一等は萩商の右田君と青年の大田君にてレコードは三米五十で縣體と同レコードであつた。來島君又五等にて一點をかせぐ。最後に残つたは最も期待を集めた八百米リレー、雨もすつかりあがつて觀衆は潮が上にも

熱中して來た。スタートは切られた、あつちんぬるかな彼の有名なスタート杉本君もこの度は失敗つたか大いに悪い。皆接戦だ／＼接戦を離れて何のこのゲームが見られよう。勝つたり負けたり大熱戦にて人々に手に汗を握らしむ、彼方からも此方からもヤンヤ／＼の大聲援だ、唯走る人と聲のみ、バトンはセカンドの石光君へ、しかし練習不足の爲か少しタツチ悪くして稍おくれしも力走々をバトンはサードへ！ 吉岡君大いに頑張りて走る／＼又もや少しおくれ遂にバトンはラストの辻野君に！ 萩中健兒六百のハートは皆彼が足に懸る耳、又スビッドだ、速い／＼。この時萩商もその重鎮田中君を置いて走る、彼も速いが辻野君も速い、アツ抜くぞ／＼／＼／＼迫るその速さ、しかし己なる競選にカーブにさしかゝつたのは残念、カーブを出れば又スビッドだ／＼又もや距離は迫る／＼目に見えて、アツ又抜くぞ／＼と思ふ途端轟然一發遂に旗は萩商に、嗚呼惜しかつた、實に惜しかつた。ゴールがもう十米も長ければ必ずや抜かましものを！ 然しいくらこんな惜んでも後の祭だ、又來年に於いて必ずや正と熱とを以てその仇を報すべきが敗北せる戦士

の務めではないか。臥薪嘗膽來年こそはきつと彼を敗たずんばおかぬぞ、見よ我等の血涙を！ 最後に先輩諸兄の懇切なる御指導を感謝すると共に併せて本校六百の健男兒が降雨にかゝらず絶大なる御聲援を下されしを厚く謝し益々今後斯道に精進されんことを望む。猶次に本大会記録並びに得點等を左に掲げん。(T.O記)

種別	100m	400m	1500m	10000m	LH 200m	砲丸	圓盤
中	3	2	0	1	6	1	6
商	3	12	13	3	6	7	7
青	9	1	2	11	3	7	2

本大会記録及び縣體レコード比較

順位	合計	走	走	走	走	走	走
3	42	3	4	9	7	1	1
1	66	5	4	1	1	1	1
2	49	1	6	1	1	1	1

本大会 縣大會

二百米	十一秒八	太田(青)	十一秒二
四百米	二十八秒二	右田(商)	二十七秒二
八百米	五十七秒六	田中(商)	五十四秒六
一千五百米	四分四十五秒四	長澄(商)	四分三十四秒四
一萬米	廿九分十四秒二	滿岡(青)	
砲丸	九十二米五十二	長富(商)	十三米〇三
圓盤	盤三十三米八十五	近藤(中)	三十米五十五
走	高五米九十七	三好(商)	一米七十
走	高五米九十七	杉本(中)	六米五十五
棒高	高三米五十	右田(商)	三米五十
個人優勝者	1 大田博邦(青)十八點二分一	萩商チーム	
	2 右田義久(商)九點二分一	萩商レコードを破りしもの	

山口縣體育協會主催第一回縣下
中等學校體育大會

吾々は諸先生並に生徒諸君の熱誠なる御聲援を受けて、九日午前八時半頃必勝を期して我等のオリムピア岡城の地へ向つた。吾々が日頃雨に日に鍛へた實力を發揮すべき時は来た。十時半頃山口に着き、午後三時頃高商グラウンドに行き軽い練習をした。其の日は風が少し強く明日の大会が氣づかされた。明朝は晴い中から起きて選手一同野田神社豊榮神社に参拜して今日の勝利を祈る。

午前八時から開かれた。集る戦士三十二校四百二十八名、たくましい肉體を思ひ思ひのユニホームに包んで晴れ渡る陽光のもとに高商グラウンドに整列し盛大な入場式が舉行され白石幹事長の開會の辭について國歌合唱、昨年の優勝、陸上競技山口師範、排球山口師範、龍球山口中からそれぞれ優勝旗を返還し、百米第一豫選に依つていよいよ大會の幕は切つて落された。繰りかへされる豫選、決勝に新記録も見られて恵まれた秋日和の土曜日は市民をスポーツと呼んだ。

【トピックの部】

百米第一豫選はA組からD組まで五組あつ

同じく四着で落選。これは二着までが入選である。千五百米豫選も同じく四組に分れ、田中猛君がB組、中村太君がD組であつた。田中君はよく頑張つたが前夜の睡眠不足の爲か五着で遂に落選、中村君は非常な奮闘の結果遂に二着で入選、三着との距離は約五十米位あつた。之は二着までが入選。決勝に於ては中村君の非常な奮闘の甲斐もなく残念ながら等に入らなかつた。五千米は約三十人あまりの選手が出場してゐた。萩中からは吉村、中村兩君が出場。中村君は千五百米の豫選、決勝で非常に疲れてゐたため最後まで奮闘する事が出来なかつた事は同情にたへぬ。吉村君は特に五千米だけで我々は多大の期待をかけてゐた。吉村君はコンディションよく第一グループをばなれず調子よく走つてゐた。ゴールまで三百米の處までは五番目走つてゐたがラストよくきき遂に四着で貴重な三點を獲得した。吉村君が最後まで奮闘されたことを深く感謝する次第である。ローハートル第一豫選はA組から五組まで五組に分れ、吉岡君がA組、中村正君がC組であつた。A組では吉岡君は強敵萩商の右田君と組んだ。吉岡君は四着を斷然リードして三着で早くに入選。

て、萩中の辻野君がA組、吉岡君がC組であつたが、吉岡君は後のハートル、四百米リレーに力を注ぐため棄權した。百米第一豫選は三着まで入選。A組では辻野君は軽く二着で入選。B組では山師の藤井君が十一秒一と云ふ新記録を作つた。C組では防中の福永君が又々十一秒Fの驚くべき新記録を作つた。第二豫選に於ては辻野君は強敵福永君と組んで大接戦の後遂に二着で入選。第二豫選は二着まで入選である。辻野君は此の時は非常な苦戦で我々は落選ではないかと非常に心配したが入選の報を聞いて、一同の意氣はいやが上にも上つた。いよいよ決勝のコールはかゝつた。決勝ではより抜きばかりで非常に苦戦である。是は六着まで入選。號砲と同時にみんな殆ど一直線になつて走つてゐた。それでゴールインした時には一着、二着の區別がつかなくなかつた。報告に依つて辻野君が四着と云ふことを知つた。この時の辻野君のレコードは十一秒三であつた。これで貴重な三點を獲得一同の意氣ます／＼上る。此の時防中の福永君は又も十一秒Fの新記録を作つて第一着を占めた。敵ながら天晴れなものである。次は二百米第一豫選で之も五組に分れ、吾校の出

C組では中村君は軽く一着で入選。之は三着までが入選である。D組では強敵宇工の近藤君は二十七秒Fの新記録を作つた。第二豫選に於ては吉岡君は萩商の右田君、宇工の近藤君、山師の長崎君等の強敵と組み、ゴール前四十米の處までは斷然入選の見込があつたが宇工の近藤のラストが非常によく出て、わづか胸一つの差で吉岡君は遂に破れた。中村君もよく奮闘したけれども四着で落選した。決勝に於ては強豪萩商右田君が他を斷然リードして二十六秒八のすばらしい大會新記録を作つた。千六百米リレー豫選は三組に分れ、二着まで入選である。萩中チームは來島君、飯田君、五島君、石光君の順序でB組であつたが、柳中天津二チームが棄權し、宇工チーム、山中チームの強敵と三巴戦である。來島君はスタート悪く三番目走つてゐたがラストよくきき後六十米の處で斷然トップをおさへてバトンには飯田君に渡された。飯田君は少し腎臓病のきみがあつたため、思ふ様に走れず最後まで奮闘したが實力を發揮する事が出来なかつたのは同情に堪へぬ次第である。次でバトンは五島君を経て石光君に渡され、石光君はよく頑張つてダン／＼ちやめたがゴ

場選手は同じく辻野君がA組、藤田君がC組であつたが藤田君はすぐ後に走高飛があるののでやむなく棄權した。A組では辻野君は三着でらくに入選。宇工の近藤君は二十三秒四の新記録を作つて一着を占めた。B組では福永君が又も二三秒Fのすばらしい新記録を作つた。第二豫選に於ては辻野君は二着で軽く入選。決勝では大接戦の後殆んどみんな同時にゴールインしたが辻野君は三着で又も四點を獲得した。福永君は又々二三秒Fのレコードであつた。此の時の辻野君のタイムは二三秒六で實に見上げたものです。辻野君の奮闘は實に目撃しいものであつた。四百米第一豫選は五組に分れ、萩中は五島君がC組、石光君がD組であつた。五島君は非常によく頑張つたのだけれども此の組は強敵さろひだつたので遂に落選した。石光君はゴール前五十米の所までは殆ど勝負はなかつたが、君のラストへビ―で他をグ／＼抜いて遂に三着で入選。是も三着までが入選。第二豫選では石光君は非常に奮闘したが落選したのは残念である。八百米豫選はA組からD組まで四組に分れ、萩中來島君がA組、中村君がC組であつた、來島君はよく頑張つたが四着で落選。中村君も

天は吾々に大きな不幸を與へたのだらうか。必ず入選すると思つて期待をかけてゐた四百米リレーも魔の穴のために破れてしまつた。これはいつまでも／＼吾々の脳裡から決してはなれないであらう。天運とあきらめやうとしてもあきらめきれぬ程である。

トラックの部の得點は合計十點である。一般に今度はトラックの方はフキルドに比してあまり振はなかつたので今後フキルドと共に令一段の進歩を望む次第である。(吉崎生)

【フキルドの部】

今春以來我がフキルドの方は非常によく今秋の體育大會こそはフキルドのみにても優勝せんものと勇んで出馬したのですが、諸君の期待に反して遂に三等となつたのは實に遺憾千萬の次第であります。大會前日の夜、ひそかに起きて見ますと皆よく眠入つてゐる様でしたので朝の來るのを待ちました。愈々宿を出立となれば選手諸士の顔色凛として、その偉大なる責任と名譽とにあくまで誓を立てた譯であります。グラウンドにはもう續々各校の代表選手並に見物人がつめかけてゐました。見るからにバツとする様なグラウンド一點の暑も留めぬ十月の秋の空、これ絶好のスポー

ツ日和でなくして何であらう。「サア行かう」と共にアップして仕舞つた頃トーンと打上つてバリ／＼と開ける煙火に愈開會式もはじまつた。フキルド部として先づあるのは砲丸投であつたので、我が近藤君と富田君とはしきりにその仕度に取りかゝつた。フキリストコールに應じて勇んで控所より出て行つて見るともう七八人先客があつて目下練習中だつたがこれは慈目かしの皆よく投げる様なのは一人も居ない。所へ來たのが我が近藤君と富田君だ。共によく投げるは投げるは、近藤君の如き度毎に十一米軽く越しておそれ他をおどろかしめたであらう。一通りの練習も全部すんでいよいよ試合はこれからだ。この時丁度トラックでは我が辻野君が百米の豫選に乗つて我々を心強からしめた。さらばと近藤君エイツと投げたは十一米半以上。これ／＼占め／＼と思つてゐると彼の巨豪蘇商の長富君ノリと出て來てなげたがまだ十センチばかり我に勝あり。而して近藤君今日は十二米はシユアだといつて喜んでゐる。此の分だと砲丸は優勝だなども思つたが、彼長富君もさるもの次には十二米をかるく越してしまつた。富田君も若年ながら／＼投げた

が惜しくもベスミユツクスに打ちつてしまつた。いよいよ／＼ベストもとられて六人が縮ぎを削つて戦つたが結構十二米を越へたのが二人で次が我が近藤君我も十二米を越さんものとエイツとラストの頑張り／＼越えたとと思つたら惜しいことには手が地に付いて遂にフキリストコールに我は最初に四點をいれて意氣揚々と引揚げた。試みに長富君のレコードは十二米三十二で次の長崎君(山師)は十二米〇六六だつた。

この頃より稍微風がおそひだして走高跳としてはあまり好い風ではなかつた。誰も彼も皆膝下の體育の粹を表はしてヒラ／＼胡蝶のごとく跳んでのける。これには彼のジャムバー蘇商の三好君も参加してゐる。愈／＼は一米六十五となつた。我が藤田君トツプを切つて跳びしよりこれを跳びしもの僅々五人ある。バーは又七十へと進む。苦心慘情誰も跳ぶ能はずと見たが最後に残つた大中の杉村君ヒラリとばかり跳んでしまつた。ワッ／＼と上る喚聲大中の諸士大歡喜と共に彼は遂に一等の榮譽を擲つた。次は二等争ひ。我が藤田君と蘇商の三好君とだ。遺憾なことには遂に我は彼にまけた。が我は愈々々のベストを盡したのだ。かくて走高跳には藤田君三等に四點を稼いだわけだ。此の回我が萩中競技部のナムバーワン田中君は哀れ落選した。然し何が彼をさうさせたか？彼は怖氣付いてゐたことに事實だつた。彼が此夏萩に於て對抗試合の時に一米七十三と云ふ大記録を作つたと共に彼に對する一般生徒よりの喝望も高まつたわけだ。即ち彼もその責任は偉大となつた。尤も爲に不斷の努力ある練習をしつゝけた。尤も

次は我等の期待するところ多き三段跳である。本校よりの出場選手は巨田中誠君と老練杉本君だ。田中君は此大會一ヶ月前より初めばかりの新人、杉本君は夏休以來腰を痛めて非常に我々に氣づかした試合にビクともせぬ彼、果して如何に活躍するかは非常なる問題であつた。愈々試合も初まつて先づ田中君十二米四十九をとんで完全にベストへの域内へ入つた。この時山師の堀君はもはや十三米を出し柳中の堀田君は十三米〇二五と云ふすばらしいものを出した。また山中の二人も共に十二米六十五を跳んでこれでベストは後一人をあますことになつた。杉本君が頑強つて／＼と念じてゐると大中や何らや

の者が飛ぶ飛ぶ。我こそとはずんでやつてゐるらしい。十二米四十四と云ふ聲がする、大中の者が飛んだのだすはこそ大變と杉本君にアルコールをぬるやら大騒ぎ。かくてこの一躍にと杉本君出た跳んだ。すぐ行つて見たアツ／＼十二米四十七、嗚呼遂に我が杉本君もベストに乗つたのだ。二人ともものつた。かくなる上はと杉本君跳ぶ毎に記録は上る上る。先づ七十を出し次は九十一、最後にウンと一つ頑張りも頑張つたり十三米三十一なり。なれど／＼天はあくまで我を守り給はざるか。これは遂にフキルドとなつた。のみならずまだしもこゝに特筆すべきは杉本君が此回に足を挫かしたのだつた。そして次に來る走幅跳に蘇商の已むなきに至つたことである。悔いても恨みでも飽きたらぬことは實に此のシーンなるか。一方田中君は其後どうも足の調子悪／＼遂に六等となつた。こゝに於て我々はまたもや五點を獲得した。この三段跳に於いて特に掲げべきは山師の堀君が十三米五四と云ふ記録を出して今までのレコード十三米五二を破つたことだ。

次は又非常に見物人の目を惹くハイジムである。本校の代表は藤田君と田中文君であ

る。この頃より稍微風がおそひだして走高跳としてはあまり好い風ではなかつた。誰も彼も皆膝下の體育の粹を表はしてヒラ／＼胡蝶のごとく跳んでのける。これには彼のジャムバー蘇商の三好君も参加してゐる。愈／＼は一米六十五となつた。我が藤田君トツプを切つて跳びしよりこれを跳びしもの僅々五人ある。バーは又七十へと進む。苦心慘情誰も跳ぶ能はずと見たが最後に残つた大中の杉村君ヒラリとばかり跳んでしまつた。ワッ／＼と上る喚聲大中の諸士大歡喜と共に彼は遂に一等の榮譽を擲つた。次は二等争ひ。我が藤田君と蘇商の三好君とだ。遺憾なことには遂に我は彼にまけた。が我は愈々々のベストを盡したのだ。かくて走高跳には藤田君三等に四點を稼いだわけだ。此の回我が萩中競技部のナムバーワン田中君は哀れ落選した。然し何が彼をさうさせたか？彼は怖氣付いてゐたことに事實だつた。彼が此夏萩に於て對抗試合の時に一米七十三と云ふ大記録を作つたと共に彼に對する一般生徒よりの喝望も高まつたわけだ。即ち彼もその責任は偉大となつた。尤も爲に不斷の努力ある練習をしつゝけた。尤も

どの選手も同じであるが。その彼が本校の偉大なる名譽をその左手に持ち生徒よりの喝望を右手に掲げて初舞臺、即ち彼の鴻城の一角に佇んだのである。責任！責任！嗚呼彼はこれがために遂に固くなつてしまつた。實際怖氣づいたのだ。他の何人も之を如何ともすべからざる程迄に。しかし遂に敗戦の憂き目を見た。これは彼が實力の衰へたるものではないのだ。何故ならば彼はその一週後又一米七三・五を跳んで本校のレコード及び縣體レコードをも一躍して居ればである。嗚呼敗れし彼の心情察するだにも一掬の涙も宜なることである。之と共に又彼敗れて友を失ひ孤軍我が校のためあらゆる限りのベストを盡して遂に四點も取留めた藤田君の功に對しては實に絶讃の外はない。是に我は敢て田中文行君のために辯護すると共に亦藤田武亮君の功を稱へるのである。

次は我が校の誇と共に他校をおのゝかすに足る間盤投だ。本校よりの出場選手は砲丸投と同じくキヤアデン近藤君並びに若年の富田君である。共に自信の於ける人だ。果して結果や如何に？まづ練習だ。投げも投げたり三十

愈々試合も初まつてベストを取ることになつた。三十米のラインを越える輩は近藤君一人だ。もう後の者は二十八米迄にとどくものも数人のみである。我が富田君も盛に活躍をなす。新進だがよく投げる。どうやらベストにのりさうだ。この時大中の者がまた投げた。あッ！富田君がおきへられたかなどうかなと我々の心は不安でならない。實際計つて見ればどつちがどつちだか分らないからである。愈々計られることになつた。私は目をつぶつた。と近藤君が「やつた」と云ふ。目をひらいて見れば富田君の方が二十センチばかり勝つてゐる。占め／＼これが入選だ。又ベストに残つた六人の戦だ。近藤君がなげる度に係員もずつと退く。投げ終ると又前へ出ると云つた様な具合で遂に近藤君三十一米六十九と云ふ従来のレコードを一米以上も破つて一等に、富田君は六等になつてこゝでまたスコアスタンドの真中とされる所になつて七點と書しめた。嗚呼彼がかくレコードを破つたのも皆一に不斷の努力練習と實力である。今更ながらこの努力と實力の力の偉大さにおどろかされる。

次は棒高跳である。山崎君と中村君とが本校を代表して出た。此のゲームには本縣にあらにちたに数人群雄が割據してゐる、無論我々の二人もこの内だが。追風に恵まれて試合は益々進む。三十米十頃まではパスする人が多かつた。しかし我選手は着々一ツづつ飛び越して来た。尤もこゝのパスとは跳ばずして己が自信にまかして跳んだことにするのを云ふのである。中村君は踏切の調子思はしからず三米までは滑ぎつけたがその上は無理であつた。で三米十を越えたものはパスしたものをよせて五人になつた。バーはいよいよ二十に上る。下商の岡野君先づ之をおとせば我商の田村君は之を跳んでしまひ、我が山崎君も師範の佐伯君も共に軽く跳んでしまつた。こゝまでパスして来た右田君(我商)二十位はと跳んだが仲々思ふ様にならず遂にオミットとなつてバーは又三十に上る。田村君は之には敵すべくもなく屈して仕まつた。山崎君は二度目に見事にパスしてしまつた。また十ほど上げて四十。山崎第一回目は踏切に失敗し、第二回は調子よく越したと思はれたが手が残つて遂にバーをおとしてしまつた。佐伯君も二回とも失敗して共に残すは後一回のみ。山崎君が

ルを上げて出た！アッ失敗つた。つきこみの調子が悪かつたのだ。四十の實力は充分あるになあ！と泣言も無駄となつた。後を向いて見れば佐伯君ハタとバーを見つめて居る。走つた、跳び越した。嗚呼已むる哉。次は五六等の争だ。中村君遂にこれに獲ち得て五等こゝに我校は又七點を加へたのである。後に残るはブロード唯一つだ。此時二等我商との差わずかに七點だ。嗚呼此の回に我中彼を抑へるか。それとも彼二等を持ち堪へるか。控所にかへれば皆躍氣となつて「頼む！頼む！」と聲援してくれる。嗚呼此の時心こそ眞に忘れ得ぬものだ。我校からは田中文君と杉本君の二人だ。走幅跳は一級縣下に大して強いのは居らない。嗚呼此の回に七點を取り得るか？否か？ブロードの王者杉本等君先期三段跳の際足を痛めてより無念の涙を吞んで天の一角を睨んでゐる。私共手をかへ品をかへあらゆる手段で彼にすゝめて出て来れる様大いに努めたが依然彼は無言だ。最後つ一人彼に一寸でもよいからやつてくれと願つたが此の時彼は何と云つたか「俺も出られは出るのだがなあ！」と。キラリ彼の眼には光るものがあつた。嗚呼此の言を聞いた時私も

ハツと行つまる思がした。そして同情した。共に無言である。彼も萩中健児である。些の事に屈する筈はない。彼も後七點で二等になれと云ふ位の觀念は十分にある。しかし今の彼としては無念の涙をしのげねばならぬのだ。彼もあきらめた。と共に我等も花環を断念した。實に残念なことである。かくなる上は二等との差をよし三等としても縮めんものと皆一齊に田中文行君に依頼す。彼の責任は出立前にくらべて三倍したわけだ。先づ練習を初めた。少し踏切の調子が悪いらしい。しかし今更何ともしかたないのである。愈々試合も開始せられることになつて先づ跳んだ。六米は軽く出たが審判は飽くまで我々に皮肉だ。即「駄目！」と。嗚呼此の回ファウルだ。今度こそはと跳んだが、踏切前僅かの所で足が合はず一寸小股になつて軽く跳んだのが五米七十五、未だこれではベストにはのらない。い／＼全責務全名譽は此度の一回に頼ることになつた。非常なる決意を以て走つて出た。而して跳んだ。六米はまたかゝく越したぞと思つた瞬間、またしても審判の口から漏れたものは唯この一躍を無にせる「駄目！」なる一言だ。嗚呼是非なし／＼。我等は遂に敗れた

黄色の洋服を着て立てるものしげしげ然。かくて試合は閉ぢられたしかも皮肉！時のレコード。先に三段に新記録を出した山師の堀君にして六米五十一であつた。かくて我々は三等となつたがフキルド部としては合計二十七點の得點を占め山師と同點にしてしかも我にはブロード不運のハンディキヤツプがあることを一言告げて置きます。

愈々試合もブロードによつて幕を閉ぢられ閉會式だ。山師、大中、萩中等の順にずらり並んだ参加校選手連或は榮冠の夢に酔ひし誇り顔或は敗北の憂目を見し涙顔、悲喜こもごも至つて萬場嘆一せず會長より優勝旗は山口師範の手に授與されたのである。優勝校山口師範の得點は七十九點で次我商は四十四點、次は本校にて三十七點。四等は宇部工業で二十八點の順である。山師がかくの如き豫想外の得點をなしたことは實に諸絶の外はないが我等はその裏にいかなる努力ありしかを考へて見なければならぬ。此の日の試合状況をつくづく見るに彼等には偉大なる自覺と一致が俱つてゐた様である。かくあればこそ七十九點さへも取り得たのだ。我等萩中生徒は今後我は萩中健児なりの自覺を保ち殊に本校を代

表せる選手はその選手たる自覺をしつかりと保持して偉大なる本校の名譽のために益々精進せねばなりません。最後にこの優勝し得ざりし恥を來年度に必ずや己の本分を盡して見せまい次第であります。此に一言記して以て第一回縣體の状況を指示すると共に後輩諸君に告げて置きます。 T O 生

本大會の各種目記録及び本校出場選手氏名を掲ぐ。

種目	選手	記録
一百米	福永 功(防府中學)	十一秒P(新)
二百米	福永 功(防府中學)	二十三秒P(新)
四百米	松岡 博(宇部工業)	五十五秒六
八百米	堀田新次(大津中學)	二分十四秒四
千五百米	堀田新次(大津中學)	四分四十三秒四
五千米	西田龜雄(宇部工業)	十七分四十三秒六
ローハートル	松永 壽(豊浦中學)	二十六秒八(新)
千六百米リレー	右田義久(我商)	三分五十二秒八
	山口師範チーム	

四百米リレー	四十六秒四	山口師範チーム
フイルド		
砲丸投	十二米三十二	長富 (元萩商業)
圓盤投	三十一米六十九(新)	近藤信一(萩中學)
三段跳	十三米五十四(新)	堀 亮雄(山口師範)
走幅跳	六米五十一	堀 亮雄(山口師範)
走高飛	一米七十八	杉村 (大津中學)
棒高飛	三米四十	佐伯 (山口師範)
總得點		
一等	山口師範	六十七點
二等	萩商業	四十四點
三等	萩中學	三十七點
四等	宇部工業	二十八點
以下省略		
本校出場選手		
百米	辻野三郎	吉岡 健
二百米	藤田武亮	辻野三郎
四百米	石光吉月	五島正一
八百米	中村善一	來島敏夫
千五百米	田中猛夫	中村太三夫

五千米	吉村彌太郎	中村太三夫
ローハーフ	吉岡 健	中村正四郎
四百米リレー	杉本 等	石光吉月
	辻野三郎	吉岡 健
	藤田武亮(補)	
千六百米リレー	飯田純祐	石光吉月
	五島正一	來島敏夫
	富田義治(補)	
砲丸投	近藤信一	富田義治
圓盤投	近藤信一	富田義治
走幅跳	田中文行	杉本 等
三段跳	田中 斌	杉本 等
走高飛	藤田武亮	田中文行
棒高飛	山崎正義	中村正四郎

籠球部

五月二十四日、山口高商主催の關西中等學校籠球選手権大會へ我々は参加した、我メンバは大黒柱竹林君を失つて意氣銷沈の體たらくであつたが、先輩松浦さんの熱心なるコーチに依つて辛うじて一脈の元氣を持續してゐた。試合はトーナメント式に依り舉行され、

た、我々は不戦一勝で直にセミ、ファイナルに居残つた。で、徳山中學と雄雄を決する事となり遂に熱戦四十分に我々は退く己むなきに至つた、其敗因を考ふるに第一に體力の相違である、第二に味方の元氣のない事である、第三試合経験の貧弱である、以上の三缺點を改めさへすれば相當の成果を挙げ得る事と確信する。次に當日の試合中比較的印象を鮮明に刻みつけた山中對山師、山中對徳中の試合概観を記する事は決して無駄であるまいと思ふ。

山中對山師の試合は觀衆に最上の興味を與へた、其は單に地元チームなる理由である許りでなく、昨年より急に興味を出した山中が連續の弱者たりし山師を再破するか、古豪山師果して昨秋の雪辱をなし得るか、興味はかつて此一戦にあつた、正に此一戦は事實上の優勝戦である、ゲームは最初より白熱的血戰を演じた、兩軍は互に得點をし華かなシイソーゲームを展開した、巧妙にしてスピードあるパスワーク、物凄いダツシュ、飛鳥の如きフォロアアップ、沈黙にしてすばやきシュートは共に兩軍の長所である。血戰數十分兩軍相持して譲らなかつたが、パスワークに於

て山中に一日の長があつたのか、勝利の神は山師を見放した。實際勝敗の豫想はゲーム終了の數分前迄は全く附かず、此經過で行けば必ずエキストラ、ピリオッドとなるであらうとは誰も考へてゐた、油斷はゲームには絕對禁物だ、殊に五人の者が秩序立つた行動をする此ゲームに於ては、一人のスラングが全メンバーに對する影響は甚大なる事に注目するがよい。

山中對徳中戦は最初から山中に勝味があつた、とは言へ、徳中も朝來若松中、萩中を撃退しあはよくば山中に一泡吹かせんとする新進氣鋭のチームである、殊に頼みは巨額編みである事である、此圓熟チームと完結リチームとの試合は前の山中對山師戦程の興奮を與へない迄も、必や一脈の新鮮さを與へる事と思つてゐた。前半——徳中ロングシュートをしばしば試みしも極まらず、徒に好機を逸するのみ、此間山中確實に得點し餘々に差を大きくす。後半——此儘山中順調に勝ち行くものと思はれたが、俄然波瀾は山中の堅陣に起つた、同軍の至寶センターがオミツトされ此に乗じて徳中奮起して、次第に山中に肉迫したが前半の損失は徳中に致命傷を與へた、

必死の回復策も如何せん、遂に三點の差を以て敗れた、さるにても徳中の粘り強さよ、彼前半に既に再起不能の立場になつたにも拘はらず、飽く迄徳中精神を發揮して大勇山中をして一驚せしめたのは眞に偉勳である、しかも彼等オミツトの爲、人員を交代する事前後三回、遂に玉碎して死を免じた……。

右は大體を述べたに過ぎない、状況に幾分の相違ありとしても、吾人は其を敗れすべき場合でない、宜しく今後の善處に腐心すべきである。

次に來るべきものは秋の大會である、春の成績は校友六百に對して合す頗がない、石にかぎりついても負けてはならぬ秋の大會は刻々迫つて來る、不安、焦心、奮起、其等のものが走馬燈の如く心中を廻る。

因に當時のメンバーを掲げる、

F (フォワード) 河野希一、田中政樹、友信長七、中原芳美、大津、蒲 一元

G (ガード) 中村清一、林 久雄

C 小倉英一、落合一郎、吉見正治

山口縣教育會主催體育大會

スポーツ、スピリットの精華美を誇る縣體育大會は、十月十日秋色酣なる鴻城の一角高商グラウンドに於ていとも盛大に開始された此日紺青の空愈高く、白雲頻りに去來して西北の風や強く、時にグラウンドの砂を揚ぐる事があつた、吾籠球部は六百の校友の熱烈な應援に奮ひ立ち、必勝を期しつゝ場内に乗り込んだ、参加校十二校、其を二組に分けてA、B、兩コートに於て覇權を争ひ最後に勝ち殘つた二者が優勝戦をする方法——トーナメント式である。

愈九時半よりAコートにて縣下の新進防府商業と組むだ、以下戦況の大體を述べて見よう。前半——吾チーム最初より敵を呑んでかゝつた爲か頗る戦ひ好かつた、ポイント、メーカー水野君、闘士竹林君等の活躍物さまじく、十五點を得る、是に反して敵に僅に六點を許したのみ。後半——相變はらず吾軍リードしつゞけて行く、此時は大津君大に好調子、中村君亦頗るよく、若延乍ら、腹せず戦ひ事は負するに餘りある、兩君の自重を祈る、得點我は十四點彼は六點を得、茲に二十九對十の大差を以て防府を一蹴した。約一時

間の休みの後強敵徳中と対峙した、時に十一時半彼は縣下の宿舎我怨敵である、技は漸く荒削りの過程を通過して、正に圓熟の技に至らんとしつゝあるチームである、よし一敗地に墮みゆとも、質實剛健なる萩中健兒の意氣を示さむと、雄々しくも戦ひに臨んだ。

前半——彼バスタークに於て將又フオローアツプに於て、體力に於て我より一日の長である、吾敵の急速なるアタックに悩まされる事多く、タイムアップに至る頃得點の差十四點に至り、憂色漸く吾に漂ふ。得點七對二十一後半——吾水野君に代ふるに落合君、中村君に代ふるに佐伯君を以てし、善戰防戦に努めたが及ばず得點は四對二十となり、總計十一對四十一にて、我二度彼の軍門に降る。

嗚呼我は破れた、然し乍ら來年がある、勝つも負けるも時の運である、要は今日の失敗を明日の成功の基とする事である、努力せよ。籃球部員よ、健に育てよ、萩中籃球部よ。

因みに出場人員は左の通りである、

- C 水野三郎、落合剛一郎
- F 河野希一、中村清一、蒲 一元
- G 竹林義雄、佐伯政治、大津敏祐

いて百米胸泳、二百米胸泳競選で落ちた土田君、今度こそはとばかり意氣込む、ズドン！サツと六名一時に水にもぐり込み浮き上れば其處には早白熱戦を演出し、互に遅れれば後かせじと力泳又力泳す、しかしあゝ見よ又も上田君は四等だ、三等迄入選に四等どころなるか、頑強れと聲援せしめ其の甲斐なく遂に落選？が聞け、天は正義の者に相し給ふ、三等の山中野村がオミットだ、君は大いに喜ぶ、無理からぬ事だ、で々々點數が一點取れる譯だ。

續いて四百米自由型競選、諺早君、藤本君田場、諺早君は又も悠々二着にて入選するも藤本君はコンデション悪く遂に落選。

愈午前中の大呼物二百米リレーとはなつた（兩リレーは長中兼權故直に決勝となる）萩中の顔ぶれは、トツ吉賀君、セカンド田中君、サード藤本君、ラスト諺早君の順であるラストコールの聲に應じて立ちたる四選手、死して後己むの意氣だ、が見よ敵陣の陣容を何れも一騎當千の武者揃ではないか、トツ吉賀を頭張れの聲に送られ各選手は皆スタートに着いた。どー……用意ズドン！サツとばかり飛込んだる六選手、互に此處を先途とば

吉見正次、玉木和彦

水 泳 部

第三回近縣中等學校水上競技大會

昭和六年六月十四、第三回近縣中等學校水上競技大會日は、山口高女プールに於て舉行された、出場校は三縣七校で我萩中も之に參加し、昨年の仇敵大島商船を破つた事は近頃痛快の致りである、即ち一等廣島縣の修道中學、二等山口師範、三等島根縣の濱田中學、四等本校、五等大島商船、六等山口中學、七等長府中學であつて、本校はあまり芳しからぬ成績ではあつたが何分選手も五名だし、練習も昨年比し天候不順なりし爲あまり出来なかつたやうな理由で、かゝる成績を得たのである、左に當日の我五選手の苦戦振を略記せん。

十四日午前九時、愈々百米第一競選により本大會の幕は切つて落された、本校から吉賀君出場し先幸をして良からしめんと頑張りたるも遂にタツチ一つの差で惜しくも落選。次は八百米競選、本校からは藤本君出場、A組で山師の古強者泉、八百米決勝で一等となり新

かり熱泳す、俄然萩中、商船、山中など覇を爭へば、すこし先を行く三校も又必死だ、幸萩中は四等で吉賀君歸れば田中君受けついで濱中の後を追ふ、商船も又さる者ぐんぐん萩中に肉迫し、遂に之を追越し、又山中も萩中を追ふ、つゞいて藤本君受けつぎ山中との差をすこし開いて歸る、ラスト諺早君商船を追ひたるも力及ばず、遂に五等となり四點を得るのみ。

午後は一時より百米決勝ありて後二百米胸泳決勝、此時プレスト界の至寶、山師藤尾君は三分フラット二百米と云ふ新記録を出して觀衆を驚かした。つゞいて二百米準決勝はコールされた、此頃から諺早君も段々疲が見えたりとよく戦ひて三着にて入選す。一つ置いて百米胸泳決勝となつた、各六選手はスタートにつく、號砲一發！間髪を入れず飛び出したる六選手、見れば藤尾はやはり凄く、遂に一等となる、土田君も善戰し六等で一點を取る、君はプレストには天分がある故益々奮勵し縣下吾天下に冠たらん事を希望す、又一つ置いて四百米自由型決勝、さすがに諺早君も疲勞の極に達し、側で見る目も氣の毒であつた。が生來負けぬ氣の君は、元氣を出してス

記録を出した、濱中の西田君なども組み、加ふるに二等迄の入選故ベストに乗る事不可能らしく見えたれど雄々しく出場すなれど三四米頃中止する事を餘儀なくせられたのであつた次で二百米胸泳、四年生土田君出場せしめ何分試合には馴れず、すこしあせり氣味であつた爲惜しくも落選。君をして初陣の功を爲さしめなかつたのは返す／＼も残念な事である。あゝ何時になつたら我等はベストへ入るのだらうか？

天は我等を見離れたのだらうか？否！見よ次は二百米競選ではないか、萩中水泳部唯一の健兒諺早君があるのを忘れはしまい……ラストコール、「オ、」と云つて起ちたる君の颯然たる姿を見て、我等は思はず歡呼の聲を擧げた。果せるかな號砲が鳴るや否や弦を離れた矢の如く、水煙をあげて飛び込んだ。抜く／＼、見る間に仙を腰して悠々一着にて歸つた、此處に於てか我等選手一同の意氣は大に擧る。C組の田中君は後に八百、二百兩リレーを控へてゐる事故、ウオーミングアップ變りに泳ぎし爲之は落選。

次は百米背泳競選、吉賀君出場し遂に山師下田をタツチ一つの差で抑へ、之も入選、續

ターゲットする、此處で又貴重な一點を得た、次は百米バツクの決勝だ、吉賀君元氣良くスタートして遂に前船藤本を抑へて三點を得、つゞいて諺早君の二百米決勝となり、又一點を得、斯くの如く我等は苦戦に苦戦を重ねて得た點だ、而して此等を合計すれば十三點、商船はと見れば九點だ、では勝つた？否！落選して見よ未だあと八百米リレーがある、これを彼等が弗給だ、彼等は一舉六點を得る事確實だ、而して我等は二點位しか入る見込はない、而らば同點だ、同點ならば負だ、だから山中を倒すより他道はない、山中を倒せば二點の勝だ、「頑強れ」「死して後己む」、あゝ今や我等選手の口から口へは固き誓の言葉がかはされた、我若し商船に破るれば何の顔かありて諸兄に見えんやだ……、約一時間後、夕風心持良げにプールの上を吹き渡る頃、本大會の棒尾を飾る八百米リレーはコールされた、と各校の選手は一勢にスタートに着き合圖の號砲を今や遅しと持ち構へる、と轟然一發！サツとあがる水煙、見よ、其處には早時ならぬ修羅の巷が展開されたではないか、「死して後己む」「山中はどうしても抑へる」と固く誓つた我等だ……。幸吉賀君

良く頭張り商船について歸つて来る、セカン
下田中君に譲れば元氣よく飛込む、其の時
山中は後から飛込みざま、ぐんぐん追いつき
アツと云ふ間に抜いてしまつた、しかし田中
君も必死だ、奮戦して山中との差約三四米で
歸つて来る、實によく頭張つて呉れたのだ、
藤本君受難ぐや猛烈と山中に肉迫す、フルス
ビードだ、見る間に山中を抜き商船を追ふ、
すると山中はもう戦ふ氣力が抜けたか、ター
ソンの所で形勢を見てゐる始末だ、でラスト諺
早君ゆつくり泳いで歸つて来た、之で辛うじ
て四點を得た。

斯して我等は商船を抑へたのだ、昨年の復
讐をしたのだ、しかし我等は之に満足しては
ならない、新なる敵濱中、山師、修造が居る
ではないか、彼等をも葬らなくてはならぬ、
そして縣下百全圖に覇者たらん事を望まなく
てはならない、最後に諸先生の御指導と熱誠
なる應援を感謝す。

H Y 生

山口縣水上競技大會

九月拾二日午前八時半、水泳選手十名は金
藤先生引率の下に校長先生並諸先生の熱誠な
る應援の言葉を後に一路晴の戦場鴻城目ざし

て自動車を驅つた。

明れば十三日、天氣殊の外麗しく我等選手
の意氣正に天を衝かんとす、九時入場式、愈
々競技開始の合圖は鳴つた、場内アナウンサ
ーは聲朗にプログラムの第一、二百米リレー
豫選のコースナンバーを報じて満場の觀衆を
熱狂興奮の渦中に流し込んだ。

A組、第二コース藤本、第三コース萩中、
第四コース柳中、第五コース大津中、而して
萩中のオーダーは、藤本、井上、諺早、吉賀
の順である。

呼ばれた各校の選手は各岸壁の上に立ち姿
勢を作つて合圖を待つ——「用意」ズドン
忽ち響く銃聲一發、と聞一髮五名は岸壁を蹴
つて海豹の如く飛び込んだ——此
レースこそ最も我等の得意とする所である、
強敵山師をも抑へんとする此のレースだ、豫
選位に負けて堪るか、案の如く悠々と泳い
で山師に一步譲り入選。

B組ありて直に二百米平泳豫選、昨年慧星
的出現により他校の心懸を寒らしめた、先輩
磯野君（現在は日本の選手になり其の將來が
期待されてゐる）の後を引繼ぐに恥しからざ
る新人土田B組に出場、C組に金子出場、土

田難なく二等に入選するも金子惜しくも落
選、君の日頃の練習も報いられたかつた事は
遺憾である。

續いて四百米豫選、本校からは快男子諺早
藤本及田中の三君出場、諺早、藤本二人は一
等、二等を狙ふのだ。豫選などほんのウオー
ミングアップの積りに泳いだ、そして田中も
悠々二等で入選した。次は百米豫選、此は我
等の最も苦手とする所である、本校からは井
上、小田二君出場井上よく頭張り三等にて入
選小田は試合に馴れない爲か又は練習の日の
浅い爲か遂に落選、此の機に一層奮勵されん
事を望む。次は八百米豫選、藤本難なく入選
するも田中途に落選、一層練習されん事を切
望す。青年の百米ありて直に二百米豫選とな
る、本校からは諺早、松山出場、諺早悠々一
等にて入選するも松山遂に落選、惜みても餘
りありだ。

直後、百米背泳豫選、吉賀、井上出場吉賀
一等にて悠々歸り又井上も二等にて入選すれ
ば選手一同喜色満面、決勝に於てベストを盡
さん事を誓ふ。

午前中の最後のレース八百米リレーも悠々
一着にて入選し他校の心懸を寒らしめたのも

痛快である、午前中は全て豫選ばかりであつ
たが愈々午後より決勝準決勝となつた。

午後一時半、四百米自由型準決勝が開始さ
れた、諺早、藤本二君又々大飛躍をし精銳ばか
りの中に於て断然他を抑へ二人とも入選した
が田中は遂に落選、實に残念な事だ。

次は百米自由型準決勝、井上練習不足の疲
勞（君は病氣の爲夏休中充分練習が出来なかつ
たのである）にも拘、勇を鼓して戦ひた
るも不幸にしてタツチの差で破る、實に惜し
い事であつた、が君の努力は正に尊敬するに
値するのである。

斯くて豫選準決勝告了れば喉乾るは決勝の
みである。正に二時十分、待ちに待つた二百
米平泳決勝は遂に開かれた、土田脚氣の體を
提げ直ぐ迄今日の戦場に臨まんとして推して
出場したのであつた、其だけに君の氣は緊張
し闘志満々たるものがあつた、……「用意」
ズドン！岸壁を蹴つて飛躍したる六名の闘士
は負けじ劣らじと互に熱泳又熱泳、白い飛沫
を上げて物凄くビツチを上げて泳いでゐる、
五十……百、土田山師の蔵尼（本縣に於ける
ベストのレコードホルダー）にすこし後れ
て商船岡田と平行に泳いでゐる、百二十五……

百五十、相變らず一等は蔵尼、二等は西重（
山師）、三等、四等は土田、岡田が争つてゐ
る、百七十五、土田偶然岡田を離した、そし
て二等にぐんぐん肉迫して行く。「土田頑張
れ」……あと十米だ……土田もさすが疲勞して
来た、無理もないが三等で岡田を完全にリ
ドして二等に肉迫した努力は偉大である、斯
くて此處に始めて四點を獲得した。

「二百米リレー決勝」とアナウンサーが報
ずれば、各校の選手は燃ゆるが如き闘志を、
さすがに隠し切れず待つてましたとばかり元
氣よく立上り岸壁の上に列んだ。

「用意」ズドン！は鳴つた、各校の精銳に
て作れるチームばかりである、其だけに接戦
を免れない、見よあの接戦を、一等山師に後
れて一米半ばかり後を萩中、商船、豊中が争
つてゐる。即ち藤本他校二名と列んで歸つて
来た、二番井上長驅を以て岸壁を蹴る、「二
十五」ターン「三十」依然として三名は争つ
てゐる、此間に二米ばかり前を山師はグンダ
ン泳いでゐる、あと十米、井上裕二名に先ん
じて三番諺早に譲る、諺早飛込めば商船各校
に後る事約一米、柳中約半米、もう大丈夫だ
……「諺早山師を抜け」……が山師も去るもの

差を付けんとして泳ぎに泳いでゐる、かくし
て山師にすこし後れて歸り、ラスト吉賀に譲
る。と、吉賀断然柳中、商船をリードし「二
十五」のターンでは山師の直後を追ふてゐる
「三十」……「三十五」もう「一息だ頑張れ」
あと十米……五米……其處だもう一息だ、山師
を抜け……が見てゐるものは如何ともし難い、
遂に約半米の差でゴールイン。此爲日頃の練
習時程レコードが出て居れば優に勝つたの
であつたが遺憾な事である。

「八百米自由型決勝」

「藤本どうしても山師藤田を抑へ」と勵ま
れつゝスタートに付く、彼藤田とは本縣に於
ける長距離の覇者である、そして彼は又、今夏
關西に於ける八百米の代表選手として出場し
た……、お、見よ彼の物凄くストロークを
彼は吾藤本及田村（山師）をぐんぐん離して
ゐるではないか、彼は一體人間だらうか、
「四百」早や二番三番は彼に五十米も先んじ
られてゐるではないか。「藤本もすこしスピ
ードを出して呉れ」と心に思つては居れど儘
にならぬが浮世の常か、「六百」藤田此時二
等田村を七十ばかり、藤本に百米ばかりリ
ドしてゐる、がラストに藤本も頑張つたが彼

勢の爲か遂に三等でゴールイン。此の時篠田のレコードは萩中の八百米リレーに匹敵するやうな物凄さだ、斯くて此度にも又貴重な四點は得られた。

→四百米自由型決勝

本校からは諫早藤本二君である、「諫早どうしても一等を頼む」と選手一同に見送られ二人は元氣よく岸壁の上に立つた……、ビストルが鳴るが否や飛び込んだ六名は接戦又接戦、泉(山師)諫早孰れが勝つか？、泉勝たば全部山師に一等を抑へられる、諫早勝てば彼等の野心を打ちのめす譯だ……、「諫早！藤本！」今二百米位を泳いでゐる、そして諫早は泉をすこし離してゐる、藤本は三等四位を争つてゐる。「二百五十」「三百」依然として諫早トツプ、泉セカンド……、アツ！藤本が四等だ「藤本頑張れ」と見ているものが必死となる、だが相手もさる者ぐんぐん離さんとす、「三百五十」泉、諫早を抜かんとして段々スピードを上げた、三百七十五「諫早ビッチを上げてぐんぐん抜く、と泉も之に肉迫す。白い飛沫は飛ぶ、プールの水は涌きかへる、正に肉弾戦だ……、遂にあと五米となつた、そして諫早が完全に泉をリードし

て一着、二着泉、三着工藤、四着藤本の順で我が校が勝を制した、そして此處に一舉十點を得た。

「百米背泳決勝」

吉賀、井上二人勇しく岸壁を持つて合圖を待つ、「用意ズドン」仰向けに飛び込んでスタートを、美しいフォームである、「二十五米」ターン「五十」吉賀、井上各四五等だ、前にはバツクのナンペーワ、山師眞鍋、同見玉及山中上野等皆一流選手ばかりだ、が吉賀、井上とも奮闘以て之を抜かんとせしも遂に空しく、仲よく四五等で歸つて來た、其でも五點を稼いだ。

「二百米自由型決勝」

諫早一人きりだ、四百に出で未だ間もないのに早此のペースだ、君もさすがに疲勞を感じ出した、だが我等は萩中健兒だ、疲勞を物ともせず出た君や男。

合圖は鳴つた、見よ諫早は物凄いストロークを見せて一、二等を争つてゐるが、君のライバルは本縣水泳界に君臨せる師範西崎だ、恐るべき此の強敵、君倒るる彼を倒すか、必然此處に大接戦が展開されることは免れないやがて百米位になると西崎猛烈にスピードを

上げて諫早を牽制すれば、諫早もさきさきと之を追ふ、が最後五十米頃になると段々諫早が疲れた、そして師範中山が肉迫して來た、今は萬事休す、遂に三等でゴールインあゝ如何に此の戦が華々しかりしか拙文の表現し能はざるを悲む。

「八百米リレー決勝」

「愈々最後だ」「皆自重してやれ」と互に勵しながら堂々と乗り込む、大商、豊中、萩中、柳商、山師の順にスタートにつく。

恐るゝは唯大商、山師のみだ、他は問題外だ吾々はどうしても大商は抑へなくてはならぬ、昨年の秋の復讐は春にした、が再び彼等をして起つ事能はざらしむる迄に罪なり、そして明年は又山師をも倒したい、そして縣下否全國に覇を唱へたい、之が我等の大望だ……スタートは切られた、と見るや何に向つて邁進する態の如く、一線を山師、萩中、大商、柳商が此處を先途と必死になつて泳ぐ。何と物凄い接戦だらう、柳商侮るべからず、彼等の猛烈な追撃を見よ、斯てトツプ松山幸うじて三等で歸れば、二番井上美しく水を切つて大商を追ふ、此間に早山師は大商、萩中を十米位抜いてぐんぐん先を行く、井上必死に泳い

の熱心なる應援を感謝し、水泳部選手諸君に母校の爲益々活躍されん事を望む。

HY生記

武道部

一月十日より同十九日まで十日間、剣柔兩部の実稽古を行ふ

一月二十日 寒稽古後武道大會を舉行、並皆勤者及精勤者に賞状を授與す

五月九日 武道小會舉行

七月四日 武道大會舉行

九月十八日 武道小會舉行

柔道部

京都武徳殿演武大會

昭和六年七月下旬京都武徳殿に於て第三十二回青年大演武會開催せらる。左に本校選手

の成績を述べん。

二十八日 個人試合

×(本校)	京都農	前田
×(本校)	京都立命館中	小河
×(本校)	京都西	小西
×(本校)	石ヶ谷	矢次
×(本校)	矢次	

○(大阪茨木中)	山藤
○(本校)	重藤
○(滋賀彦根工)	阿部
○(本校)	山部
×(三重尾鷲中)	仁保
×(本校)	保屋

二十九日團體試合

第一先鋒(本校)阿部 × 杉中(滋賀虎)

二 後藤△ ○ 梶

中 小河○ △ 大村

副將 仁保○ △ 水口

大將 重藤△ ○ 山田

△ 葉あり

第一捕回戰 仁保 × 堤

第二捕回戰 小河△ ○ 山田

敵の大將初段他は一級と云ふ陣容に對して、我等は、出賽前に副將今井君練習中腰を痛め遂に出場不可能となつたため、メンバーの順位に頭を悩ましたが、捕員阿部を先鋒に入れ、メンバー全體に大變更を行つた。

先鋒阿部、力戦大いに努めたが、遂に引分

次將後藤。初めての出場にすこし上り氣味おまけに敵は實力副將のもの立上るや否や掛けた内股に惜しくも破る。後藤君には立上り際の油断が、もつと直接に云へば敵と組み

臨、手の持ち際の注意が必要と思ふ。此の度の如きは、もつと敏捷に敵をつかまへて元氣よくやる必要がある。もつと闘志を持つて貰ひたい。未だ三年生、これから練習次第でいくらでも延びると思ふ、切に自重を望む。中堅小河、後藤の敵と立上るや否や大外で「業あり」残る所を左鈎込腰に見事一本は鮮やか。君も三年、後藤と共に將來の萩中柔道部を背負つて立つ人、切に奮闘を祈る。

副將仁保。本校柔道部の第一人者、立上るや直ちに敵の右脇を持鋭く引きつけ、大腰にて軽く一本は流石。

大將重藤。柔道部切つての強力。敵の大將初段のものを向に廻はし、大いに通張り引分前惜しく押込まれる。

あまりに自重し過ぎたためか、平生の彼としては、あまりに消極的な戦法をとつたと思ふ。今すこし自由に大膽に振舞へなかつたかと思ふ。闘志もあり力もあり、体力もある事故、來年度の奮闘こそ望ましい。

これにて敵味方共二點半の同點。規定によつて代表者戦にうつた。

第一代表仁保と敵の二將堤の戦。堤尻を引いて持たせず、徹頭徹尾逃げ廻るを、仁保追撃

に追撃して體落にて業ありを取り直ちに押込二十秒と宣せられて、間一髪と云ふ所で逃がられ、無念の涙を吞んで寧ろ長蛇を逸した。第二代表小河。敵大將山田初段と再戦、奮戦力闘敵の左拂腰を返して「業あり」をとり。そのまゝ時間来て、引分と見えたが、その寸前惜しく左大外刈に破れた。

終始息づまる様な接戦。しかし全體として見れば彼に二三の長あり、試合上手と、場馴れのした敵は割合に闘志が燃えて居た。體力實力も我校勝れて居り乍ら破れた原因は、相共に研究して、將來の大成をはからなければならぬと思ふ。

山口縣大育大會

山口縣體育協會主催に依る、山口縣男子青年中等學校の、體育大會に於ける、我柔道部は山口師範對小部農業の闘を以て、十月十一日午前八時三十分、闘の幕は切つて落されたのである。本年度の試合方法は例年とは違つて第一第二第三班に分ち、第一班には山師、山中、下商、萩商、下工、周中、小農、第二班には柳中、豐中、宇工、徳中、萩中、多中、徳商、第三班には、防中、鴻中、宇中、下中大商、岩中で總校數二十校なり。かくて、我

校は強敵徳中、尙昨年の優勝校宇部工を、向

に廻して、闘かはなければならぬのである。試合は進んで、遂に我々第一回の、腕を表はすべき時が來たのである。第一回目相手は何校か本年の優勝候補校たる、徳山中學である。呼出しも済んで、今や審判の命令を待つのみである。相手の様子を伺えば、敵は全部黒帯をしめてゐる。味方はと見れば、全部白だ。此處に於て味方の戦友はすこしおじけをつけた。「はじめ」遂に組んだ、組んだと思つた。もう寝てしまつた。我々の一番不得手とする要領だ、かく所に於て、押込三十秒と云ふ審判の聲がする。あゝ戦友は押込まれてしまつたのか。遂に一本の宣告は、所々にて起つた。第一回戦は全滅だ。然し只我が大將仁保君は敵の大將二段と組んで、よく頑強、終に引分を取つてくれた。仁保君の功績や大なりだ。次は、亦々強敵宇部工とだ。此の戦も徳中と同様に仁保君の外は全部敗北。宇部工も大將より補缺に到る迄全部黒、此處に於て我々は最早強敵はなし、必ず點を入れる事を約し大いに勵まし合つて次の戦を待つたのである。

第三戦、敵は柳中、帯の色はと見れば大將の外は全部茶だ。大將は云はずとした黒帯だ

剣道部

京都青年演武大會

炎夏天をこがす昭和辛未七月下旬、京都武徳殿に於て歴史的光輝ある第三十二回青年演武大會が二十五日より一週間にわたつて舉行された。

七月二十五日、その日は大會最初の日、又僕等剣道の部の者にとつては個人試合の日である。全國より馳せ参じたつはもの無慮二千有餘（これは剣道部だけです）遠きは九州の南端鹿児島、朝鮮の首都京城、或ははるばる海をわたつて關東州大連より「我こそは」と馳せつけてゐる。

午前九時より御影影奉拜式並びに大演武會開會式が行はれていよいよこゝに大會の幕は切つて落された。

式後、剣道形、華刀術形、杖術等があり、それが終つて東西四組に分れて試合に入つて行く。試合は進んで行く。

戦はん哉！時至る！やがて第四十四回の堀君を初めに萩中健兒の意氣は次から次へと遺憾なく發揮されて行つた。次に其奮闘振を示して見よう。竊は本校選手は新谷（初段）

業は立業、よし此の戦は俺達の物だ。審判のはじめの聲がかゝると、兩選手は威勢よく立つた。組んだと思つたら「一本」と云ふ、一入高い聲がした。見れば我が副將小河君が敵を君の得意の大外で倒した所だ、亦しても一本續いて一本、私も一本取らなければと、大いに攻めたが遂に引分けた。此の戦に於て仁保君、小河君、阿部君の功績に依つて貴重な三點を獲得し得たのである。後藤君もおしい所で引分けとなつた。此れですこしばかり意氣が擧つた譯だ。次は多中、此時私は吐氣を催したので、吉賀君と廻りました。此の戦はごく平凡で、大將を初め先鋒迄全部引分。次は徳商、彼は如何なる策戦か、第二先鋒と中堅との奮闘に依つて亦も貴重な一點を得ました。然して阿部君が敵に一點を譲りました。然し阿部君の相手は初段だつた爲阿部君すこしあがつてゐました。他の者は引分終に最後だ。最後はかなりの強敵豊浦中學。彼等は將副將第二先鋒が初段で後は茶帯、我々は依然として白帯、然し我々選手はもう恐れずに進んで行つた。組んだ、誰もよく頑強つてゐる。此の調子で行けば、よいだらうと思つてゐた

らやつぱり業の相異の爲か、阿部君が敗れ、次で小河君、吉賀君が敗れたが吉賀君は先の徳商との闘の時君のきゝ腕たる左腕を痛めた爲に敗れたので、業に於ては勝ることも劣つてはなかつた事を私は斷言す。かくして、終に我々は四點を勝得て苦しき戦友の胸中を慰め合ひながら宿に引歸つた。此の日矢次君は下柄を起されて出場出来なかつたのは實に遺憾な事であつた。第二班の一等は徳中、宇工で何れも十八點、二等豊中、三等柳中、四等萩中、徳商、五等多中である。此の戦に於て我々が敗倫の憂き目を見たのは、第一我々平素の練習不足もあるが、他校と接する機会が少き爲、亦試合なれのしない爲、他校を恐れ且舉りし爲ではあるまいかと思ふ。第二には色帯のない爲と睡眠の不足なりし爲と思ふ。故に今後柔道に志なされて、選手となられし諸君は、他校と接する機会を多く作られ、充二分に練習（殊に寝業）なされて、戦日の先夜は食物に注意なされて、充分睡眠なされる様にして、我が萩中の柔道部の名譽を擧げられん事を、選手一同を代表してお願い致す次第であります。

Y生記

岡本(二級)をのぞく外は全部五人共三級申込であつた。

個人試合

- (萩) 奈良十津川中 堀政一(龍手)
- (萩) 大阪泉尾工業 水津清信(面)
- (萩) 愛知 小牧中 林正典(龍手)
- (萩) 愛知 小牧中 柴田豊勝(面)
- (萩) 兵庫姫路商業 阿武正昭(面)
- (萩) 奈良奈良商業 岡本益亮(面)
- (萩) 滋賀 今津中 新田登(面)

た。唯意氣をもつて、随よりも意氣を以て「勝つ」だけの事である。話のついでには「明日は勝たうぞ」、「さうだ、明日はきつと勝つて見せるぞ」となり、茶のたし具合で「これは運がいゝぞ、明日はきつと勝てるぞ」とまで言つて勵まし合つた我等の意氣は其盛んな事思ひ知るべしであつた。

明くれば二十六日、今日は昨日より一層重大な團體試合の日である。腕は鳴る、意氣は高鳴る。試合は個人試合の時と同じく四組に分れて行はれた。終に待ちに待つた呼出がかけられた、「山口縣萩中學居られますか」と言はれた時若き青春に躍る我等は血のほとばしるのを止め得なかつた。第一回戦は香川縣志度商業と組んだ。その勝敗や果して如何?

- 萩 中(勝) (負) 香川志度商業
- 大將 水津(面) ×石床 清
- 副將 阿武(面) ×長谷川政雄
- 中堅 新谷(面) ×鎌田 貞雄
- 第二先鋒 岡本(面) ×佐々木哲次郎
- 先鋒 木藤(面) ×岡田 宗一

第一回戦で彼等と同じく、やがては我等も同じ運命に會はねばならぬが、悲憤の涙に暮れねばならぬ者百三十數校八百餘名の多きに及んでゐる。これ等の者を思ふ時我等は幸を謝せねばならぬ。

勝つて兜の緒をしめよ。我等は第二回戦を目前に控へて色々の想像をたくましくするのであつた。昨年も一昨年も二回戦で破れた。二回戦で勝つたら先生も喜ばれるにちがひない。まして三回戦に勝つたらどれだけ喜ばれるだらう。又優勝戦には行かなくても五回戦あたりまで行つたら。何れも、勝つて見せるぞ、少くとも三回戦までは行つて見せるぞ、さうなつたらついでに三回戦もきつと勝つてやるぞ。我等は既に二回戦は勝つたものにしてゐる。どうして敗戦を豫期しやうか。相手の滋賀、八幡商業の初段連中なんか眼中になかつた。初段が何だ。中には申込初段も居るから。」

やがて呼出しがあつた。我等は勿論必勝を期して場に臨んだ。誰ぞ期せんこの成績を。

- 團體試合 第二回戦
- 萩 中(負) (勝) 滋賀八幡商業
- 大將 水津(面) ×小野 英輔

- 副將 阿武(龍手) ×岡中 光三
- 中堅 新谷(面) ×馬場 剛
- 第二先鋒 岡本(面) ×喜多 茂
- 先鋒 木藤(龍手) ×木村 啓吾

嗚呼、萬事おわんぬ。我等の豫期ははかない過去の夢とかはつた。其原因は我軍の弱いのでもない、敵軍の強いのもあるまい、唯弓矢の神の見放し給うたのであらう。空しく他の期待にそむき、文己にもそむき、創年と同じ道を踏んだ我等は悲憤の涙に泣き暮れた。

二十七日、この日は我等には直接關係はないが第三回戦から優勝戦まで行はれた日である。即ちこの日が創道之部の最後の日であつた。

我等は最善を盡した。静かに考へてもこれ以上の最善は盡されまい。實實義勇百萬一心の校訓に恥ぢる所なく、眞に我中健兒として正々堂々と戦ひ、其眞價は十分發揮された。即ち我等が買いた所一途に意氣にある。この點他に比して勝るとも決して劣る事はない。結果として餘り劣しくないのは腕の上での間題でなくて試合不馴の點にあるのであらう。我等は最善を盡した以上負けても悔ゆる所はないのである。

「失敗は成功の基」とは御幣があるかも知れぬが、我々は幾多の艱難辛苦を経て初めて光明を見出すのである。今我等萩中創道部は艱難の道中にある事数年、明年こそは榮光に輝く曙を見出さねばならぬ。我等はかくならん様に身を賭して奮闘努力せん事を誓ふ。

猛夏にも拘らず熱心に御指導下さつた諸先輩に厚く感謝しつゝ擲筆。

様で本校は二十九點を得て西部で五等となつた。西部で一等は防中で點數四十六點、二等は山中で點數三十八點、三等は下中で點數三十三點、四等は豊中で點數三十一點、五等が本校、鴻中、柳中の三校で點數二十九點、以下略す、であり東部では下商一等となり三十九點を得、山師は二等で三十八點であつた。本校選手得點表

山口縣體育大會

昭和六年高天肥馬の候十月十、十一日兩日例年の如く縣體育大會が行はれた。

十日朝先生を初め生徒諸君の絶大なる後援に必勝を期して柔道部と共に一路山口に向ふ山口に着きては直に高商のグラウンドに競技部の應援に行く。競技部は三等だ。明日我等と奮戦せん事を約して萩に歸つて行つた。

明くれば十二日、選手は朝早く起き一同八坂神社に参拝して武運長久を祈つた。いよいよ戦の幕は切つて落された。所は吾が創道部は高商の武道場だ。

本年は試合は一日で東と西の兩部に分けられて居る。参加校は東西合して二十四校、本校は西部で十二校と組んだ。試合成績は次の

- 大將 水津清信 ▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
- 副將 阿武正昭 ▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
- 新谷 澄 ▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
- 楊井 茂 ▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
- 先鋒 田中健治 ▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
- 補員 中村哲作、三浦尚彦

右の如く諸君の御期待に反して餘り良い成績は得られなかつたが午前には調子が悪く大商豊中に勝つたのみであつたが、午後は調子よく僅か一校柳中に破れたのみである、午前には午後の如き成績であつたら優勝も出来たかも知れないと口惜しがつたが、しかたがなかつた。

一等の防中と點數に於ては差は十七點で大きい様であるが實力は殆んど同じであるが、たゞ本校は試合が下手と言ふことゝ落着が足らないと言ふ事が敗れた主因であらうと思ふ。後で防中と下商との決勝戦を見ましたが其の時も又よく落つて居るなど言ふ事を感じた。もう一つ試合には思切りと前進して有利の地を占める事が必要であると思ふ。どうしやうかと迷つて居る時に打たれる事が非常に多く、又例へば上小手を打つても審判に其が見えない時には取らない事もあるので、有利の地位を占める事と聲を出す事が必要である。以上の諸點に注意して練習して優勝の榮を得られん事を願ふ。

國民の覺悟を明らかにせしものとす。プログラムは左の如し。

二、心 四ノ三 那須 武雄
廿三、教育勸語と我國家 二ノ二 横山 岳朗
廿四、青年の覺悟 五ノ二 中野 伴作
廿五、最善の努力 三ノ三 玉井 友世
廿六、我等の恩人 一ノ三 岡 敬太郎
廿七、何故教育勸語は發布されしか 一ノ三 森本 英雄
廿八、御親觀諸感 五ノ三 森澤 陽亮
討論、現代青年に宗教は必要なりや 四、五年生一同

終りで失禮ではありますが高等學校の瀧口さんを初め先輩の方々にお世話になつた事を紙上を以て厚く御禮を申し上げます。終り

九、教育勸語につきて 三ノ三 香川 恒政
十、人生の眞意義 四ノ三 依 光雄
十一、御親觀を受け 五ノ一 藤井 清規
十二、心は新なれ 二ノ三 中原 芳美
十三、障 五ノ二 來島 秋介
十四、七難八苦 二ノ一 田中 政樹
十五、眞劍なる生活 一ノ三 井町 又之
十六、忠孝と愛國につきて 三ノ二 都築 碩宗
十七、偶感 伊藤 先生
十八、光榮に浴して 五ノ三 田村 忠彦
十九、教育勸語と我國の教育 三ノ二 山田 正彦
廿、希望 五ノ三 山内 清繁
廿一、人類愛の大理想 三ノ一 荒川 英春

一、どうせ生きるなら 河村 一次
二、開志過多の弊害 岡藤 宗次
三、吾が國語を愛せよ 大山慶太郎
四、活動生活 田中 博
五、國體觀念の振興 中村 松枝
六、偶感 河野 虎一
七、偶感 那須 武雄
第四學年 五月四日
齊藤 孝正
田中 典夫
都築 碩宗
荒川 英春

辯論部

昭和五年十一月廿九日 教育勸語演説四十周年紀念辯論大會を本校講堂に於て開催す。此の辯論會に當りては我教育勸語の演説されし理由を明らかにし、當時を追想して以つて

廿二、希望 五ノ三 山田 正彦
廿一、人類愛の大理想 三ノ一 荒川 英春

一、因はれたる心 二、支那 三、偉人 四、生きよ精神的に

五、興國の民族と亡國の民族 田坂 興道
六、時勢に鑑みて英雄の出現を待望す
七、努力 山田 正彦
八、計畫 玉井 友世
九、克己 清水 忠夫
十、敢へて四年生諸君に忠告す 中村 善作
十一、武士道 佐々木軍治
十二、感想 下間 先生

五、大西郷と勝海舟 西本 實
六、我等青年の心願 能美 忠廣
七、時とはどんなものか 相島 義夫
八、犧牲 永田元三郎
九、海外に雄飛せよ 本石 光雄
十、人類の恩人ジェンナー 松尾 義男
十一、細事が大事 山下 誠一

十六、時は金なり 伊東 輝典
十七、金貨のつぼ 赤木 登
二十世紀初りて以來茲に三十有一年を経んとす。かくて文明愈々進む今日、辯論の必要なるを何人が知らざらん。實業に、政治に、其の職業の如何を問はず、辯論の才能は一日だも之無かるべからず。乞ふ、我愛する森中健男兒の益々此の道の爲に努力されんことを

第三學年 五月五日
一、國家の現狀と若人の使命 田吹 敏郎
二、人道の勇士 富田 義治
三、努力 田中 政樹
四、魂よ甦れ 横山 岳朗
五、復活の發見 伊東 美一
六、右の目と左の目 岡 爲夫
七、亡び行く民族 花田 一雄
八、乃木大將の遺訓 寺島直太郎
九、金と聖書 横山 圭治

第一學年 五月五日
一、偉人の行跡を 百濟 親雄
二、ハンスの寶 伊東 裕郎
三、時 淺原 昌倍
四、八丁念佛團子刺 杉原 大泰
五、山口縣に就て 杉 春二
六、今日 山中 健一
七、中學生となつた我等の覺悟 吉屋 竹治
八、オ化ケと幽霊 神村 正
九、此の春此の少年の時 山川源次郎
十、眞劍の力 田村 克介
十一、中江藤樹の母 石村 豐徳
十二、かなだらひを盗んだ大根屋秋山 實
十三、貧乏の日本 花田 博吉
十四、一行當議平氣でやつてゐる間達 平田 嘉男
十五、大關秀吉はなぜ偉くたつたか 山口 實

（清水生）



昭和五年度校友會費收支決算報告

經常費（收入）

一金參千貳百九拾貳圓貳拾貳錢也

總收入高

金九拾四圓九拾參錢也

金五拾七圓九錢也

金四百七拾貳圓貳拾四錢也

金貳百圓也

開校式

卒業式

修學旅行費

立替金

年賦償還金及利子

以

上

翌年度へ繰越

基金之部（收入）

一金千貳百五拾七圓六拾八錢也

總收入高

支

出

一金貳千八百參拾七圓六拾七錢也

內

譯

劍道部

柔道部

球技部

水泳部

雑部

賞部

紙類

用

金貳百貳圓九拾錢也

金貳百貳圓貳拾參錢也

金九拾六圓四拾七錢也

金百五拾貳圓八錢也

金百五拾貳圓八錢也

金九拾六圓四拾七錢也

金百五拾貳圓八錢也

金百五拾貳圓八錢也

金九拾六圓四拾七錢也

金百五拾貳圓八錢也

金百五拾貳圓八錢也

金九拾六圓四拾七錢也

金百五拾貳圓八錢也

金百五拾貳圓八錢也

金九拾六圓四拾七錢也

金百五拾貳圓八錢也

金百五拾貳圓八錢也

金九拾六圓四拾七錢也

金百五拾貳圓八錢也

金百五拾貳圓八錢也

金九拾六圓四拾七錢也

金百五拾貳圓八錢也

金百五拾貳圓八錢也

金九拾六圓四拾七錢也

金百五拾貳圓八錢也

金百五拾貳圓八錢也

金九拾六圓四拾七錢也

金百五拾貳圓八錢也

金百五拾貳圓八錢也

金九拾六圓四拾七錢也

金百五拾貳圓八錢也

金百五拾貳圓八錢也

金九拾六圓四拾七錢也

編輯餘録

□今度は特別記事として、舊特別會員安藤紀一先生と、校醫山本勉彌先生から玉稿を戴いた。厚く御禮を申上げる次第である。

□時の記念として本年六月十日に全校生徒に時に關する作文を課し、その優秀作品を時の記念の章に收めた。

□卒業生で目下臺北高商にある三島將君はこちから依頼した原稿を期日に間に合はずと見て内臺飛行郵便に托して送つて來た。三島君の母校愛を思ふ。□巻頭の特別記事、時の記念、生徒作品卒業生通信、旅行記、校報、校友會報のカットは例の通り水沼先生に御願したものである。カットの趣味も鑑賞して貰いたい。

防長勤王史の要領

附録

防長勤王史の要領

安藤紀一

胡亥謹王史の要贈

防長勤王史の要領

安藤紀一

防長人の勤王は、明治中興に與つて功のあつた事は申すまでもない。吾々は、先輩の此偉功を、國民の本分として抱くべき皇室中心主義の實行の模範とし、特に、萩では此事が郷土史の大部を占めて居るから、最之に注意を要する。さて、通常、學校生徒諸氏が、郷土史實の講談などを聞かれるのは、其一人一人の傳記が多い。處が、人物傳記を聞くには、其背景といふべき、其々の時代の狀勢と記憶して置かねば、林檎の書をかくとてその林檎の實ばかりかいて、林檎が盆にあるやうに、土地に墜ちて居るのやうに分らぬやうに、其人物の立場がよく分らぬ。従つて、其人物が、吾々の如何なる場合の範となるかが分らぬ。私は、今、右の通りの氣懸りの爲に、防長人が勤王事業に奔走した時代の様子を、極めて分り易く述べて、萩中學校諸君が、先輩の事蹟の話を聞かると時の豫備智識の一端に供へようと思ふ。但、これから述べる事は、私が自ら考へたので、世の人の未だ言はぬことであるから、考が當つて居るか否かは、歴史の先生の御判斷を受けられるやうに。

長防太守毛利敬親公の心を心としての二州人士の勤王の仕事の大成したのは、明治元年九月二十三日會津落城の時である。然らばその勤王の大成までに、幾何の時日を用ゐたか、私はそれは二十年間の歲月を經過したと思ふ。即ち、明治元年より二十年前に、敬親公が、藩校の明倫館の教育を改良せられた事が、勤王事業の始である。元來尊王は毛利の祖訓であるが、公の時に、この學館の規模が擴張せられ、文學には國學を加へて、皇國の國體を明にし、武藝には、形式を廢して實技を專とし、つまり、文武の學藝を、國家の實用の爲に修むることは、實に、此新館建設の嘉永二年で、私は、之を長藩の實教期に入つたと思ふ。

實教期に入りて、其翌年に、公は、格式上覽とて、武藝師の演技を視らるゝ時、吉田松陰先生の兵學講義を聞いて痛く

感ぜられた。それは、先生が、山鹿素行の武教全書の守城篇で、「大將が誠に籠る以上は、負くれば必ず切腹と心を御定めなさるべし」と云ふた事で、大將始め死を決し、一城でも一國でも、一應死地に陥らねば、戦に勝たれぬとの意である。是が、爾後十九年間、公が一日も念頭を放されぬ極意であつたと思はれる。この極意が公の念頭を離れぬ故に、勤王事業が困苦を排して成つたのである。それから嘉永六年に、浦賀へ黒船が來た。この以前にも、世は外國人の舉動に注目して居たが、黒船が來てから、國民が、日本人として、さて如何すればよいかといふ考が濃厚になつた。従つて、長藩人も同様に國民的自覺を起した。それで私は、こゝで藩の自覺期に入つたと思ふ。

自覺期に入つては、國民の思想が、外國人の五市を申出すに對して、之に應諾すべしの論と、之を打拂ふべしの論とが戦ひ、將軍の實行が勅命に違ふときは、國民は朝廷に従ふべきか、幕府に従ふべきかの議論も起る。

藩では、色々議論があつたが、松蔭先生の奉勅論遠略論は、最注意すべきである。然るに、安政五年に朝廷より密勅が下がつた。是を戊午の密勅といふ。その御主意は、「朝廷の意の通りに行はぬ幕府は相手にならぬから、諸大名に頼んで國論を定めたい。今は、外國の事は後廻にして、先づ國內の統一を謀らねばならぬ」と仰せらる。かうなつたので、長藩はもう言論の段ではなく、藩としての國家に盡すべき責任を生じた。之を私は、藩の責任期に入つたと思ふ。

責任期に入つては、公意を受けて天朝幕府の間を周旋した人は、周布政之助、長井維樂である。長井は攘夷論を取らず開國論を取り、その論を以て、朝幕の間を合體させようとしたが、周布は、先づ戦争しなければ、人心が堅くならず、従つて、國威も外に輝かぬと論じた。この周布の論が、彼の先づ死地に入るの意である。桂小五郎即ち後年の木戸孝允はこの時に、水戸藩士と約束して幕府を倒し時局を改建することを謀つた。高杉晋作は、勅を奉じて朝幕の間に周旋するよりも、退いて國力を養ふがよいと論じた。松蔭先生は、此期の始めに、長井の奔走の以前に刑せられたが、其門人が盛に長井の論を攻撃し攘夷説を唱へて、其勢當るべからず。そして、藩では、西洋兵式の講習が盛になつた。この勢で、文久二年七月に、公は、京都に於て、諸士を會して、評議の末、開國論を止めて、攘夷主義に一決し、「君臣漢川」の標語を作

つて、藩の方針とした。是がやはり周布等の唱ふる所、松蔭先生の、嘗て公の面前に講せし死中に活を見るの義である。是より、藩は、此の方針で進み、種々の試練を経た。それで私は、之を藩の試練期に入つたと思ふ。

「君臣漢川」の必死の標語によりて、京都に活動する長藩人は、他の諸藩の同情を得て、頗る評判がよかつた。文久三年になつて、五月十日を攘夷の期日と勅諭で極まつたのも、長州人の力である。然るに攘夷を好まぬ幕府方の勢力が、いつか朝廷で勝を占めて、長人が排斥せられて、長人は、禁門警衛の役を解かれ、七人の公卿を擁して國に歸つた。それが、八月の禁門の變といふ。その前五月には、長人が、勅諭通りに、馬關で、外國船を砲撃したから、その復讐に、英、佛、露、米、蘭、諸國の船が武裝して來たのが、其翌元治元年八月で、長人は苦戦し、一方、京都に對しては、排斥に遇ふ筈のない事を、朝廷に訴へると、奉勅始末書といふ長文を呈し、藩主の冤を晴さんとして、事、意の如くならず、遂に會津、薩摩等の兵と京に戦ひて散々の不利となるなどで、長人は、内外に敵を受け、藩主の官位は、朝廷へ御取上げ、京都戦争の責任で、彼の三大夫十一士は、罪せられた。それで折角の勤王事業も、跌きが出來て、破目が出來て、國內にも、是までの藩のやり方を非難する一派が起つた故、如何に治りが附くかが殆ど分らぬ。しかし、長人は、決して失望悲觀せず窮地に在つて氣益奮ひ、この困難を、天の與ふる試練と考へて、初念を貫徹すべく努力したが、遂に、慶應元年正月、大田の戦争で、俗黨倒れ、正黨勝ち、藩内の人心が始めて統一し、勤王事業の絲のもつれが整理することになつた。それで、私は、この大田戦争以後を藩の整理期に入つたと思ふ。こゝで重ねて述べるが、我が長藩の勤王事業は、前後二十年中でその内、

實教期は嘉永二年正月藩校明倫館の規模學制の改革より

自覺期は嘉永六年黒船來りて和戰の論が紛起してより

責任期は安政五年八月密勅が下りてより

試練期は文久二年七月藩論攘夷の方針に一決してより

○。整理期は慶應元年大田戦争の局を結びてより

といふ其合に、階段を逐うて進んで居た。そして其整理期に入ると、先づ武備を盛にし、山田宇右衛門、大村益次郎の力にて、兵制を改革し、是までの失敗に鑑みて、益々兵を練り、丁度土佐の有志者が薩長の不和を調停するに際し、海外の兵器購入の件を楔子にして三藩合體し、内では、諸軍隊を各要地に置いた。幕府では曩に京都の變の責を長州に著せて、罪を問ひ三大夫などの處分をもさせて、恭順をさせたが、今また、長藩の此の有様を見て、猶不穩の企があると認め、徹底的に懲す爲とて、諸大名に長州征伐を命じ、且藩主を廣島に呼出さうとした、それで藩主の代理、宍戸備後助が往つて立派に應接し、さて、慶應二年に、幕府方の諸軍が防長の四境を圍んで攻めた。此時の藩の君臣は、死に必死となつて戦ふた。敬親公の心が、彼の「籠城大將負くれば切腹」と覺悟せらるゝと同じに、士民は長防人民合議書といふ趣意書を各人懷中して、百万一心で働いた。その戦争が八月續いて後、長州人の誠意が朝廷にも知られ、公の復官復位と同時に、幕府討伐の密勅が下り、それから長藩の勤王事業は、順調に進んで、明治元年、伏見鳥羽の戦争、江戸進撃、北越戦争などとなり、九月二十三日の會津落城で、長藩の長藩たる使命が完全に履行せられた。

此勤王事業の二十年間、偉人傑士の前後に死せる者多きは惜しいこと。しかしそれが皆事業の進行に意義を有し、君上の爲に身を致した。敬親公も、三十一歳より五十歳まで終始健康で、その健康時代に、諸臣を統御し、君臣一體で此業を大成して、天朝の御依頼に答へ、先祖の訓意を全ふし、中道殉難者の志をも空しくせぬ様にせられた。私は、諸君が、此事實の大體を能く記憶して、先輩の事蹟を考へる爲の豫備智識とせらるゝやうにと願ふ所である。

昭和五年十二月十六日印刷
昭和六年十二月二十日發行

發行兼編輯者 山口縣阿武郡萩町 須子五郎

印刷者 山口市大字後河原第十五番地 小澤兵造

印刷所 山口市縣廳通り 山口響海館

電話二二三番

發行所 山口縣阿武郡萩町 山口縣立萩中學校校友會

